

鹿兒島県史料集(ⅩⅧ)

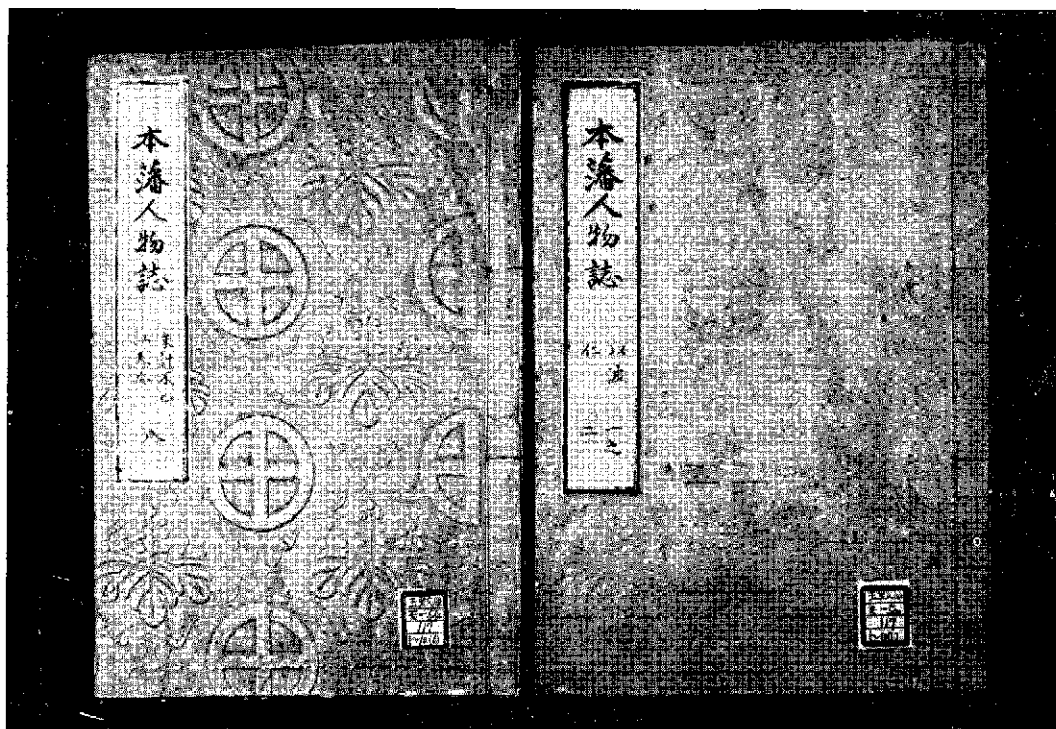
本藩人物誌



島津久光自筆本 (下里文庫) 鹿児島大学蔵



同上 内容の一部



十字紋表紙本 (三貝文印) 鹿児島大学蔵



同 上 内容の一部

## 刊行のことば

鹿児島県史料第十三集として、ここに「本藩人物誌」を刊行いたします。こんにちまで、別刷を含めて第十四冊目の刊行になるわけですが、いずれも県史料刊行委員の方々の並々ならぬご努力によるものであります。

本集は、本館蔵書を底本にし鹿児島大学教授桃園恵真先生が編集、校訂、校閲して刊行のはこびになったものであります。先生のお骨折りに対し、心から敬意と感謝の意を捧げたいと思っております。

県史料の編集事業は、県立図書館の重要事業の一つとして進められているもので、資料の保存ならびに研究者の利用に供しようとするものであります。また地方史研究をさかんにするための一助ともいう願いがこめられているものであります。

皆様がたのご研究に少しでもお役に立てば幸甚に存じます。

昭和四十八年三月

鹿児島県立図書館長

新納教義

## 例 言

- 一、本書は本藩人物誌十三巻十冊を収録したものである。
- 一、本藩人物誌は戦国時代を中心に、十五世紀半より十七世紀半までの約二世紀にわたって活躍した島津氏の一門、および家中の諸士のいろは順による略伝集である。
- 一、本藩人物誌は鹿児島大学付属図書館所蔵玉里文庫に三部、鹿児島県立図書館に一部所蔵されている。玉里文庫本のうち一部は島津久光の自筆本と思われ、くわしい朱注・書入れが行なわれている。以後便宜上久光自筆本と仮称する。いま一つの十字紋表紙本は久光自筆本を整理したもので、他の玉里文庫所蔵の十字紋表紙本と同じ体裁であるところから、玉里文庫の史料蒐集の頃すなわち明治初期の写本であろう。ともに巻末に「右本藩人物誌十三巻福崎某所著也天保十年己亥冬十一月二十九日援筆而至十一年庚子六月十三日写終源忠教蔵本」とある。他の黒網目表紙本五巻五冊は草稿本で未完である。県立図書館本は十字紋表紙本を忠実に書写したものである。本書はその体裁からいって久光自筆本を印刷に付することは困難であるので、県立図書館本を底本とし、久光自筆本と照合、修補訂正した。
- 一、本藩人物誌の著者については、前に述べたように福崎某とあるのみで、巻之一巻頭に「薩藩白鶴山人正氣編撰」、巻之十目録の下に「本府三僻堂主人謹述」とあるが、三者の関係は明らかでない。
- 一、玉里文庫本は平仮名書きであるが、本書は県立図書館本を底本としたため、その体裁にのっとり片仮名書きとした。
- 一、刊行に当たってはつとめて底本の体裁を存したが、都合により適宜改めたところもある。
- 一、漢字はできるだけ当用漢字に改め、誤りの明らかな文字については訂正を施し、明らかな脱字は(□□脱力)としたり、また嶋は島、ぢはヨリ、者はハ、也はナリ、ニはニテ、トはトモ、而はテ、ノはトシテ、候得共は候へトモなどのように改め、朱書は朱として「」を付した。
- 一、朽損または不明の部分は字數により□または□を用いた。
- 一、本書の校訂に当っては諸種の事情により正確を期し得なかつた点が少くない。今後の追補訂正を期したい。
- 一、底本においては各巻頭に掲げられた目録を、本書においては便宜上一括して巻頭に掲げた。
- 一、本書の校訂は主として鹿児島大学桃園憲真これにあたり、校正に鹿児島県立図書館古賀秋好が協力した。

目録

卷之一

伊集院	朱	〔一〕	入佐	朱	〔十一〕	飯牟礼	朱	〔廿一〕
伊地知	朱	〔二〕	池田	朱	〔十二〕	石坂	朱	〔廿二〕
伊勢	朱	〔三〕	和泉	朱	〔十三〕	石谷町田	朱	〔廿三〕
入来院	朱	〔四〕	壱岐	朱	〔十四〕	石原	朱	〔廿四〕
岩切	朱	〔五〕	伊丹	朱	〔十五〕	石神	朱	〔廿五〕
市来	朱	〔六〕	今井	朱	〔十六〕	伊鹿倉	朱	〔廿六〕
井尻伊尻	朱	〔七〕	指宿	朱	〔十七〕	伊作石見	朱	〔廿七〕
伊東	朱	〔八〕	伊佐敷	朱	〔十八〕	岩切	朱	〔廿八〕
稲留	朱	〔九〕	池上	朱	〔十九〕	岩山	朱	〔廿九〕
家村	朱	〔十〕	井上	朱	〔二十〕			

卷之二

八浜田	朱	〔一〕	林	朱	〔三三〕	三新納	朱	〔二一〕
畠山	朱	〔二〕	橋口	朱	〔三四〕	仁礼	朱	〔二二〕

卷之三

朱 <small>本</small> 北郷	朱	〔一〕	八別府	朱	〔二一〕	時任	朱	〔六〕
本田	朱	〔二〕	戸次	朱	〔二二〕	唐仁原	朱	〔七〕
堀之内	朱	〔三〕	刃牟木	朱	〔二三〕	富永	朱	〔八〕
本郷	朱	〔四〕	朱 <small>下</small> 東郷	朱	〔二四〕	烏井	朱	〔九〕
堀	朱	〔五〕	烏丸	朱	〔二五〕	富松	朱	〔十〕
法元	朱	〔六〕	遠矢	朱	〔二六〕	鳥原	朱	〔十一〕
星山	朱	〔七〕	富山	朱	〔二七〕			
芳仲	朱	〔八〕	徳永	朱	〔二八〕			

卷之四

朱 <small>字</small> 長寿院	朱	〔一〕	大田	朱	〔五〕	大河平	朱	〔十二〕
帖佐	朱	〔二〕	面高	朱	〔六〕	奥	朱	〔十三〕
中馬	朱	〔三〕	上床	朱	〔七〕	奥山	朱	〔十四〕
朱 <small>上</small> 井諏訪	朱	〔四〕	押川	朱	〔八〕	尾辻	朱	〔十五〕
大寺	朱	〔五〕	大山	朱	〔九〕	和田	朱	〔一六〕
大野	朱	〔六〕	鬼塚	朱	〔十〕	鶯頭	朱	〔一七〕
大島	朱	〔七〕	小川	朱	〔十一〕			

卷之五

朱 <small>カ</small> 川上	朱	〔一〕	神田	朱	〔八〕	勝目	朱	〔十五〕
樺山	朱	〔二〕	鹿島	朱	〔九〕	上村	朱	〔十六〕
桂	朱	〔三〕	汾陽	朱	〔十〕	海江田	朱	〔十七〕
鎌田	朱	〔四〕	川畑	朱	〔十一〕	柏木	朱	〔十八〕
川田	朱	〔五〕	甲斐	朱	〔十二〕	加世田	朱	〔十九〕
朱 <small>川内</small> 柏原	朱	〔六〕	川越	朱	〔十三〕	梶原	朱	〔二十〕
蒲生	朱	〔七〕	蒲池	朱	〔十四〕	鹿屋	朱	〔二十一〕

卷之六

朱 <small>吉</small> 吉利	朱	〔一〕	滝間	朱	〔五〕	田尻	朱	〔十六〕
義岡	朱	〔二〕	宅間	朱	〔六〕	竹内	朱	〔十七〕
吉田	朱	〔三〕	財部	朱	〔七〕	田上	朱	〔十八〕
吉富	朱	〔四〕	竹下	朱	〔八〕	徳軍武宮	朱	〔十九〕
吉井	朱	〔五〕	田中	朱	〔九〕	高橋	朱	〔二十〕
四本	朱	〔六〕	高木	朱	〔十〕	朱 <small>曾</small> 曾木	朱	〔二一〕
横山	朱	〔七〕	竹迫	朱	〔十一〕	園田	朱	〔二二〕
朱 <small>種</small> 種子島	朱	〔八〕	高山	朱	〔十二〕	染川	朱	〔二三〕
高崎	朱	〔九〕	谷山	朱	〔十三〕	朱 <small>上</small> 土持	朱	〔二四〕
高城	朱	〔十〕	田代	朱	〔十四〕	恒吉	朱	〔二五〕
武	朱	〔十一〕	田原	朱	〔十五〕	辻	朱	〔二六〕

黒葛原 朱〔四〕 長倉 朱〔四〕 中戸 朱〔十七〕  
 築地 朱〔五〕 成合 朱〔五〕 長田 朱〔十八〕  
 塚田 朱〔六〕 長峰 朱〔六〕 中野 朱〔十九〕  
 月野 朱〔七〕 中西 朱〔七〕 長沼 朱〔二十〕  
 土橋 朱〔八〕 中村 朱〔八〕 永井 朱〔廿一〕  
 津留多 朱〔九〕 中神 朱〔九〕 長谷 朱〔廿二〕  
 鶴田 朱〔十〕 長崎 朱〔十〕 永利 朱〔廿三〕  
 土屋 朱〔十一〕 長野 朱〔十一〕 長浜 朱〔廿四〕  
 図師 朱〔十二〕 南郷 朱〔十二〕 南雲 朱〔廿五〕  
 朱子 藤寝 朱〔一〕 中島 朱〔十三〕 鳴海 朱〔廿六〕  
 朱子 奈良原 朱〔一〕 中山 朱〔十四〕 中江 朱〔廿七〕  
 中原 朱〔二〕 永山 朱〔十五〕 奈須 朱〔廿八〕  
 中条 朱〔三〕 長山 朱〔十六〕

卷之七 (数字は全て朱)

朱子 村田 朱〔一〕 内田 朱〔六〕 久留木 朱〔五〕  
 村尾 朱〔二〕 上野 朱〔七〕 救仁郷 朱〔六〕  
 向井 朱〔三〕 植木 朱〔八〕 桑波田 朱〔七〕  
 村松 朱〔四〕 野村 朱〔一〕 楠元 朱〔八〕  
 村岡 朱〔五〕 野崎 朱〔二〕 久木山 朱〔九〕  
 宗像 朱〔六〕 野間 朱〔三〕 草道 朱〔十〕  
 馬渡 朱〔七〕 野添 朱〔四〕 桑原 朱〔十一〕  
 村山 朱〔八〕 野田 朱〔五〕 久木田 朱〔十二〕  
 奈田 朱〔九〕 野口 朱〔六〕 久木崎 朱〔十三〕  
 梅北 朱〔十〕 野畑 朱〔七〕 黒江 朱〔十四〕  
 朱子 上原 朱〔一〕 野本 朱〔八〕 柀木 朱〔十五〕  
 浦川 朱〔二〕 黒木 朱〔一〕 釘木 朱〔十六〕  
 宇都 朱〔三〕 久保 朱〔二〕 山田 朱〔一〕  
 宇都宮 朱〔四〕 黒田 朱〔三〕 薬丸 朱〔二〕  
 内山 朱〔五〕 隈岡 朱〔四〕 築瀬 朱〔三〕

卷之八 (数字は全て朱)

八木 朱〔四〕 安田 朱〔十〕 山内 朱〔十六〕  
 谷口 朱〔五〕 山鹿 朱〔十一〕 山下 朱〔十七〕  
 山口 朱〔六〕 山崎 朱〔十二〕 山之内 朱〔十八〕  
 山元 朱〔七〕 矢野 朱〔十三〕 安岡 朱〔十九〕  
 山本 朱〔八〕 山上 朱〔十四〕  
 山路 朱〔九〕 柳田 朱〔十五〕  
 朱子 町田 朱〔一〕 二渡 朱〔三〕 二見 朱〔廿五〕  
 松崎 朱〔二〕 福崎 朱〔四〕 五代 朱〔一〕  
 松浦 朱〔三〕 否笠 朱〔五〕 是枝 朱〔二〕  
 松田 朱〔四〕 藤崎 朱〔六〕 後醍院 朱〔三〕  
 丸田 朱〔五〕 福山 朱〔七〕 児玉 朱〔四〕  
 曲田 朱〔六〕 福永 朱〔八〕 江田 朱〔五〕  
 前田 朱〔七〕 古市 朱〔九〕 国分 朱〔六〕  
 前原 朱〔八〕 古河 朱〔十〕 郡山 朱〔七〕  
 牧野 朱〔九〕 古江 朱〔十一〕 甌 朱〔八〕  
 牧田 朱〔十〕 深水 朱〔十二〕 江夏 朱〔九〕  
 牧山 朱〔十一〕 深栖 朱〔十三〕 木場 朱〔十〕  
 牧 朱〔十二〕 藤井 朱〔十四〕 河野 朱〔十一〕  
 丸目 朱〔十三〕 深井 朱〔十五〕 郷田 朱〔十二〕  
 万膳 朱〔十四〕 深上 朱〔十六〕 穎娃 朱〔一〕  
 松下 朱〔十五〕 藤山 朱〔十七〕 江川 朱〔二〕  
 間世田 朱〔十六〕 藤見 朱〔十八〕 江浪 朱〔三〕  
 松元 朱〔十七〕 藤山 朱〔十九〕 江口 朱〔四〕  
 松岡 朱〔十八〕 古垣 朱〔二十〕 海老原 朱〔五〕  
 二木 朱〔廿一〕 二木 朱〔廿一〕 寺山 朱〔一〕  
 深野 朱〔廿二〕 深野 朱〔廿二〕 弟子丸 朱〔二〕  
 藤元 朱〔廿三〕 藤元 朱〔廿三〕 寺師 朱〔三〕  
 刈辺 朱〔廿四〕 刈辺 朱〔廿四〕 寺原 朱〔四〕

有川 朱〔一〕 赤松 朱〔十〕 荒木 朱〔十九〕  
 阿多 朱〔二〕 安藤 朱〔十一〕 浅江 朱〔二十〕  
 有馬 朱〔三〕 厚地 朱〔十二〕 阿蘇 朱〔廿一〕  
 赤塚 朱〔四〕 阿久根 朱〔十三〕 有屋田 朱〔廿二〕  
 赤崎 朱〔五〕 荒田 朱〔十四〕 青木 朱〔廿三〕  
 始良 朱〔六〕 精松 朱〔十五〕 綾部 朱〔廿四〕  
 安樂 朱〔七〕 有村 朱〔十六〕 荒武 朱〔廿五〕  
 秋永 朱〔八〕 朝倉 朱〔十七〕  
 愛甲 朱〔九〕 相德 朱〔十八〕

卷之九

生サ 佐多 朱〔一〕 西郷 朱〔十八〕 湯地 朱〔三〕  
 相良 朱〔二〕 迫田 朱〔十九〕 米良 朱〔二〕  
 猿渡 朱〔三〕 喜入 朱〔一〕 三原 朱〔一〕  
 佐谷田細田 朱〔四〕 肝付 朱〔二〕 宮原 朱〔二〕  
 鮫島 朱〔五〕 木脇 朱〔三〕 宮内 朱〔三〕  
 税所 朱〔六〕 木上 朱〔四〕 宮之原 朱〔四〕  
 酒瀬川 朱〔七〕 北原 朱〔五〕 宮之原 朱〔四〕  
 佐竹 朱〔八〕 木村 朱〔六〕 滿留 朱〔五〕  
 坂元 朱〔九〕 貴島 朱〔七〕 宮牟礼 朱〔六〕  
 酒匂 朱〔十〕 桐野 朱〔八〕 宮竹 朱〔七〕  
 皿良讚良 朱〔十一〕 切通 朱〔九〕 蓑輪 朱〔八〕  
 佐々宇津 朱〔十二〕 木野田 朱〔十〕 三輪 朱〔九〕  
 左近允 朱〔十三〕 木原 朱〔十一〕 官路 朱〔十〕  
 柳 朱〔十四〕 木佐貫 朱〔十二〕 右松 朱〔十一〕  
 佐藤 朱〔十五〕 城井 朱〔十三〕 富里 朱〔十二〕  
 佐々木 朱〔十六〕 弓削 朱〔十一〕  
 篠川 朱〔十七〕 湯田 朱〔二〕

卷之十

之ノ部 上  
 島津 薩州家 島津仲 島津矢柄込  
 豊州家 薩州家 島津仲 島津矢柄込  
 宮之城 垂水 日置

卷之十一

島津永吉 朱〔一〕 本城 朱〔二〕 吉利 朱〔三〕 義岡 朱〔四〕 佐司 朱〔五〕  
 加治不來 朱〔六〕 喜入 朱〔七〕 大島 朱〔八〕 大田 朱〔九〕  
 志和地 朱〔十〕 下津佐 朱〔十七〕 執印 朱〔二十四〕  
 敷根 朱〔十一〕 志摩 朱〔十八〕 椎原 朱〔二十五〕  
 白浜 朱〔十二〕 下島 朱〔十九〕 島田 朱〔二十六〕  
 渋谷 朱〔十三〕 島原 朱〔二十〕 篠原 朱〔二十七〕  
 白坂 朱〔十四〕 重田 朱〔二十一〕 志賀 朱〔二十八〕  
 白尾 朱〔十五〕 四位 朱〔二十二〕 志岐 朱〔二十九〕  
 色紙 朱〔十六〕 神宮司 朱〔二十三〕 篠崎 朱〔三十〕

卷之十二

平田 朱〔一〕 肥田木 朱〔十五〕 諏訪 朱〔一〕  
 比志島 朱〔二〕 東 朱〔十六〕 末田 朱〔二〕  
 菱刈 朱〔三〕 門司 朱〔一〕 鈴木 朱〔三〕  
 平山 朱〔四〕 毛利 朱〔二〕 須田 朱〔五〕  
 日野 朱〔五〕 森 朱〔三〕 須山 朱〔四〕  
 日高 朱〔六〕 本村 朱〔四〕 鱈 朱〔六〕  
 平野 朱〔七〕 最上 朱〔五〕 附録  
 久富 朱〔八〕 森岡 朱〔六〕 上村 朱〔二〕  
 樋口 朱〔九〕 餅原 朱〔七〕 立石 朱〔二〕  
 広場 朱〔十〕 榎木 朱〔八〕 永井 朱〔三〕  
 平原 朱〔十一〕 瀬戸口 朱〔一〕 船木 朱〔四〕  
 肥田 朱〔十二〕 関 朱〔二〕 梶原 朱〔五〕  
 肥後 朱〔十三〕 関屋 朱〔三〕 道釈伝  
 平城 朱〔十四〕 妹尾 朱〔四〕 女子伝



卷之十三 国賊伝

寒久党 朱「一」	新納 宋「八」	梅北 宋「十二」
肝付省鈞 朱「二」	本田 朱「九」	伊集院幸侃 朱「十三」
北原 朱「三」	菱刈 朱「十」	平田増宗 朱「十四」
伊地知 朱「四」	渋谷党 朱「十一」	比志島国隆 朱「十五」
蒲生 朱「五」	上 東郷	島津久慶 朱「十六」
肝付以安 朱「六」	中 祁答院	陽春坊 朱「十七」
彌寝 朱「七」	下 入来院	

# 目次

一 刊行のことば	
二 例言	
三 目録	
四 もくじ	
五 原表紙	
卷之一 以	一
卷之二 波仁	二三
卷之三 保辺止	三四
卷之四 千遠和	五七
卷之五 加	六九
卷之六 與太曾津称奈	九〇
卷之七 武宰乃久也	一一一
卷之八 末計不己江天安	一二九
卷之九 左幾由女美	一五三
卷之十 之上	一八一
卷之十一 之下	一九七
卷之十二 比毛世寸道釈女子	二一八
卷之十三 国賊伝	二三六

本藩人物誌

以波  
仁

一之  
二

# 本藩人物誌 卷之一

薩藩 白鶴山人正氣編撰

一伊集院大和守忠朗入道孤舟初源四郎 或云掃部助伊集院家六代正少忠頼久四男大和守倍久之子忠公嫡子也○四代之孫源次忠真ニイタツテ断絶○口新公御家老并軍記御役者二原下總守重隆ニ兵衛ヲ學ブトイヘリ○天文五年 日新公御父了伊集院御退治九月廿三夜忠朗大將ニテ伊集院大田原城ヲ忍落ス○同六年鹿兒島上之山城ヲ取誘自身罷移上之山地頭被仰付候○同八年三月貴久公伊集院ヨリ上之山城江御光儀同十三日於谷山紫原実久方ト御一戰御勝利翌十四日苦萃城主平田式部少輔忠朗江申入降參翌十五口貴久公江被為入彼城廿四日谷山平定○同六年六月 日新公御父子市来御退治八月四口忠朗揚勝吐氣候○同十七年三月隅州宮内正宮八幡之社司留守桑如使者ヲ以テ御人数ヲ中請候節彼境之儀ハ隔山海其上凶徒等中途ヲ指察候得ハ難儀之場所ユヘ御評定不定此時忠朗所望仕リ宮内加勢トシテ同廿六日鹿兒島出帆桜島ヘ一宿翌日宮内ヘ着此時陽ニ本田加勢ト相唱ヘ本田カ家臣財部淡路籠居候咲隈城ヲ請取此城ニ相籠リ此時榊山善久モ宮内江免向ニ付相共ニ謀ヲ合セ生別府城ヲ攻取候此城ハ榊山氏之

口城ユヘ直ニ善久江被返下候上并為秋敷根頼實廻久元皆来降ス五月廿三日忠朗清水新城ヲ攻廿四口攻落ス此時 日新公宮内江御光儀北郷讚岐守佐多半閑齋喜入振津守等之依曖本田黨親父子宮内ヘ出頭仕候処薰親嫡子左京大夫親兼被召出本領清水七十五丁被返下候○同年本田紀伊守又北原又八郎ト合躰ニテ謀叛ス八月晦日忠朗攻取日向山城北原氏之兵平良尾張守白坂助左衛門以下百餘人ヲ討取九月五日姫木城之本田刑部少輔致降參御人数ヲ城中ニ引入ル北原氏之番兵北原掃部介和ヲ乞フ忠朗許容イタシ番兵三十余人ヲ躍境迄送返候同六日諸軍清水ニ打入八日 口新公御出馬清水ニ被為入九日本田紀伊守清水ヲ没落イタシ如庄内出奔ナリ同十四日 貴久公被為入清水城御仕置被仰付暫ク当城ニ被成御座候○同十八年鉄肥之島津豊後守忠広難儀之段相聞得 貴久公ヨリ忠朗ヘ加勢被仰付三月十一日忠朗三百余人ヲ召列清水免足鉄肥江山越イタシ四月三日忠広ト伊東義祐業每ケ辻之陣ヲ打破リ三百余人ヲ打取翌夜井手ガ平等之伊東陣七ヶ所自落依之同十日忠朗清水ヘ焔城ナリ○同年加治木城主肝付越前守兼演蒲生浪谷等ニ致与党謀判ニ付五月廿九日忠朗大將ニテ加治木江出陣黒川崎ニ陣ス六月朔日兼演向陣ヲ取日々追合十一月廿四日掃部介忠倉放火箭燒掃敵陣依之兼演オソレテ降參十二月朔日開陣ナリ○同廿三年九月十二日 貴久公御父子岩劍御出陣忠朗軍配者ニテ翌十三日脇元合戦有之御陣掃ニ忠朗勝吐氣ヲ揚候同晦日於平松敵七百人被打取候時モ又揚勝吐氣候十月二日岩劍城致落去翌日於内城御三献有之忠朗太平之吐氣ヲ作候」同廿四年乙卯九月四口久富貴山大明神社ヲ上之山城ノ麓ニ致勸請候續札子今有之 当地頭トアリ菩提寺ヲ野本ニ致建立号笑岳寺有之 卒去年月不相知法名笑岳道観大居士トアリ」永録六年七十余ノ入道ナリ大端之木像笑岳寺ニ安置按ルニ称名慈惠平石ニ孤舟之二字アリト相見得候得共今石若不見

○伊集院大和守忠倉掃部介孤舟之嫡子」 貴久公御使役ヨリ御家老職相勤」天文十八年父同前加治木出陣十一月廿四日忠倉乘北風射火箭敵陣ヲ燒払ニ付敵悉ク降伏ナリ」弘治二年蒲生御免向之時御供」卒去年月不相知法名玄忠孝菴

○永録六年卅七八ニアリ忠倉子ヲ右衛門入道幸記ト云フ不忠人ナリ因賊伝ニ載焉

一伊集院美作守久宣 弥六子孫 伊集院 重助 局防介忠胤三男也 大和守倍久二

月宗 享祿三庚寅年生ル武辺無比類人之出 天文十七年申九月五日於隅

州姫木城北原ト合戦之時於葛原軍勞有之 弘治二年三月廿五日於蒲生

横尾口迫合之時城戸口ニ切入軍勞アリ 永録十年卯十一月廿三日馬越

城攻之時新納忠元同前折目之合戦アリ 天正四年高原城攻御供也、其

外日州表諸所御退治之御度々軍勞アリ 日州清獄地頭職 天正六年高

城麓ニテ大友御一戦ニモ罷立候、同八年十二月吉利忠澄新納忠元同前

肥後比良之城攻落候 同九年水俣御陣ニモ罷立候 同十年十一月新納

忠元同前肥後熊本之御番仕リ 同十一年九月肥後出陣 同十四年七月

岩屋城攻之時内聚兩人戦死 同十年十月豊後入之時家久御手ニテ日向口

ヨリ罷立候 同十五年三月十五日於豊後高田 鶴崎共 戦死年五十八法名

常見桃岳 一イ桃兵 其子十五右衛門尉忠許 初弥七 天正十四年六月廿四日

於佐土原元服朝鮮陣ニ罷立也

一伊集院又七郎忠次子孫 伊集院善太夫周防介忠胤 大和守倍久 嫡子ナリ

於伊集院竹山戦死年二十二歳也 一此ヨリ末別紙一

一伊集院下野守久道入道魯笑 右衛門兵衛 子孫 伊集院分膳 伊集院家四代

長門守忠国ノ八男今給黎長門守久俊之ニ男右衛門佐久昌之子也 天文

廿三年 貴久公御父子帖佐御退治九月卅日於星原申ヨリ酉刻迄御合戦

勝敗未一決治部少輔 貴久公御統半被遊候ハ、凶徒敗北可仕ト申上直

ニ被遊御統候処致敗北七百余人御打取也 弘治元年三月十日 義久

公ヨリ治部少輔野村民部少輔ヲ加治木ハ差越右馬頭忠將樺山善久ニ帖

佐之凶徒退治之計策ヲ御達被成候 天正四年高原御陣御供

○伊集院下野守久治入道抱節 三郎兵衛尉 右衛門尉 久道之子也 弘治二年十月蒲

戦イタシ軍勞有之 同、年伊地知重興降伏之刻根占「イ牛根」地頭被  
仰付右衛門兵衛 後六年十月大友日州江攻入候節福島之人数召列致先陣  
敵ヲ切崩シ軍勞有之 前日州福島地頭御使役ナリ 同八年十月新納忠  
元鎌田政年等同前肥後国江被差越同十五日肥後国矢崎城ヲ攻落シ翌日  
綱田城ヲ攻降シ直ニ熊本ニ在陣十一月廿三日佐多久政等同前合志城下  
久保田千町致放火此時城主合志藏人カ別將大津源左衛門ト云有名之士  
致下知防戦久治一番ニ城中ニ突入源左衛門ヲ打取首ヲ取此時面ニ疵ヲ  
受味方勝利敵ヲ百三十余人打取候テ落城ス同十二月諸軍帰陣ナリ 同  
九年九月肥後水俣江御出陣久治福島之人数召列先陣之内也 同十年十  
二月肥後八代ニ在陣同十三日上原尚近同前隈本ニ被差越候 同十一年  
九月八代在陣十月廿七日花山城御取建之時諸將同前普請イタシ候 同  
十二年八代在陣熊本ヨリ内宮閑刃打廻計略候也 同十四年七月筑紫征  
伐副將之死ニテ罷立筑後鷹取城攻落シ日当山城自落同十日筑紫広門降  
參勝山下城七月中旬筑前岩屋城ヲ攻降シ同廿八日攻落シ城主高橋紹雲  
自殺 同年十月豊後入久治家久之御手ニテ日州口ヨリ梓山ヲ越ヘ豊後  
国三江ニ打入緒方城ヲ攻落シ十二月十二日於利満京軍ヲ打破り同十三  
日豊後府内ニ打入大友義統豊前之竜王江出奔 同十五年四月羽柴秀長  
武拾万余人ヲ引卒シ日州ニ攻下ル同十七日 義久公御父子根白坂之陣  
ヲ攻ル敗軍ニ及ヒ同廿二日御和陸此時久治御供也 同廿年 則文變比御  
家老役被仰付 文祿二年朝鮮渡海 同三年九月廿九日唐シマ御在陣之  
節朝鮮番船釜山海辺へ出福島正則戸田民部少輔来島助兵衛カ陣ニ取掛  
候故 義弘公ヨリ抱節へ物主被仰付御加勢有之正則等燒死ヲ以敵船一  
艘ヲ燒崩候而追退候抱節功アリ 慶長三年十月朔日洲川合戦紺糸之鏡  
着用ニテ組頭トアリ 同八年二月十六日御家御安定御祝言御振廻之時  
同公ス 慶長十二年未十月廿八日病死年七十歳也法名興善院殿龍岳  
盛真居士 有塔園分野口村富 寛永十一年十二月晦日 慈眼公忠義之老人五  
人ヲ撰ビ給フ久治モ其列ニアリ

○伊集院半右衛門久元 久治 慶長十四年琉球入之時因分方武頭 一物頭ノ  
事ナリ

ニテ渡海「同十九年大阪御出陣人數六十人引三六乘馬一疋御使役相動候高式千七百五十五石四斗五升五合慶長十六年國分高帳

一伊集院肥前守久春入道元巢久信源助子孫 伊集院辭馬 助八郎久次子也 今給久後三男長門守久嗣了久次也

初陣ニテ征矢ヲ発ス干時十五歳「同五年六月三日横川被責落候初合戦トアリ不審」同十年卯十一月廿三日馬越城攻之時略ナル機ト云事也新納忠元伝ニクハシ合戦疵ヲ負「伯圍公湯之尾へ被成御座候時作サセラレ御下知ニマカセ

足輕召列致矢軍肩ニ手負其夜御肩当拝領「菱刈馬越江御西殿様被遊御番候中疵忠平公御参上之御久春一人飯野へ還御番候此時從伊東家飯野田原ニ陣ヲ附候也此時久春在陣清水ニテ候」同十二年己五月廿五日長野城攻之時致後殿疵ヲ負「元龜二年比在所清水ヨリ鹿兒島江被召

移町之御使役町奉行之事ナリヲ被仰付、同三年下大隅荒平之閉御破セ之時粉骨鏖疵ヲ請其口義久公久春宅へ御光儀御鑑ヲ被下候「同年十月朔日下大隅小沢城被攻落候時致粉骨手疵三ヶ所其時モ義久公御光臨ニテ候肝付ヨリ牛根廻之ツナキトシテ廻境江城ヲ取候ヲ島津歳久為大將被指向候時久春被御下知右之田仕私侯依之蒙御勸氣南林寺江百日被預候其後御使役義弘公御家老横川地頭 天正十一年之比見ヘタリ天正六年日州穗北へ被召移候」同年七月日州石城攻之時太刀初分捕鏖疵ヲ受久春平原右衛門トイヘル有名之士ヲ討「同年十月高城御一戦ニモ罷立」同十二年有馬殿為加勢安徳へ人數被差向候時五月十五日敵三千程安徳野頭へ

指寄候故一騎敵中ニ掛入致粉骨」同年九月肥後ニ出陣堅志田境之花山城御取立之刻主殿被相究候間望ニテ一年御番相勤之内美船ヨリ敵四百計働出候ヲ横川衆召列追廻六十三人打取候」同十三年八月十三日肥後甲佐堅志田被攻崩候時軍旁九月六日三舟ヨリ忠平公御下知ニテ久春并山田越前守猿渡越中守筑後三池境へ被差遣同十二日堀切城切落シ敵三百余打取同十月十六日筑後表ヨリ二人同前鹿兒島へ罷歸候同年津守徳軍御触職被仰付致在番候其内横川へ罷歸候留守二十二月十五日

阿蘇家ヨリ企二撥津守城ヲ攻取候」同十四年正月廿三日久春阿蘇之内高森城ヲ仕込數十人打果候「同年七月筑紫御征伐之時副將ニテ罷立岩屋城攻之時横川衆召列笠之陣へ致御番同廿七日城攻之時手負」同年十月豊後入義球公御手ニテ罷立豊後鷹ヶ代御番又同國中切加部在番イタシ軍旁同十五年太閤御下向ニ付豊後ヨリ引陣四月十六日新納忠元等同前肥後陣内ヲ打破り敵百余人ヲ打取久春自身強敵ヲ打果候此時粹者十五人戰死 其以後於諸所苦戰漸ク帰國イタシ候肥後豊後ニテ衆中粹者四十八人戰死惟新公朝鮮御渡海ニテ年老驍御供七ヶ年在陣「慶長四年庄内御弓箭ニ罷立」飯野地頭職被仰付御城番相勤候「元和二年辰重陽日一雄元巢右塔之銘如右塔ハ飯野長七十二歳ナリ 善寺内宗行院之後ニアリ南浦文集南浦 松蔭新源 称名義志ニ 見徳タリ○南浦文集晚秋トアリ

アフトテフ君カ千歳ヲ松蔭ノス、シサナラス宿ノ秋風

○伊集院遠江守久族源助源左衛門 久春子天正十三年八月肥後堅志田甲佐被召前候時甲佐ヨリ敵六百計河向迄出合候ヲ久族父同前川ヲ渡り軍勞イタシ久族自身敵老入ヲ打留候、同十四年肥後高森城攻落候時久族自身敵二人ヲ打取」同十五年豊後鷹ヶ代ニテ軍旁其内切加部ヨリ引陣之時敵幕ヒ米候ヲ久族別テ粉骨イタシ漸ク敵ヲ追退候三月廿七日陣内之敵陣ヲ打破り敵數百打亡候時久族敵三人打留候此時父了前後ノ功ヲ介論イタシ候「飯野地頭職父引統 相勉朝鮮渡海」一酒川ノ戦未威 寛永五年嫡家筑前守忠能入道久孝之受讓嫡家兼帯 忠能注云伊集院ノ先ハ一代太守忠時助久兼領伊集院初号伊集院其子國書助忠親家古藤家ノ時於筑前有功其子長門守忠國其子大隅守久氏其子正少爾頃久為氏久智成永中城 久豊公後隆參其子大隅守兼久電徳二年 忠國公公發兵討之賴久拾伊集院出奔伊後其子大隅守経久其子筑前守久雄再帰國其子兵部少輔忠増其子忠能入道久孝也忠能讓家嫡於久族故ニ忠能カ子治部少輔久近 為久族之弟子孫谷山ニアリ

一伊集院兵部少輔久次ハ兵部少輔久統子也伊集院四代忠正八男 今給久後了久統也為勝久公切腹」其子兵部少輔久繼天文二十三年於隅州岩剣戰死年六十一歳「其養

子宮内左衛門久次後兵 突ハ弟ナリ喜入忠譽家臣タリ其子宮内左衛門息  
古根止ニ戦死ス其子宮内左衛門久景天正十四年筑前若屋戦死子孫  
喜入氏家臣ニアリ

一 伊集院刑部少輔久慶ハ刑部少輔久翁 忠昌公御代公退物御手又公正 養子也  
伊集院五代久氏伯慶長男 忠昌公御代公退物御手又公正 養子也  
勝久公与並至十余人謀 公不聽故去至面在施仕 日新公 美ハ町田長門守忠栄  
三男也永禄十年十二月廿九日 菱刈御追治之時市山城ニ罷在於西之原川  
源主從五人戦死 其子刑部少輔忠光平七 伊集院美作守久宜江日州清武  
地頭被仰付候節忠光久宜相付清武江罷在久宜於豊後戦死ニ付忠元清  
武在城ス 天正十五年四月京勢日州へ攻入候節為加藤高城江籠城御和  
睦以後任御下知清武下城イタシ候其後御高百石被下候於大始良病死

一 其子刑部少輔久武入道竜好平七父死後母召列言之隈江參上竜伯様御小  
姓ニ被召仕庄内陣ニ罷立関ヶ原へモ薩州ヨリ罷登候人数之内ナリ軍功  
アリ子孫伊集院新之丞

一 伊集院若狭守忠次伊集院家六世頼久仲廣之長男助三郎孝久子丸出下野守 大正  
十一年筑後柳川之川尻鑑種御加勢被申請候節帖佐彦左衛門等同前被差  
越候人数若狭其外滝間越後守出尻荒兵衛谷口長門矢野出雲川堀甲斐本  
村淡路柏原將監以下三百余人高尾城ニ相籠居候同年十二月於筑前國田  
尻城下戦死法名面風道秋 幕ハ福昌寺 其子半五郎忠次高麗御供関ヶ原御  
合戦御側不相離御下國御供於豊後沖黒田家番船ニ掛合戦死二十八人  
内也其時十九歳同年十月十日右為忠賞御感状ニ御高百石被下候法名花  
翁清春上座 幕福昌寺 其養子五郎左衛門尉忠助災ハ川上瀬兵衛久通三男  
中納言様へ御奉公御馬廻ニテ定御供也子孫伊集院半五右衛門

一 伊地知周防守重武 又九郎十代之孫伊地知 縫殿介重周嫡子也 相武郎六代村  
男秩父武藏守将常十三代之子係伊地知彈止少弼季胤 道義公御代初子重國ニ  
罷下り下大隅致拜領應二年於筑前金隈 勘兵衛公御名代ニ戦死其子兵部少輔季  
弘入道良宗其子縫殿介季胤入道久安 義人公執事職其子太郎左衛門直持人道久  
徳其子太郎左衛門重重其子太郎左衛門尉重弘其子重厚也重周者 蘭窓公御家  
老廣相勤大永二年下大隅高城致拜領同三年十二月二日於  
日州月野戦死三十六歳也或記下大隅徳知ハ季胤ノ代トス

○伊地知縫殿介重政入道声津 虎太郎 重興子天文九年七月三日生ル母ハ

境牛根ノ内カイ濱中俣垂水田上新御堂高城本城木谷比里  
下大隅領主 濱ノ半原原新城 牛根ノ内境ヨリ大 幕令九十七百名公儀之居城ハ本  
城也

勝久公御家老也 大文五年甲申二月二日為加增垂水拜領 同八年六月  
貴久公市米御退治之時罷立 同十三年辰正月田上拜領 同十六年末九  
月十九日卒四十二歳法名月海源心居士

○伊地知周防守重興 虎太郎 重武嫡子也享禄元年八月二十日生ル  
弘治二年四月 大中公御父三浦生御退治之時罷立 永禄年中肝付河内  
守兼統入道省釣江致与党貴久公江御敵対仕 天正二年春改先非下大隅  
五ヶ所 本城下之城垂 進上イタシ降参仕ル 此詩 義久公御救免被仰付下之  
水田上高城 城一所被返下候此時一族家臣等過半致離散近ニ罷成者モ有之 同年  
八月六日還俗被仰付被任周防守御太刀一腰青銅三百足献上仕候奏者上  
并覚兼ナリ 同四年高原城攻之時御供 同五年七月廿八日 義久公  
敵方杜御参詣之時騎馬ニテ御跡乘仕る 同六年十月平川左馬介同前佐  
十原御番仕る 同年大友氏ト御一戦之時罷立 同八年辰二月十三日卒  
ス五十三歳法名千山守法勤王

一 重興代豊後ヨリ召置候女ヲ妾ニイタシ居候処家中之者ト響通イ  
タシ候由ニテ其女ヲ横ニ入クテ總蛇ヲ多ク入テ垂水之池ニツケ  
テ殺シケリ家臣柳田某池之辺ニ竹ヲ持居テ其横ヲ押出シタタイ  
タシケル由其恨ニテ崇強ク候由ユヘ御前トトナヘ赤明神ト申候  
ヨシ十一月廿日 廿七日 氏神ニ崇敬イタシ取持ケルトソ右柳田モ  
亮候由

当家ニ文覚上人筆之八幡大菩薩ト有之御旗一流頼朝公御旗ニテ於  
蛸子嶋上人書進セラレ豆州御出陣之時御持セ直ニ白山重忠へ拜  
領被仰付候由ニテ鳩羽ニツ竿付結有之候ヲ持得へ重興之曾孫縫  
殿介重治代大乗院住持政真僧正御取次ニテ寛陽院様江差上御家  
之御宝物ニ相成居候

称古式部少輔重竜女一名犬伊後貫明公ニ事フ葦八国分鳥越ニアリ」ナ  
リ」和歌ヲ好トイフ片輪人ニテ候ユヘ早ク入道イタシケルトナリ肝付  
家ノ取替之由肝付之娘ハ磐山ズ（本）元和四年午三月（本）卒ス」（本）年六十九（本）法号  
唯ナリトイヘリ

倉岡善家 其嫡子佐渡守重順 虎太郎又太郎 元龜元年（本）三月（本）生ル母ハ肝  
守兼アリ

付左馬頭良兼（本）省約（本）子ナキ故ニ室水收親音ニ禱ル九百口満願ノ由仏前  
嫡子（本）三木兼一ツ香（本）交ノ女異之持婦ヲ娘アリ（本）ナリ

天正九年己八月重順十二歳之時水俣御陣脇大将ニテ罷立同姓新助重賢  
後見也」同十二年十月堅志田城攻之時士卒百五十人召列致先登軍勞ア  
リ年十五歳」同十四年十月豊後入ニモ百七十人召列家久之御手ニテ罷  
立十二月七日利満城攻之時先登イタシ利満蔵人ト鎌合軍勞同姓新助重  
賢中馬加賀守重好其外家臣等十一人軍勞アリ同十二月十二日於利満城  
下京勢ト一戦之時モ先登ニテ軍勞有」同十五年六月 竜伯公初テ御上  
洛之御供仕ル所領四千四百十石」（本）十七年七月廿八日公誦（本）文祿二  
年高麗入御旗奉行ニテ御供又御船奉行被仰付于時二十四歳」同三年

「秋」依科蒙御勤氣下大隅持留之知行高三千七百石余被召上七ヶ年浪  
人」慶長六年春 家久公御代洛之時重順事高野山へ罷在候処被召直新  
地五百石拜領被仰付物頭役并地頭相談役トシテ高岡へ被召移（本）其九へ  
同十三年倉岡移地頭被仰付高岡ヨリ罷移候左候テ御支配替之時分四部  
一差上高（本）三百八十石ニテ倉岡御番廿二年相勤」寛永十九年十月廿二日  
於倉岡卒七拾三歳ナリ（本）法号久山（本）清長庵主（本）

一 高野山ヨリ被召直新地五百被下候節於平松 惟新様ヨリ御意ト  
シテ萩原寺ヲ以被仰聞候ハ木地下大隅ヲ可被下候得共當時右馬  
頭殿御持ニテ候間本知行高ニ合別所ニ可被下由被仰聞候

一 秀吉公御筆之由ニテ百人一首我庵ハノ歌書候扇ヲ重順上洛之御  
石田三成ヨリ被贈候由

一 垂水祈願所大乘坊日勢事重順ト兼、中惡候処高麗出陣之時祈念

真統被致候由候処祈願所之儀ユヘ日勢へ被申付候處鹿尾島大乗  
院僧正ヲ招請候而出陣之祈禱ヲ相頼候依之祈願所之事ユヘ日勢  
致立腹其恨ニテ致入定由候間安養院ナト異見ニ垂水ニ被差越候  
得共承引不致定ニ入四十一日ニ相果候天正廿年九月十八日（本）イ  
月八

日ト右ニ付崇リ有之候ニ付先祖同前取持イタシ来候由

一 重順本領之祈念ニ庄内梅北黒尾権現へ粟田口ノ太刀寄進ナリ又  
隅州正八幡宮へ天神之御筆之由申伝候法華經一部寄進ナリ

一 重順四代之孫勘助重直代貞亨四年七月六日秩父氏ニ相改候  
朝鮮ノ役松崎公ヨリ金幣ヲ賜テ寺社奉行トス」

一 伊地知伯耆守重秀入道増也 又八勘解 伊地知 又八子也 伊地知季隨  
道鹽公ヨリ父季隨へ島津征名字可被遊御免許止候処依願正貞島津名字被成下且  
又日州口島九十町被下島津田島ヲ致家号候由其養子田島忠通入道々思 季豐三男  
其子正久等入道久頼其子越中守重頼其子駿河守久純入道々  
珠御家老相勤候由其子又八也又八事天文十八年於薩州吉田歿死

竜伯公御代御申口役（本）先使役トモ當時 阿多始良肥後湯流浦生等之地頭職所  
領三十二町於諸所軍勞アリ」天正四年八月高原ニ從軍六年十月四日同  
氏又十郎ト佐土原ヲ成ル又耳川ニ從軍九年始良兵ヲ卒ヒ水俣ニ赴ク十  
二年三月島原出陣」天正十三年 竜伯公ヨリ 惟新公江守護代御讓之  
御使島津忠長町田久倍同前相勤候」同十四年岩屋城攻之時御供ニテ八  
代ニ罷在候普提所ヲ浦生ニ建立号重栄寺」文祿三年「五月廿九日」於  
浦生病死」△其嫡子勘解出左衛門尉重元「初又八」島原陣又岩屋城攻  
等父同前罷立候朝鮮陣ニモ浦生衆并家出四十三人召列渡海イタシ文祿  
元年六月十七日於朝鮮戰死」法号傑心伯英居士墓ハ興國寺ニ在り」此  
時家臣「隈元金兵衛大崎太郎三郎高橋吉次宅間源太兵衛源左衛門寛介  
藤太太兵衛」五人中間鑓持マテ戰死數十人也（本）重元之妻大寺氏トナリ（本）女子伝  
重元計吉相聞へ葬式之御重  
元之嫡子朝解ヨリ持婦候  
其子勘解由左衛門（本）八重母ハ大寺氏四歳ニテ孤  
刀ニテ致白殺相果候ト也

一 惟新様被召仕大坪流馬術衛伝授仕候」御普請奉行相  
ニ相成幼少ヨリ

一 惟新様被召仕大坪流馬術衛伝授仕候」御普請奉行相

一 惟新様被召仕大坪流馬術衛伝授仕候」御普請奉行相

一 惟新様被召仕大坪流馬術衛伝授仕候」御普請奉行相

一 惟新様被召仕大坪流馬術衛伝授仕候」御普請奉行相

一 惟新様被召仕大坪流馬術衛伝授仕候」御普請奉行相

一 惟新様被召仕大坪流馬術衛伝授仕候」御普請奉行相

一 惟新様被召仕大坪流馬術衛伝授仕候」御普請奉行相

一 惟新様被召仕大坪流馬術衛伝授仕候」御普請奉行相

一 惟新様被召仕大坪流馬術衛伝授仕候」御普請奉行相



勤高三百拾三石余宋「伊地知年人佐郎重秀二男大正十二年島原ニ從軍

後浦生地頭又朝鮮ニ從軍其平次郎琉球ニ從軍ス子孫伊地知五兵衛」

△「天正六年石城島津以久ノ管ニ候ス期ヲ過テ返ラス公之ヲ諍議ス 十

五年六月公ニ從テ京師ニ如ク 御使兼浦生地頭

一伊地知越後守重実初八郎兵衛 子孫 伊地知越 伊地知周防守重貞 二男也 家嫡 重持 重次子ナリ 重貞ハ 忠昌公御家老ニテ加治木地頭被仰付置候也 勝久

公御代重貞并嫡子新左衛重兼謀反仕候ニ付 日新公御諍討被成候重実

ハ父兄之誅伏後 大中公被召出御恩赦ニテ七島地頭職被仰付候 其子

治部左衛門重治早世其子勝左衛門重房初又十郎 治部少輔 天正六年「十月四日」

佐土原御番衆之内ナリ」宋「納殿役ニテ」水俣御陣御供」宋「後電伯公ニ

富隈ニ事ヘ禄二百石賜フ公薨去ノ前吉田六左衛門ヲシテ重房飯牟礼紀

伊介ト君夫人ニ事ヘシム」慶長十五年琉球國御檢地之時歩士十人召列

渡海其後七島地頭職國分居住」寛永二年四月「七日」御加増五十石被

下候 其子周防守重康重房嫡子 初治十郎 治部左衛門宋女正 七島并久志「吉松」地頭「慶長

年中国分ヨリ鹿兒島江罷移」同十九年大阪陣「御人數賦乘馬一疋卒四

人元和元年人數賦高三百四石三斗八升三合步卒九人」御陣ニ罷立」其

子周防守重利初治 十郎 母ハ山田有信入道利安之娘ナリ百次地頭「寛永十七

年人數賦」持高三百石余「步卒十二人」伊地知越右衛門先祖ナリ

一「小牟田」伊地知弥六左衛門家嫡季孫五男小三郎父季重ヨリ鹿兒島水口門 之内小牟田三段ヲ附身イタシ小牟田其子右 衛門四郎其子弥六左衛門ナリ弥六左衛門迄 八小牟田名字ヲ名乗テリ於口銀七曲職死 其子伊地知和泉守重元「当代伊

地知ニ改ム」弥六左衛門 初弥六掃 初兵衛 大正年中諸所軍勢九

州入其外朝鮮渡海関ヶ原御退陣之御供仕御感状并御高五十石被下候」

家久公御代加治木納殿役正保元年「十一月十日」卒ス」其子喜兵衛

重高入道安心初小 御祐筆并医道兼務 子孫 伊地知彰 右衛門

一伊地知左衛門尉家嫡重 張一男 大永三年於高城戰死」宋「法号可翁悅公居士」其

子新四郎大永三年十二月五日於月野梅ヶ渚戰死」宋「四代戰死法号義山忠

勇居士」其弟新四郎天文八年於薩州吉田戰死」右新四郎子右衛門尉天

文十八年「四月三日」於鉄肥業毎之上辻戰死」宋「尚岳逸勇居士」其子

甚左衛門重辰入道昌繁初美作守 肥前守 吉田并福島地頭」慶長四年 志恒公幸

侃御成敗之時死骸ヲ御持ヒ御使者ニ被差遣候」宋「卒去年月不知法号麟

翁宗英居士墓ハ興國寺」其子四郎兵衛重賢初初 慶長四年 庄内ニ罷立 四郎

軍勞イタス」同十四年「物頭ニテ」琉球渡海」同十九年横日衆ニテ騎

馬家来九人召列大阪御陣御供也」宋「高三百六十石」寛永年中御兵具奉行

川辺馬關田地頭穆佐移地頭」寛永九年「御人數賦人數廿五人乘馬一疋

有之」其子十左衛門重南元和元年生」宋「母勝目兵右衛門女」寛永十五

年島原御陣ニ罷立候」穆佐移地頭」寛文元年十月十五日病死」年四十

四法名仁勝實運居士墓穆佐悟性寺」子孫伊地知十左衛門小番太刀

一伊地知式部少輔重成家嫡重房二男筑前守嫡子ナリ 筑前守ハ吉田之城代ナリ 日新公へ奉仕田布施

之内高橋ヲ一所ニ被下候、宋「天文十三年 日新大中公ヨリ盟書ヲ賜フ」

其子式部少輔重隆「大野忠智ナリ天正三年十月廿日犬追物イテ」天正

四年高原城攻ニ罷立」同五年日州平治之節口州三納地頭」天正六年十

月廿三日三納之土民等逆心イタシ三納城ヲ攻落セシ時重隆戰死

○伊地知与兵衛「初民部人輔」重頼重成 重成 二男 「正田宗茂賀天正十三年三舟出

陣十五年御上洛御供 慈眼公朝鮮御供」慶長三年十一月十八日朝鮮番

船破ニ付戰死」兄重隆戰死ユヘ家督被仰付也」其子与兵衛重昌 此子孫

伊地知筑右衛門

一伊地知丹後守重政家嫡重隆西男淡路守重基子出羽守其子 淡路守重宗其子又七重英其子重政ナリ 永祿九年十月日

六日三山軍勞十年三月廿三日馬越永福寺ニ戰功天正中御軍談合五十四

人ノ内ナリ」天正六年十月大友日州へ押入候御十月十日夜 忠平公御  
下知ニテ丹後守酒瀬川奉勝兵衛富山備中三百余人ニテ伏兵イタシ敵五百  
余人ヲ打取一後門川地頭寛兼日記ニ天正十三年一城土伊地知丹後アリ後ニ三城  
ハ吉利忠澄ノ地頭ナリ奉政古利氏ニ從テ三城ニ居リ  
吉利氏ヨリ内川地頭トスルカ考ヘシ天正九年門川  
兵ヲ卒ヒ水出陣十四年十二月丹生高城改先登」天正十五年二月八日於豊  
後野津戦死酒瀬川奉勝兵衛同前  
子孫伊地知八之丞

○伊地知雅楽介重次初松上  
彩三郎重政之子ナリ「母新納康久女」十五歳ニテ豊

後入御供ニウノ島「丹生島」薩唐仁町破之時「父子共ニ」分捕ト有之」  
御使役相勤」天正十一年十月 義久公御使トシテ八代へ被差遣圖書頭

忠長へ御老中役被仰付候一其後朝鮮入「泗川軍衆威」番船破之時討死」  
其養子越後守重弘一治部左衛門新二郎八右衛実ハ鮫島与一左衛門実貞  
子竜伯公惟新公光久公ニ奉任」子孫八之丞ナリ

一伊地知又十郎重近入道世休新納忠元附郷士或家臣  
ト云忠元ニ殉死法号罷  
翁世休居士子孫大門」

一伊地知美作守重常家嫡李弘三男民部少輔重真四代民部少  
輔重辰嫡子初小十郎小次郎トモ外記父民部少輔重辰帖  
佐新城地頭ニテ候処亨録二年己丑正月廿三日那答院重武多勢ヲ以新城

ヲ取圍候節父之命ニ依テ「從兵五人」城ヨリ切出敵ノ圍ヲ打破リ吉田之  
城江走入此時父重辰ハ戦死也」重常ハ 貴久公御代伊集院油須木地頭

被仰付市来皆田代一所ニ被下且伊集院陣 被下所領十二町有之一又泊  
須木等ノ地頭」六十七歳卒ス「光林沢公居士」寛兼日記天正十二年九月

肥後吉松役伊地知美作守アリ重常ナルベシ」其子備後守重康入道喜甫  
初小二郎重広母河上年家女於諸所軍勞イタシ九ヶ所手負」市来蒲生

馬関田等ニ罷移ル」永禄十二年宮之城地頭代被仰付罷移ル」天正六年  
平泉地頭職天正八年十月一寺ヲ平泉ニ  
造立イタシ勝軍院ト号ス同九年九月湯浦地頭所領十六町」

同年水俣御陣平泉地頭ニテ出陣」慶長十三年病死」安叟慶泰居士」  
其子民部少輔重賢初小次郎  
重泰永禄三年生ル」母木田氏」於諸所軍勞」平

泉地頭」文禄元年 久保公御供ニテ朝鮮渡海御高百五拾石被下候」重  
賢重政二人ノ伝称名墓志ニクワシ」同二年 久保公御逝去ニ付九月十  
日御遺骸御供ニテ帰朝山野代官相勤候」慶長二年七月再朝鮮渡海同三  
年十一月十八日於朝鮮戦死」年三十九法号富山賢公居士山野滿徳寺  
ニ墓アリ

其子至右衛門尉重政初小次郎  
民部少輔天正十四年生ル」母阿多中務久宗女」御  
兵具奉行京都御藏奉行其後御使役」禄二百石」持高四百八拾四石余」  
慶長五年庄内御陣罷立」寛永九年御人数賦騎馬一人衆中主從二名鉄炮  
一弓一槍一卒十二人」二月十六日山之口城攻之時首一ツ打取其後山野  
「慶長十九年七月十九日」羽月」寛永十年六月廿二日」加久藤」十三年  
三月廿六日」地頭」寛永十五年鳥原一揆之節加久藤上五十人内衆三十  
四人召列鳥原出陣御普請奉行相勤二月廿八日城攻之時敵一人ヲ打取」  
正保三年十一月四日於江戸卒六十一歳二本榎ノ広岳院ニ葬ル嘉翁祐慶  
居士又加久藤徳泉寺ノ浄慶トイフ所ニ招魂卷アリ子孫伊地知小十郎

一伊地知弥右衛門重高備後守重  
康二男関ヶ原戦死」法号他參宗賢居士」其子  
弥右衛門」初小八郎」重延重高養子実八民  
部少輔重賢二男寛永十五年鳥原ニテ敵老入ヲ  
打取子孫加久  
藤有之「明曆三年卒」

一伊地知加賀守重昌家嫡重賢二男  
河内守三男ナリ大中公江御奉公仕天正十五年一七月  
廿四日卒義翁顯忠居士」其子三河守重徳」母新納越後女」弘治三年四  
月十四日於蒲生北村戦死年二十五歳」安叟守泰禪定門」其智養子伊地  
知藏人重増比志島河内  
守一男ナリ天正十五年三月廿七日於豊後坂梨戦死四十二歳、  
一越嵩駿公上座」其嫡子彦左衛門重鑑初彦八郎十五歳ニテ朝鮮渡海  
軍勞之為御褒美 竜伯様ヨリ御高百石被下候重徳重増戦死ニ付御加増  
百石被下旨御証文被下置候」慶長四年庄内へ罷立」十月廿二日」於彼  
地戦死」心翁玄公上座」其弟献右衛門重詮初三  
河守兄重鑑戦死ニ付家督  
仕候間重鑑戦死之為褒美御高五十石朱被下候」家久公御在伏見之時分

一慶長十九年大阪御陣人數賦高二百三十二石騎馬一人士卒五人普請奉行「御普請奉行」寛永十五年「十二月廿九日」四十七歳ニテ卒ス一義元慶三庵主子孫伊地知役右衛門

一伊地知大膳朝重家爲重持三子因權守二男次郎左衛門尉天文十二年於川内

「東郷」誕生一元龜三年九月廿七日下大隅崎陣合戦ニ福岡和泉守重純

ヲ打取槍疵ヲ受候下大隅荒平ノ戰東郷重治ト共ニ功アリ又境隅

戰功アリ「宮原五郎左衛門重純カ首ヲ取」永祿四年七月十二日廻合戦ニ

軍勞「元和八年於園分鳥越卒ス八十一歳」其子慶右衛門重時初九郎十五

歳之時「貫明公與御小姓」十八歳之時庄内志和地城攻之時鎗ヲ合セ敵

一人ヲ打取又於山之口宮内某ト兩人無比類軍勞イタシ候ニ付御褒美ニ

介慶之二字ヲ御取重時ニ慶右衛門宮内ニ弁助ト名ヲ被下候宮内之系圖

慶功ト右之白春川カ任ナシ二八井上慶長五年榎佐江稲津攻入候御重時敵一人ヲ打

取且又味方松下万左衛門致戦死候ヲ重時其屍ヲ肩ニ掛テ引退也一「同

九年」二十三歳之時榊山休兵衛喧嘩イタシ九月廿九日切腹子孫因分ニ

有之

一伊地知太郎兵衛朝重四男子孫琉球当摩氏ニテ候「元和元年琉球三司官

豊見親方依頼筆者有之由ニテ渡海イタシ」其後横目相勤大明国へ兩度

罷渡リ「琉球国王ヨリ当摩村地頭并高三十石被下候「法号門祝道悦」

委細ハ覚書有之故略ス

一伊地知新助重賢初又ハ左成成ハ子孫伊地知伝兵衛「家嫡季豊西男

二年生ル」大正九年水俣御陣之時家嫡重順十三歳ニテ出陣ニ付重賢為

後見罷立候テ軍勞「同十四年豊後入之時モ罷立十二月七日戸次城攻之

時軍勞

一伊地知又左衛門重宗入道無山又宣明トモ子孫垂水ニ有之家嫡季豊四男鳥津

相模守忠仍家臣ニ罷成園分宮内ニ居住ス」十八歳ニテ武者修行ニ出文

祿慶長之間諸州ヲ廻歴シ於常州齊藤主馬首伝鬼忠秀ニ天流之鎗術ヲ傳イタシ日本無双トイフ札ヲ打掃園イタシ候忠仍為扶持米高百石被致附与候「元和九年三月十五日嫡子貞右衛門重友ニ鎗術ヲ皆伝イタシ再ヒ上方へ罷登其後行衛不相知候御當園天流之槍術ハ無山ニ相初ルナリ

一伊勢雅楽介平貞真入道任世齋貞序貞世貞序ハ中原姓也飯野一之宮大明神

有川雅楽介一中有川治部貞則二男也平相國清盛之弟池大納言

之小名字之由ニテ伊勢兵庫頭貞慶江中入免許之上貞真兄弟兄ハ長門守

伊勢氏ニ罷成候貞真貞末在京之時近衛權江相頭ト一條妙法院御門首永祿七

年 忠平公御供ニテ口州真幸ニ罷移リ 忠平公御家老相勤「永祿十一

年正月廿日 忠平於羽月飛田瀨御難戰之時抽軍勞候元龜三年木崎原御

合戦之御飯野御城御留守番「天正九年水俣御陣 忠平公御供ニテ罷立

候」同十年十二月肥後八代在陣「一後飯野地頭」同十四年豊後入御供」

文祿元年 義弘公御供ニテ朝鮮渡海」同二年於高麗嶺島病死墓ハ飯野

辛飯野之

一伊勢平左衛門尉貞成貞須貞顯貞林貞之孫八貞成ト見ヘタリ 貞真嫡子永祿十二己巳

年生ル母ハ新納武藏守元忠拙斎之嫡女 義弘公御家老飯野并古川灌生

地頭職知行千石一「文祿元年父ト共ニ」高麗御供泗川赤威慶長三年戊戌

十一月「一屍国」同五年伏見争乱ニ付八月長寿院盛淳等同前後白走登瀛

州須俣御陣所ニ參着九月五日関ヶ原御一戰相破候テ 惟新公御手廻

二百人程有之候御貞成ヲ軍奉行ニ被定鉾矢形ニ御掃被成候テ東国之大

勢ニ向ヒ御切通之時分貞成先陣ニテ罷通候処南宮山之下ニテ四圍衆敵

味方不分明候ニ付誰モ御使ニ可參ト御意候得ハ貞成私江可被仰付若四

圍衆異志候ハ、切込打死可仕無左候ハ、采擇ヲ振リ可申ト相図ヲ申上

乗出ス私ハ山田田田其間十町斗此時 惟新公御床机無シ馬之滝障ニ

御居リ被遊御供之面々鉄炮ヲ取りテ相待居タリ姑ク問アリテ貞成陣前

ニ乗出シ馬ヲ輪ニ乗り采擇ヲ振り候ニ付 殿様ヲ初皆々安堵ス 長東殿内者騎被差 夫ヨリ御下国迄御側ヲ不相離御供仕リ十月帰国之上御感出下見ヘタリ

状御知行拜領仰付候 同六年五月備前中納言 浮田家 薩州山川江致漂着御

当国江鑿居仕度由被申候ニ付 竜伯公御父子ヨリ貞成并相良新右衛門

被差越意趣御聞セ被遊候テ御憐怒ニテ隅州牛根江被召置候 同八年二

月十六日於御城御家御安定之御祝言御振廻有之伺公仕候 ○肥前唐津城

主寺沢志摩守広高殿下此御方御姫様御縁辺之御約束ニテ候処彼家ハ切

支丹之様ニ相聞得候ニ付御違變之御談合御縁辺之事ニハ無殊之外六ヶ敷

候処貞成 御縁与首尾掛 私江被仰付候ハ、首尾能御違變相濟可申由被申出貞成

ニ被仰付候 貞成御当地発足之節秀島山華林寺兼、心安候ユヘ為暇乞被見廻候

此節肥前表江參候ハ、存生ニテ罷歸候事不察ニ候此幼雅ノモ

ノ行末孤ニ罷成管候間万端往々御頼申候ト落涙ニ及ハレ候由 依之蒲生衆五人

附衆中家来共四十人程被召列唐津へ被差越右御縁与之儀ハ寺沢家々老

之聞違之由被申掛何之無子細御違變相濟帰國之節右聞違之由被申掛候

家老高岳新蔵其時分天草之押トシテ志岐城へ罷在候処御茶可進候間志

岐浦へ御立寄可被成由申候ニ付志岐浦江船ヲ附ケ三日滞船ニテ新蔵 高

仲兵衛ト御家 館江被見廻候処於茶亭及喧嘩双方共ニ深手ニテ 仲兵衛切付

譜書被ニアリ 候処貞成其 刀ヲ奪ヒ被追掛候処火爐 大津喜右衛門打タル由候

ニ懸キ候候ヲ打留ルト也 右衛門ハ貞成家来瀬戸口上

税打留 新蔵事ハ船本へ出平左衛門殿ヲ仕詰候間致切腹候段相断致自害

候由 相果候于時慶長十二年丁未十一月八日也貞成死年三十九歳法名傑山文

勝居士葬于加治木大株寺 今墓ハ大株寺ノ旧地ニアリ墓石ヲ失テ姑ク葬所シ

ナルモノ排作ノタメ大株寺ノ旧地ヲ堀テ石塔ノ土台ヲ掘出シタリ ス文化十一年甲戌冬辰土村吉原門百姓治右衛門

其石ノ墓ニ貞成ノ一室彫刻アリ初テ知ル、ト云

或云貞成死後、口疵之様ニ世上風聞申候ニ付 惟新公被遊御立腹墓

ヲ御堀ラセ弟兵部少輔ニ被仰付棺相開被遊御覽候処真向又ハ指ノ先

皆々切サキ為有之由夫故風聞止候由

○伊勢美濃守貞長 貞成嫡子母伊東權頭女權頭ハ三位入道之弟ト云權頭妻ハ新納家九代忠茂弟左馬頭忠賢娘ナリ此腹ニ出生之女ナルベシ忠賢カ母ハ權頭カ妹ナリ權頭死後養治没落之後右ノ妻ハ島津歳久之妾ニナリテ鶴岡ニテ一女王ヲ生シタルヨシ 牛根地頭 寛永三年恒吉地頭トアル

○伊勢左近貞清 貞成御側御小姓ヨリ御馬廻子孫伊勢仁右衛門

一伊勢兵部少輔貞昌 幼名徳松丸弥九郎 有川雅樂介貞真二男ナリ元龜元年誕生母新

納忠元女 貞昌父貞真兄弟伊勢兵庫頭貞景 桓武天皇後胤正腹、ノ養子下野守季衛八代ノ孫從五位

下豊前守俊繼伊勢守護職ニ補シ伊勢守ニ任ス俊繼四代之孫伊勢守貞繼足利親

軍家ノ政所御所トナリ「習々」此職ニ任ス貞繼一、代伊勢兵部頭貞長ノ子貞景也

之免許ニテ伊勢氏ニ相改候其節貞昌ハ貞景之猶子ニ罷成貞景舍弟与三

郎貞興之家跡致相統庶子之総領家ト被相定候 天正九年八月貞昌十二

歳之時於肥後水俣御陣致元服夫ヨリ 惟新様御側江被召仕肥後八代江

数年被召列候 同十四年十七歳ニテ豊後入御供高城御攻落之時致分捕

惟新様江首ヲ掛御目候 同十五年四月豊後府内ヨリ御引取之時清田之

人数出候テ夜中ニ 惟新様御先キヲ取切候砌一人ヲ打取 同年 久

保公御上洛貞昌御供三年在京 同十七年御帰国御供仕候 同十八年七月

久保公小田原御出陣之御供騎馬十六騎之内ナリ 文禄元年三月 久

保公御供ニテ高麗へ渡海 同二年九月 久保公御逝去ニ付御遺骸之御

供ニテ帰国父任世儀モ相果候ニ付 任世高麗 飯野へ引入罷在候処 竜伯

様ヨリ平出左近將監ヲ以 久保公御跡継之儀 忠恒公へ被仰渡候様ニ

ト御訴詔被遊候間御供可仕旨被仰聞御供ニテ罷登候処太閤様御前無異

儀相濟依台命 忠恒公高麗江御渡海被遊候ニ付又々御供ニテ罷渡六年

在陣仕候 文禄二年十月六日忠恒公御船 下被遊八月夜半御立舟ナリ 在陣中島津忠長同前高式百石被下

候得共返上仕候 虎狩之圖ニ 義弘公 忠恒公御床机ニ被遊御座候節 兩公之

殿中上膝ナリ 間ニ桃色之陣羽織ニ蝶之紋付タル下ニ具足ヲ着候人長リ居何

貞昌ニモ候哉 慶長三年御帰帆之節十一月十八日 番船破之時樺山久高亭

入撰州以下五百余人南海島江宗对馬守明軍ニ被取籠居候ヲ一救トシテ

差越給ヲ焼レ南海島江上リ候処一番船取閉難道跡之由落来候衆ヨリ委

ク申上候ニ付唐島之瀬戸ヨリ有馬次右衛門鮫島筑右衛門五代勝左衛門

同船ニテ一日一夜ニ南海島へ夜半比参着イタシ番船之間ヲ忍ヒ磯涯ヲ  
通り右之衆取会候テ迎船ヲ可遣候間可相待由申達則唐島江罷得其段申  
上候テ小西殿松浦殿大村殿杯ヨリ迎ヒ船被遣五百余人被相助候其御  
惟新公ヨリ別テ御札被仰聞御歸朝之時分右為御褒美御知行被下候へハ  
御断申上差上候高麗ヨリ御歸朝 御河殿様直ニ御上京之御供ニテ罷登  
リ伏見ニヲイテ鎌田政近比志島國貞同前御高石被下候得共御断申上  
差上候同四年山田出水之衆を召列庄内御弓箭ニ罷立候同五年 惟新様  
関ヶ原ヨリ御歸國之時為御迎鹿兒島ヨリ九州江罷越御歸國之御祝儀申  
上候此時伊東殿家臣稻津掃部祐信一揆イタシ綾辺ニ乱入ニ付以御下知  
彼一揆打破り首數多打取候」同十一年六月十七日於伏見 家康公江御  
諱字御申請之時貞昌御使相勤候」同十五年 家久公琉球王被召列駿河  
江戸へ御参府之時御供仕候」同十九年秀頼公ヨリ御加勢御頼ミ之御書  
并御脇指 惟新公江被下候御貞昌へ被仰付御返書被相認候 不存寄之趣  
ヲ書出ス  
左候テ右御書并貞昌返書案ヲ鎌田左京猿渡新助ニ被仰付江戸へ被差遣  
家康公被備御覽候処案書之趣御感被遊候由元和三年正月 家久公江  
戸御参府御供」同八年九月御参府御供 此時紀伊頼朝郷前忠直侯患病ニテ  
出仕ヲ止ラル、難説有之故御参府ナ  
リ元和九年七月十三日 秀忠公参内 家久公御上京之御供仕候其後在  
江戸於西御丸諸大名御席末ニテ御能見物被仰付御老中御同座ニテ御覽  
応被下候」寛永元年 家久公ヨリ 家康公之御恩為御謝礼 御夫人様御  
在江戸ニテ御奉公被成度貞昌ヲ以上井利勝へ相付御頼被成十一月 家  
久公御夫人并又三郎公又十郎殿御同道ニテ初テ御参府之節貞昌妻了召  
列御供仕同十七年迄在江戸」寛永五年初春ヨリ 家光公御成之催有之  
貞昌伊勢因幡貞知入道友枕へ式加之用職方相伝イタシ居候ニ付 家久  
公ヨリ御成一件被仰付公方家代々御成紀録法式之通御殿御造立有之御  
成記一卷有之」同七年卯月十八日 家光公御成島津久元同時御目見被  
仰付御太刀御馬御給献上御給十白銀<sup>二百</sup> 拜領被仰付候同月廿一日 秀  
忠公御成貞昌久元同時御目見御太刀御馬御給献上御給十白銀<sup>二百</sup> 頂戴  
仕候」寛永九年御人數騎馬七人一人ハ從十五人其餘從士各五人衆中

十八儀鉄砲十五槍七」同十二年児玉筑後守御使ニテ知行小高二候間  
一万斛可被召成旨被仰出候得共御知行追之時分候間先々可被指置由言  
上仕御請不申上候 元和初年鹿兒島高帳  
三千五百三十三石 同十四年鬼利文丹宗島原へ致蜂起  
候時翌年寅正月十三日 光久公江戸ヨリ御下向二月十四日有馬へ御着  
同十六日夜鹿兒島江御掃城此時貞昌供奉仕候同廿三日 家久公御臨終  
之御時島津久元貞昌ヲ御前ニ召レ御遺言有之」慶長十二年比ヨリ御  
使役并御老中相勘山田大口并谷山地頭一慶長十六年ヨリ寛永十八年迄  
佐江戸仕將軍 家康公 秀忠公 家光公江度々御目見仕り御服御馬金銀  
且又毎年御鷹之雁拜領被仰付其上寛永十六年阿部豊後守殿ヨリ被仰渡  
米五百俵宛貞昌死去之年迄三年被成下候本多佐州老本多上州老土井大  
炊頭殿酒井雅楽頭殿永井信濃守殿江於貞昌宅御茶進上仕候○藤堂和泉  
守殿松平隱岐守殿松平陸奥守殿松平安芸守殿立花飛騨守殿毛利甲斐守  
殿細川三斎老貞昌宅江御光臨有之候○「家久公御事少將之御位ニテ御  
参内御供之次第殊之外々々御賦ニテ候天下ニ無隠御家之儀外聞如何敷  
候ニ付 家久公江御内談申上本多佐渡守本多上野介殿土井大炊頭殿江  
被任宰相候様ニト自身御使イタシ別テ入精申入候得ハ被任宰相候由被  
仰出 元和  
三年 其後從三位權中納言ニ被遊御昇進候 寛永  
三年 寛永十八年四月三  
日於江戸病死七十二歳二本榎戸之広岳院ニ葬リ法名敬豪翁英大居士 石  
塔  
ハ南林寺御影堂之右傍ニ有之且又為  
菩提所 一字致建立号靈院 南林寺  
塔司之内 ○貞昌病氣大切之節酒井讚岐守殿阿部  
豊後守殿松平伊豆守殿阿部对馬守殿土井大炊頭殿堀田加賀守殿ヨリ御  
家老一人ツ、被附置候○死去之節阿部豊後守為上使御香奠拜領被仰付  
伊勢兵庫頭殿御承候○「寛永十八年二月廿二日太田備中守資宗ヨリ貞  
昌ヲ召テ島津家之系図ヲ 上覽ニ可備旨釣命之趣被仰達候○「寛永十  
六年五月七日 光久公御家督初テ入部之時貞昌御供仕候同八日 光久  
公御夫人御病氣之段江戸ヨリ中米候ニ付貞昌鹿兒島ヲ發シ九月五日江  
江戸江到着不日ニ御夫人御平快○「寛永十七年四月廿五日薩州ヨリ飛脚  
到来シ当三月廿二日於那答院長野砂金見出シ候掘候テ見申度ヨシ申來

候ニ付御老中へ相伺候処同六月廿五日阿部豊後守重次宅貞昌ヲ被召  
砂金之儀掘候テ可相窺之旨被仰出候○「寛永十五年三月十七日 光久  
公御忌中御発駕ニテ四月廿四日江戸へ御着五月八日 光久公忠召上并  
大炊頭利勝館江御指出秋山修理亮并上筑後守上意之趣 光久公江伝へ  
且貞昌等ヲ召テ亡父中納言遺領無相違被下候間難有承知可仕旨被仰聞  
候同十三日御登城ニテ御家督御相統之御礼被仰上候節貞昌等ヲ召レ御  
口自諱テ 光久公ヲ可補佐旨上意有之

○伊勢大隅守貞豊初弥貞昌子母ハ市米美作守家守女寛永元年子四月廿日  
卒ス三十一歳「春陽守美居士」慶長十九年大阪御出陣横目家騎馬ニテ  
家来十五人召列罷立候弥九郎トアリ

○伊勢兵部少輔貞昭伊勢鶴丸 家久公御十三男ニテ候処貞豊早世ニ付貞  
昌ヨリ家久公江申上継嗣トス「寛永六年五月十四日誕生母ハ崎山八右  
衛門盛秀之女」慶安二年御家老谷山地頭「王子原人追物射手御小袖三  
重拝領」寛文三年八月四日於江戸病歿死三十五歳「頼性院殿幽齋堅心大  
居士」子孫伊勢兵部

一伊勢上総介筑前国ニ罷居候処細川壘齊ヨリ 竜伯縁江御頼之故ヲ以被  
召拘御高五百石被下候元和初四年高帳高百石伊勢上総監

○伊勢右京亮貞則上総養子美ハ有川 子孫一小番太刀「郡山地頭寛永九 島原  
助兵衛貞倉子也」伊勢伝右衛門 年比

寛永九年御人致威御旗八備之内廿四人乘馬一騎  
出陣寛永九年 衆中主従二人鉄砲一丁口一丁鐵式本

一伊勢六郎左衛門貞末有川治部 初有川長門守天正十二年比迄有谷  
貞則嫡子 川長門守トアリ

山百次郎山小根占等之地頭「弟貞貞同前伊勢名字ニ相改候 貞貞ハ伊勢  
成兵部貞 天正十五年 竜伯公御上洛御供之内有川長門同弥次郎下有之  
昌ノ父」

寛永九年御人致威御旗八備之内廿四人乘馬一騎  
十一月七日卒ス「一心庵正伝居士」其子伊勢内記貞明「伊勢弥次郎貞  
朗四州之職金甲ヲ着シ光耀奪目ト云蓋内記同人」初孫次郎 貞  
ナルヘシ「母桑幡河  
守女」内忠恒公朝鮮御供「寛永年中物奉行」慶長十九年大阪御出陣人

数賦之内「騎馬」横目之内ニテ高五百式石四斗九舛人数十四人乘馬老  
正大内記郡山百次等之地頭ナリ元和初高帳百式石寛永九年御人数賦廿五  
人内乘馬三騎一十五人一十八人衆中主  
従二人鉄砲二丁  
口一丁鐵式本

一入来院彈正少輔重隆千代五郎 又五郎  
彈正少輔重隆入道以心子也母ハ北原又五郎實兼入道昌宅女其先ハ 桓武第十  
一代淡谷庄司重國子淡谷太郎光重五男曾司五郎房定心室治二年春庶父命兄弟

五人薩州ニ下り定心入来院清敷致領地人炎院又清色ト号ス「建長六年二月四  
日卒」其子三郎明重「文永三年四月二日卒」其子平次公重其子新平次重基入  
道定門其養子「美ハ明重六男六郎房重子勝五郎重知ノ子ナリ」美濃守重勝

「元弘建武ノ乱南朝ニ属シ繪旨ヲ賜フ」其子彈正少輔重門「亦南朝ニ属シ文  
中元年六月廿三日」於薩州高江歿死其子「彈正少輔重頼永享元年十月九日卒  
其子」彈正少輔重長「康正二年八月廿六日卒」其子串羽守重茂其子重豊也

一入来院領主帖佐岩岫ヲモ領知ス「此文二別紙」  
日新公伊集院竹之山城御攻之砲馳参リ御加勢申上候家臣萩原采女強  
敵長瀬平左衛門ヲ打取其外軍旁有「同八年閏六月 貴久公市来御退  
治平城御攻取之砲重頼走参リ御祝儀申上老躰ニヘ軍旁難成由ニテ御  
暇仕リ」嫡子又五郎重朝二人數ヲ召付在陣為仕候」日新公ヨリ重  
頼女被遊御所望 貴久公御夫人ニ御備へ被遊候 義久公御兄 天文年中  
病死「一法号陽中定祐居士」其子

○入来院石見守重朝初父母ハ白浜加賀守 重女「天文八年閏六月父重頼之  
以下知市米ニ在陣同廿七日日本城攻候時重朝於大日寺口軍旁家来萩原采  
女池水十郎戰功有之候今度之軍功川内方向掠取之旨御高命有之」同年  
八月廿八日夜百次城ヲ乘取「天文五年七月廿三日勝久公ヨリ」或云七年

五月三日卒兵復攻之斬獲地頭山崎豊前成智實久 至是遂陥之「同年九月  
十口限之城「山出」并平佐宮黒高江宮崎ヲ攻取 皆出水之領地ナリ依之長  
臣種田紀伊守秀勝ヲ限之

將

臣種田紀伊守秀勝ヲ限之

臣種田紀伊守秀勝ヲ限之

臣種田紀伊守秀勝ヲ限之

城ニ移シテ文カ天正十三年夏重朝誇武威東郷郡答院凶徒等ニ令与党之間得鎮戌セシム

有之依之異心ナキ旨度々雖奉詔許容無之己ニ出仕停止被仰付候同十四年己八月「八日」郡山城被召上候天文六年三月勝久公ヨリ拝領ナリ「年号シレス」

七月十六日卒ス「法号心定安大禪門定安寺ニ葬ル」其子

○入来院加賀守重嗣初又天文十五年八月廿四日重嗣初陣申木野松木尾合

戰軍勞家臣種田新右衛門秀高辰粉付 貴久公ヨリ父重朝出仕御停止被

仰付置候得共重嗣ハ即為褒美永祿二年「十二月」廿三日御判之御感狀

并犬迫名拝領被仰付「永祿十二年冬重嗣誘引ニテ東郷大和守重尚入道

喜俊降参仕り高城水引中郷湯田西方進上仕候此時重嗣モ為國家長久限

之城百次平佐旋山高江五城ヲ進上仕候公命シテ清色山田天辰寄田々

崎ヲ領スル事旧ノ如シ」十二月二日卒ス「定観寺ニ葬ル法号心山定観

大禪定門」其子

○入来院正少弼重豊初千代五郎又五郎母ハ肝付兵部少輔兼興女「天正二年八

月「十一日」重豊野心之風聞有之由「ヲ聞」重豊大ニ整キ「十六日」

靈社之起請文并清色外拜領之四ヶ名山田天辰田崎奇田進上仕曾以異見無之旨奉

訴候処入来院七十五町并寄田之儀ハ 伯爾様以御分別海辺ヲ打為持候

ハントテ被下置候在所ニ候間別儀有間敷旨御高命有之本領安堵被仰付

候」同九年五日東郷宗左衛門ヲ使トシテ木練柳十箆進上仕候使者掛御

目候此時分高一万六千七百廿斛清敷市比野久重浦之名添田中村倉野「天正三年三月十五日

犬迫物射手二疋ヲイル」天正四年高原城攻之時御供ニテ罷立」同六年

大友合戦ニ罷立」同八年十月十五日肥後八幡城攻之時重豊病氣ユヘ家

老山口筑前守重秋種子田新右衛門秀高ニ兵卒數百人相添差立候此時重

秋秀高以下五十余人致戦死候」同九年水俣城攻之時脇大将ニ付罷立候」

同十一年八月五日卒ス定永寺殿扇皇定永大禪定門広瀬大明神ト崇候

○入来院又六重時初録重豊養子重豊嫡母ハ島津忠將女也後夫婦不睦離別

故重時養母家臣等相談ヲ以善伯様江致言上

左衛門尉歳久之長女 実ハ島津右馬頭以久二男母ハ北郷右衛門尉時久女也

天正元年誕生」天正十五年四月太閤殿下御動坐之砌平佐城地頭桂神祇

忠助江為加勢家臣高木和泉守瀨々善左衛門以下數十人平佐城江差遣同

廿八日京勢平佐城ヲ取圍ミ候節和泉守等致粉骨候重時人質トシテ守屋善右衛門重高ヲ差上致候

ヨリ慶長ニ至リ在伏見之時当家ヨリ出奔セシ近藤權兵衛御国中之事ヲ鑑シ奉

地于石ヲ賜フ切紙ヲ殿下ヨリ頂戴セシ由ヲ聞重高釋路ヲ以訴狀及ヒ切紙ヲ奪

ヒ取義弘公ヘ差上候文祿元年朝鮮御出陣之折柄重時病氣ニ付一族入米

院左京重興東郷甚左衛門重影ニ士卒七十五人宛相付為致渡海候処重影

不図梅北江与党イタシ七十五人於諸所被打果候此時重時奉命重影父

備前守重定并從兵之親族悉致誅戮候重興事ハ七十五人同前朝鮮渡海軍

勞不忘候同廿年左衛門督歳久誅伏孫之製發菊丸後常之城江橋籠ルユ

ヘ 龍伯公度々御使ニテ八月十一日下城之節重時宮之城ヘ差越製發菊

并母祖母致誘引入来院坂中ヘ召置候」同四年秋三ヶ園中所領交替之台

命有之重時湯之尾江繰替被仰渡旧領入来院被召湯之尾江移ル」慶長

元年正月廿日 忠恒公ヨリ時節ヲ以本領安堵之御証文ヲ被下候同年春

重時病氣快氣朝鮮江罷渡り長臣種田新右衛門邦秀等ヲ從ヘ加徳島御陣

所ヘ参着軍務不意家臣覆並六郎左衛門今村玄蕃左衛門及ヒ孫十郎中間

喜兵衛等戦死」同二年春毛利壹岐守吉成伊東民部少輔祐兵秋月三郎種

実高橋九郎元種島津又七郎忠豊安得浦ニ在陣 忠恒公ヨリ加徳島右五

將江御使トシテ重時被差越罷歸候節朝鮮番船數艘出テ遮之重時鉄炮ニ

テ相防キ加徳安得浦ヨリ援之舟出テ首尾能御使相勳 忠恒公御感不淺

右五將ヨリモ使者ニテ感賞行之」同年八月十五日南原城落去之時軍勞」

同三年十月朔日泗川合戦ニ「赤威鎧着用」泗川合戦後明人和ヲ議シ小西行長寺沢正成等泗川ニ来テ和議成

ル十七日明ノ質人茅野供泗川ニ來ル公重 軍勞同十一月十八日番船破り之時

時ヲシテ受取シム正成是ヲ日本ニ送ル 番船破之時村尾小五郎重次種田吉右衛門秀次

軍勞 前田次郎五郎上野藤七兵衛橋口十兵衛戦死ス 夫ヨリ直ニ御暇被下名護

辱ヨリ帰国十二月廿四日湯之尾ニ帰着」同四年庄内逆意之節高原竹崎

兩所之地頭被仰付六月廿三日山田城攻之時擲手之大將ニテ補卒礼ニ屯シ相圖ヲ待テ城ヲ囲ム」此時家臣東郷小次郎那答院藤七兵衛種田休左衛門秀正等十余人戰死入米院上総重將同彦右衛門同忠兵衛寺尾善左衛門重高入米院幸之介村尾源右衛門家老種田新左衛門秀邦家臣東郷民部庄衛門同十郎左衛門斧淵大正院田口半兵衛重里主水等手負也既ニシテ重時命ヲ受ケ高原繩瀬ノ地ヲ成ル」同五年二月源次郎忠真下城仕候ニ付山口駿河守直友上洛被成候時重時并善哉坊ヲ直友へ被召付被差上四月廿三日大阪着ニテ上京四月廿七日朝 惟新様 内府公江被遊御見廻庄内平定之御礼被仰上候節別テ御氣色能重時善哉坊江於御前御料理被下候夫ヨリ直ニ伏見へ罷在 惟新様江御奉公申上候」同年八月朔日

伏見城攻之時松丸口仕寄惣奉行被仰付落城之御鑓合軍勞仕候「家臣村尾善兵衛重張勝田弥二右衛門斧淵源五郎大迫弥七兵衛善功アリ」九月十五日關ヶ原御合戰相破候御殘兵三十余人ヲ召列重團ヲ打破リ帰國ニ趣候處「此時家臣村尾勘右衛門園出善左衛門森万助中閏三郎太与四郎虎助等二十余人戰死」同廿三日江州水口勢田之辺ニテ主従「入米院彦左衛門重次東郷清太村尾善兵衛重張大迫弥四郎前田三郎二郎中閏弥四郎也」七人戰死于時二十八歳壽昌寺毀雲禿定曉居士壽昌寺 日吉大明神ト崇メ後ニ重來大明神ト改号ス

○関ヶ原合戦利アラサルヲ察シ家臣勝田弥二右衛門ヲシテ國ニ下シ家臣ノ太刀ヲ國ニ還ス今 トクリト号シテ家ニ伝フ「世ニ伝フ弥二右衛門帰國ノ日途シハく賊ニ遇フ潜ニ刀ヲ叢中ニ匿シ遂ニ全ヲ得テ國ニ歸ル因テ名ツク」

○入米院伯耆守重高初忠「顯姓」弥一郎 天正七年八月廿日生母ハ義久公長女御平様ト云母ハ人來 重時女子一人有之戰死ニ付重高智養子被仰付院湯中之女子也 慶長十実ハ島津薩摩守義虎之五男也「文祿二年夏長兄泉又太郎忠辰義虎一年春 台命ニ背キ御改易之時忠富并仲見忠清季忠季相共ニ小西撰津守行長へ御預相成肥後國守土ニ罷在候」同三年夏行長へ相付高麗へ罷渡リ軍勞」

同年臘月歸朝宇土ニ歸着仕候「慶長二年五月十五日忠富潛ニ宇土ヲ出立朝鮮へ渡海六月廿四日加德島之御陣所へ罷出 義弘公へ御目見所々軍勞就中唐島番船破南原城攻之時軍勞」同三年十月朔日泗川合戰敵首數級ヲ打取直ニ御供ニテ歸朝以後久秀ト改ム」同四年庄内へ出陣山田城攻之時吉利忠張新納忠在等ト共ニ城ヲ攻ル十二月八日白石永仙伏兵之時久秀百余人ヲ指揮イタシ敵ヲ散々追打候ニ付味方多ク助ル由」同五年関ヶ原御陣ニ罷立九月十五日重團ヲ打破リ 惟新公御側ヲ相離レス江州水口江退去候處新関有リ多勢ニテ相守候ニ付久秀下知ヲ以中閏千兵衛ヲ從へ馳向フ千兵衛駿足ニ追付カス只一騎「久秀」関之守將ニ相斷無為ニ御通行御帰國之上御感被遊関之御脇指揮領御感狀并新恩地二百石拜領仕候此時顯姓弥三郎久音之名跡相續被仰付候」慶長七年秋八月 忠恒公御上洛久秀御供十七日於野尻伊集院源次郎御誅戮同十九日都於耶ニ宿スル処慈母御平様御病氣之當有依之暇ヲ賜リテ國ニ歸ル廿一日上井ニ至ル十一月十二日御平様御病死」同八年國家安寧ノ御祝言久秀与ル」同十年春 忠恒公御上洛御供ニテ罷登候處在洛中入米院重時之智養子被仰付入米院石見守重國ト改名」翌年春湯ノ尾へ歸着婚禮」同十五年夏 家久公琉球上被召列駿府江戶江初テ御參府之御供」同十七年一所衆之儀鹿兒島江罷移御奉公可相勤旨被仰渡為居屋敷 御

城下巽溝邊ニ拜領被仰付」同十八年本領入米院湯ノ尾 御繰替被下且又地頭職被仰付衆中二百人被召附候入米院之内過平ハ私領へ其外城ニテ陣人數貳萬六千二百八十七石余人數百廿「是歳」重高ト改ム」元和二年六月二日 家久公御世了光久 御誕生之節兼テ被仰付置重高御弓之役相勤候「寛永元年仲冬 家久公御參府御供」同三年秋行幸之時御供」同七年「四月十八日」將軍家桜田御屋敷御成之時重高等十余人 兩御所様江御目見御太刀一腰御拾「十献上拾上」白銀五十 拜領」同廿一日大御所様御代重高御目見太刀一腰御拾五献上白銀五十枚拜領」同年七月十九日暴風八月六日大風洪水津浪此時當家之文書亡失スルモノ多シ



同十四年肥前島原一揆之節軍衆被差立候節御談合役被仰付正月八日鹿  
兒島出馬役人種子田久右衛門秀登從行天草久田間ニ到着島津久賀喜入忠政北郷久加山

田有榮相共ニ警固同廿二日甲嶮江陣替廿八日原城落去上使松平伊豆守  
信綱戸田左門氏鉄御掃陣之時舟ヲ天草へ被相繫巡見薩摩之守兵ヲ以山  
狩被仰付候同三月十五日御暇ニテ三角瀬戸ヲ発シ同十七日鹿兒島江帰  
着

○寛永九年六月嫡子又六重通廿五才ニテ卒ス家臣大山三兵衛殉死

○同廿一年五月十七日二男左衛門重次卒ス家臣竹下藏人春綱殉死

○重高犬追物之達人ナリ

寛永十七年 光久公初テ御參府之御供ニテ罷登於備後鞆上使佐々權兵  
衛尉ニ御逢被遊候是御家督初テ御入部ヲ被賀御鷹野鶴御拜領之上使也  
依之重高へ御礼使被仰付直ニ江戸へ罷登々城家光公江御目見御座之御  
返詞有之夫ヨリ西御丸江罷上リ御服式百拜領一 同十八年六月細川肥後

守光利入圍之賀儀御使者被仰付六月朔日川尻ニ至リ二月熊本ニ至ル  
肥後へ差越一三日 光利へ御目見国吉之玉刀ヲ被下一是日熊本ヲ出四  
日八代ニ至リ三齋老ニ見へ八月十五日一掃圍一同二十年 光久公  
郡山御狩ヨリ入来院清敷江御光臨十日御滞在被遊候正保四年七月上旬  
南蛮船二艘長崎へ至ル依命重高兵ヲ卒シ鹿兒島ヲ出立二十四日一京泊

一ニ至リ十六日京泊ヨリ舟ニテ長崎江至リ同下旬賊船無事ニ帰帆八  
月初重高掃圍之節阿久根蔵津ニテ病氣起リ蔵津ニテ正保四年八月十八  
日卒ス年六十九法名蓮昌寺殿大円月鑑菴王昌寺ニ有 同十月七日於蓮  
昌寺川原殉死家臣四人川崎佐左三門助延川添但馬守次  
原田主膳種秀藤田番右三門秀盛

一岩切雅樂介口下部信朗入道可乘齊貞信六右衛門  
三河守 日新公御代御申口役并軍  
配御役者兵道之達者神妙不思儀有之中一弘治三年四月浦生美濃守失  
防禦之術家臣西俣出羽矢上大膳ヲ信朗江中入致降參禱答院江退去ス一  
年号不知七月七日卒ス覚宗大禪伯

○岩切三河守善信入道可春新助可乘齊子也父可乘三兵衛致伝授役者相勳

候 伊東御退治 天正九年水保御陣之時 忠平公御役者豊後入同断、年  
之時御役者 号不知八月七日卒ス心月聚仙庵主称名墓志曰慶長三年庄内郡城降レル  
時モ三月十五日善信凱歌ヲ唱フ

○岩切雅樂介信房信家善信 水保御陣御近習役什人之内ニテ御供一十五  
年六月御上洛御供一朝鮮渡海一関ヶ原御掃圍之砌御供御感状并御知行  
二百石被下候一年号シレス五月十三日卒ス龜山宗鶴居士 其子六右衛  
門信光元上 御使役諸所地頭一子孫岩切六右衛門

一岩切彦兵衛国信子孫 其先不詳或云清原大神  
信礼ノ胤流 慶長十四年琉球征伐ニ付諸  
軍勢三月四日曉天出船如琉球渡海同廿日 家久公国信御使ニテ御酒三  
十樽諸軍勢ニ被成下御書翰ヲ久高二被下軍令ヲ御下知被遊候ト也

一市來備前守惟宗家改改修志 子孫市來民右工門太郎左工門家止子也 市來家之嫡  
字民部大輔惟宗公言養子太郎政家外祖市來院郡司十郎家房之讓ヲ受テ市來致領  
知其子太郎左工門家一其子太郎左工門時家一其子太郎左工門氏家其子筑前  
守忠家其子備後守家親其子四郎左工門助家其子筑前守久家 忠國公御代市來  
没落其嫡子美作守忠家致領也二男家政家曾其子家広其子久家其子家正也朱  
文七年十二月廿九日 日新公一幼少ヨリ近侍一 加世田城御攻被遊候時

御腰物ヲ持御側へ罷在候処城内ヨリ市來備前ト喚ルモノ有之候ニ付則  
御腰物ヲ差上置於御前其敵ヲ打取又敵ニ渡合戦死其子

○市來備前守家朗小四郎父戰死之砌十一歳ニ相成候ヲ御前へ被召出父備  
前事大切之御用ニ相立候ト御意ニテ御腰物拜領被仰付候及壯年日州松  
山一「地頭命セラレ」福島南郷之内十三町被下候一 天正六年九月下旬日  
州佐十原御番トシテ肥後山城守ト兩人被差越候一 同年大夫ト御一戰之  
時軍勞一 同八年十一月廿三日於肥後矢崎城戰死年五十三其子

○市來玄蕃左衛門尉家親小四郎松山地頭一 天正九年水保御陣 忠平公御  
手ニテ罷立一 同十一年秋肥後佐敷江在陣一 同十二年島原合戦之砌島津  
忠長御前ニテ強敵ト相戦拉高名數ケ朱所手負一 同十八年六月十五日卒  
ス一「法号蓮枝芳葉」其子

○市來小四郎家治家於十三歳之時 義久公江御日見父顔色ニ不相替ト

難有上意小四郎ト改名被仰付候当代鹿兒島江被召移候」天正廿年十一月十日松山之内十一町「四反」余被下候町田久信慶長六年三月五日為

加増川辺之内二百石余被下候平田増宗比志島國貞鎌田政近島津忠長之目錄有之」家久公御上洛之時御納殿役相勤候同役自派周防守別府慶長

十三年二月 家久公春山御狩之御供其因琉球國御檢地之時頭取被仰

付被召付候衆鹿兒島士末広甚兵衛海江田十兵衛宮内源助其外谷山志布

志高山ヨリ七人方ハ中村二助ナリ木琉球并官古島八重山不殘致檢地

罷登候節伊東黒吉野栗毛御馬両度ニ拝領被仰付候其後一文字之御腰物

拜領仕候」慶長十九年六月十四日卒「法号花心淨蓮禪定門」其養子市

來長左エ門家延弥右実ハ日高与一左エ門正恒了也

一市來美作守家守八左エ門市來軍八市來時家太郎左エ門時家他腹長男美作

守家統子孫也」天正五年日州平治之時野尻地頭」同九年水俣御陣ニ罷

立」同十五年根白坂御陣御供妻ハ新納武蔵守忠元妹」其外死去年月不

知

○市來軍助家守嫡子天正六年日州石之御陣ニ罷立同十月二日夜罷歸後燒之本ノ由

子精敷申上」十一月十二日於高城麓大友ト御合戦之時致先登戦死

○市來掃部介元和八年五月鹿兒島へ被召移備前持高七百拾二石脱カ之

内五百十二石鹿兒島へ被召直候」元和七年十二月五日「六日兩日」御

犬追物射手八文字授部介ト名乗ル子孫市來清兵衛十郎兵衛小番太刀

○市來清十郎家綱市來出羽守八道幸雲徳養子 文禄二年 忠恒公朝鮮御

供御荷物役朝鮮軍記追加慶長三年十月朔日明軍泗川江攻来リ御切出被

成候処敵敗北舌老爺茅国器備ヲ円メ島津忠長之備ニ掛候御家綱一人敵

中ニ切入戦死」其子和泉守方々奉行職納殿役」慶長十九年大坂御出陣

人数賦四人乘馬壹疋高式百五十二石六斗八舛市來清十郎ト有之

○市來備後守家利早左衛門子孫備後守家保子也家嫡美作守時家他腹長男家統

一總翁養天二公ニ仕フ」其子因幡守家朝其子左京亮家來其子備前守家廣薩州家

ニ仕へ加世田地頭其子民部少輔家春其子備後守家永其子家保ナリ「天文七年」

家保於加世田 家利事天文年間父家保ト守加世田城忠將ト合體忠將兩ヲ

打死ナリ 家利數代薩州家へ隨身イタシ来候間此時代ヨリ奉仕 貴久公」

弘治元年三月廿七日帖佐岩野原合戦之時軍旁」永禄十年十二月廿九日

於養刈市山戦死」其子市來早左衛門家延左衛門其子備後守家尚太郎次郎

「天正八年生」家久公納殿役」忠恒公朝鮮御供之内市來伴右エ門ト有

之」寛永元年家延宅江 家久公御成被遊候ト也

一市來備中守家次十郎左衛門子孫市來上郎右エ門小番太刀家嫡美作守時家他腹

長男家統五代備前守家立」男太郎右エ門家弘人道祐慶其子志

波守家直其子治部少輔家敷其子 天正六年大友ト御一戰并同十五年殿下先

年高城ヲ攻候付致籠城軍旁」新納院高城ニ召移サレ候初居所不知」其

子備中守家林宗次郎其子太郎右エ門初松次郎

家尚入道求己」亦高城二居ル」奉仕 義弘公諸所軍旁」其子市來五兵

衛家昌初宗七物奉行高奉行寛永十七年人数賦高三百

衛家昌初宗七物奉行高奉行二石人数十二人ト有之

一市來備後守家政初竹之内兵部少輔某位市來備後守家保二男民部左衛門竹

織部介子孫市來左中

一H卒ス其子

内隠岐守養子ニ相成其子嫡子家政代竹内ヲ辞シ市来ニ罷成高麗陣庄内  
乱闘ケ原以後度々上方へ御使ニ罷登候一慶長十五年琉球八人賊賦一軍役  
三人  
人織部介アリ家政嫡子助左エ門其子長千代早世ニ付喜入久石エ門  
久洪二男ヲ跡繼ニ被仰付次十郎家賀十郎侯吟味役阿多地頭

一市来五兵衛宗豊十郎右衛門子孫市来勤左エ門家  
宗兵衛トモ 光久公島原一揆ニ付御  
下向御供之内ナリ太郎左エ門入道求レ二男惣兵衛  
ヨリ分立 小番太刀 五兵衛

一市来源助松輪公朝御供  
市来治右エ門 同公納殿役

一市来源四郎宗教加治木ヨリ高麗御供番船破之時打死伏見城改候時松九口  
打破倭人数之内ニ市  
伏見城改候時松九口  
米源四郎アリ一市来内蔵公弘治三年蒲生  
父了歎シレス 降参之時松坂地頭トナリ

一市来孫左エ門大口衆也「慈眼公」朝鮮御供慶長三年二月新納久宣家来  
虎ヲ獲候時於御前孫左エ門矢祭仕候ト也「泗川御勝利之時孫左エ門へ  
被仰付大手之城外へ十五間四方之火堀ヲ御堀ラセ首ヲ埋メ大塚ヲ築立  
ラレシ由

一市来佐介 慈眼公朝鮮御供

一市来下總天正中御軍談合六十四人之内ナリ○同十四年正月新納  
忠元肥後三舟ニ出陣此時下總及家臣立木玄蕃等ヲ運シ敵ヲ誘キ  
降ラシム

一市来嘉兵衛 烏津忠長家老也庄内戦死

一市来加賀守家諸 出水義虎之家老也永禄之比ヨリ高尾野地頭天正十一  
年比文禄三年二月廿八日戦死文禄三如何様則  
鮮御陣歎知レス

一市来肥前守 出水義虎之家老也

一市来氏部大輔家諸元龜比御使衆

一市来清左衛門大口士也慶長十六年二月廿日御茶毗  
之口也貫明公殉十五人之内

ナリ年二十六歳瑞翁良玉居士福昌寺御廟前平石三番日也

一市来善兵衛天正廿年七月晴養公御首ヲ於一条尻橋梟首ノ時宝林庵園椿  
江善兵衛并晴養之臣指宿何某被指添首ヲ奪取候

一市来三郎次郎天正十二年十一月廿六日於肥後日平城敵ト指違戦死子孫  
加世田ニ有之伊集院美作守ヨリ市来次郎兵  
衛江被遺候書狀ニ相見得候也

一市来弥兵衛朝鮮御供

一市来常田坊元和六年高帳ニアリ

一市来彦六清水之士也天文廿三年八月廿九日加治木市口合戦之時打死

一市来出雲家住家住子ハ出雲家正其子吉左衛門家幸通達イタン鹿見島へ罷移候  
如實永年中札改候節居住之儘清光明寺門前札中受置候由

竜伯公御姫御平様和泉之義虎江御縁与ニ付被召付候故和泉へ罷在又太  
郎忠辰改易之後御平様同分江被成御坐御死去以後同分様へ奉仕候

一市来左中ハ竹内家故タノ部ニアリ

一市来左中ハ竹内家故タノ部ニアリ  
井尻紀伊守祐康井尻佐渡守子トモ中伝候山  
子孫伊藤孫兵衛 奉仕 竜伯公納殿役相勤鹿兒  
島衛ヨリ官限へ被召移於困分死

○井尻孫兵祐貞初大千穂五郎利右衛門「祐康養子表ハ祝所奉仕 家久公  
但馬守一男也」  
伊藤ニ改 家久公光久公御納戸役人也

○井尻伊賀守祐貞祐秀 日州駮屋地頭天正六年大友氏入寇ノ時高城ニ籠城  
八年家久ニ從テ水保ニ赴ク十一月春八代ニ從軍十三年命ヲ奉シ五島志  
岐對馬ニ使シテ降屬セシム十四年筑紫攻八代ニアリ或云井尻伊賀守伊  
東氏ノ臣也天正中故アツテ来リ事ヲ按スルニ久辰日記白天正六年九月  
晦日九州石城降ル此時伊賀及荒武右馬介ヲ質トスト蓋伊賀来リ事フノ  
始ナリ今按ニ此人ハ祐貞トハ別人ナリ或人同人トス同姓ノ故ニ誤ルナ  
ルベシ

井尻伊賀守祐盛八太郎四郎祐盛於京都死其養子伊右衛門  
門祐幾実ハ曾入朝嘉二男与伊藤「子孫  
伊藤東作  
太夫」

一井尻四郎左衛門祐秀「伊尻源兵衛祐慶ノ子孫」井尻孫右衛門祐能子也  
伊作久逸ヘ仕ヘ於加世田打死天文七年十二月十九日 日新公加世田江御發  
向之時於吉瀬川鎮守之渡御急難之時祐秀并宮  
原軍人肥後掃部左衛門三人御誂言申上候ハ我々三人御名代ニ戦死可仕候尚御還  
可被遊申上候ヘ其御聞入不被遊然トモ強テ御誂申上候ニ付御聞入被遊御感涙之

一井尻四郎左衛門祐秀「伊尻源兵衛祐慶ノ子孫」井尻孫右衛門祐能子也  
伊作久逸ヘ仕ヘ於加世田打死天文七年十二月十九日 日新公加世田江御發  
向之時於吉瀬川鎮守之渡御急難之時祐秀并宮  
原軍人肥後掃部左衛門三人御誂言申上候ハ我々三人御名代ニ戦死可仕候尚御還  
可被遊申上候ヘ其御聞入不被遊然トモ強テ御誂申上候ニ付御聞入被遊御感涙之

余り御子試ヲ被下候ニ付三ツニ裁候テ二人頂戴仕則敵軍ニ走向ヒ致討死候加世田落城之後 日新公三人カ這福之タメト被仰取死之地ニ六地蔵ヲ御造立被遊候

一井尻佐渡守祐光 初九郎次郎了孫伊藤權角 其先祖ハ曾我大臣末孫曾我兵部祐清二男七郎次郎祐泰母井尻其子八郎次郎祐貞其子七郎右衛門祐徳其子佐渡守祐長了左衛門祐俊其子祐元也伊地知駿河守御平男日記之内 天正十二年正月十日 加世田之井尻宗左衛門初符之猪六二九持セ被参近之間ヨリ御目ニ 日新公御兵具奉行 伊作衆ニ 貴久公御年比衆之懸候トアリ 内祐九子九郎次郎トアリ

○井尻九郎次郎祐宗後佐渡守「蓋祐宗ノ子祐雪カ」トモイヘリ母ハ宇多新左衛門貞次女 大中公御乳持ニテ候 天文廿三年十一月二日於加 大水七年五月十五日 大中公小野へ御動座之時母同前御供仕候御供八人之内ナリ時二年十七 天正四年八月十九日 一世祿記ニ高原城攻ノ時加世田住人井尻早左衛門戦死トアリ蓋祐宗ナリ 於日州高原戦死六十五歳 其子井尻相左衛門祐雪 其子権右衛門「初」 八兵衛祐保元和六年請ニ嫡家相模國伊藤惣左衛門祐重 改伊藤 御酒蔵役并御里役相勤候

一井尻神方坊宗憲 佐渡守祐元二男 日新公國家興隆武運長久之タメ 一國毎ニ法華妙經御奉納之御誓願被遊神方坊ニ被仰付依之薩摩神方ト札ヲ打六拾余州ヲ致廻歷二十二年ヲ経テ四千三百五十六郡之妙經ヲ奉納イタシ帰國仕候ニ付其為御褒美日州真幸院大明司一所被下候天正三年十二月廿七日「公薨シテ八年目ナリ」 日新公江殉死權大僧都神方宗憲法印石塔加世田柿本寺側ニ有之天正三年四月十二日トアリ三年ハ西ニアラス元年ハ西也三元似タル字ユヘ間違歟重テ可糺

○井尻豊前坊 神方坊嫡子也

一伊尻常陸坊 子孫 出水ニ有之 常陸國之住人ニテ候父ハ信太宅岐守トテ常州小田城主信太伊勢守弟ニテ敵國ヨリ小田城ヲ政落シ父兄戦死常陸坊八九歳ニテ候故母懷キ時宗之寺院江隱居候処井尻神方坊致廻國常州江遍歴之御常陸ヲ見參致所望為猶子列下リ候家來三十八人斗召列罷下加世田へ罷在候 天正五年日州都於郡ニ被召移候 後高城ニ移ル 天正年中

飯野御軍談合人数五十四人之内也 肥後井豊後入軍勞 天正十五年秀吉公九州御勤座以後高城ヨリ高岡之源年へ罷居候其後蒲生へ罷移候 慶長五年出水暖役被仰付罷越候 同年加藤清正小西行長ノ 領分守士八代水俣へ押入候御軍勞 慶長十九年申寅九月十八日病死 其嫡子伊尻休兵衛文祿年中高麗へ渡海慶長三年於南海瀬戸戦死二十一歳也 伊尻甚六 常陸坊 惟新公御小姓相勤在京慶長五年八月朔日伏見城政候御鉄炮ニ当リ戦死十八歳

○伊東宅岐守入道玄宅 常陸 伊東氏ニ相改候慶長二年十一月十三歳ニテ高麗渡海隈之城大源寺江越年翌年正月高麗着船 忠恒公御城ニ被召仕候同年明軍泗川ヲ政候時鉄炮ニテ被相防イツレモ氣ハツミ候ニ付桶ニ水ヲ入槽ニ被召置候玄宅水ヲ兩度 忠恒公ニ差上候玄宅幼少ユヘ御指替之御太刀ヲ御持セ被成候ニ付御切出被成候御供仕り走出候得トモ御馬逸物ユヘ奉後候ニ付家來トモ敵ノ馬ヲ奪ヒ取玄宅ヲ乗セ候テ晋州迄參候同年十一月帰朝 羽月長野系凶ニ玄宅ハ野田暖役トナル按ニ野田ハ本出水ノ内後分テ一外城トナル蓋玄宅其暖役トナルカ 同十五年 家久公江戸御参府御供 同廿年出水暖役被仰付候

一井尻八郎 一文祿二年慈眼寺公ニ從テ朝鮮ニ赴ク 於朝鮮南海瀨戸戦死 按ニ竊長二年四月廿四日朝鮮本宮御番帳ニ井尻八郎第九番目ニアリ 一井尻伝次 一文祿二年 朝鮮渡海 朝鮮軍記追加ニ伝次歩小姓ニテ從軍トアリ 一井尻四郎 天文八年六月十七日 貴久公市來平城御政落之御城主島津中務少輔忠辰 弟 貴久ヲ打取ト勲功記ニ見得タリ 一井尻太郎 天正十三年比ノ人 一井尻九郎 左衛門 天正十五年 義久公御上洛之時加世田之井尻九郎左衛門御供之内ナリ 一井尻主税助 天正八年十一月肥後合志城下久保田千町放火之時軍勞アリ 一井尻九郎 兵衛伊作衆 貴久公御年比衆之内也 一井尻小吉 同断

一 井尻平兵衛祐知因分衆中朝鮮渡海

一 伊東右衛門助

何シノ代御家臣ニ能成候哉不詳  
子孫伊東源右衛門小喬太刀

惟新公飯野江被成御座候

時分馬越移地頭「永祿十一年正月廿日 忠平公羽月飛田瀬ニテ御難敵之時為抽軍功アリ大正九年水保御陣馬越ヨリ罷立候」肥後八代在陣軍

勞多シ天正十五年「豊後陣ノ節肥後関城ニテ賊兵急ニ政立候時血戦シテ是ヲ退ク」秀吉御動座之嗣新納忠元江下城可仕之御使相勤候儀忠元伝ニ見得タリ「其子伊東喜左衛門 忠恒公御供御納戸役ニテ朝鮮渡海」慶長四年庄内陣戰死」其子肥前守祐貞御屋形奉行御勘定奉行口事奉行御船奉行等相勤坊津溝辺内之浦等之地頭「寛永十七年人数賦高二百六十石人数十人トアリ

一 伊東駿河守藤原祐豊 伊東氏家臣川崎駿河守子也伊東平右衛門養子ニ相成伊東平右衛門祐氏ハ伊東六郎左衛門祐國ニ男伊東加賀守子也 祐豊伊東養子ニ相成候ニ付「二男」慶長年中稲津掃部ト不和ニテ餓肥ヲ立退父駿河守同前大坂江罷在候処 惟新公被召出候テ御高千石被下此時分ヨリ川崎氏ニ相改「十九年」大坂御陣之時加治木人数被差立候ニ付祐豊ト新納雅楽介兩人被仰付候其後新納右衛門佐ト兩人京大坂殿奉行寛永元年又伊東氏ニ相改候」祐豊宅ニ 中納言様両度御成芦谷ト申茶釜拝領被仰付形角ニシテ和歌一首鐫付有之

釣ラルトモフスヘラルトモ心カラヨシヤアシヤハ人ノ言ナシ 其子伊東九左衛門祐秀 初杉千代 慶長十六年七歳之時ヨリ 惟新公御側へ被召仕候」惟新様元服被遊被下候信國之御脇指拜領一元和元年 惟新公於向嶋武村御狩之節祐秀十一歳ニテ鹿ヲ打留候為御褒美鉄炮一挺御狩向之内南<sup>末</sup> 此日鹿九十三疋御獲物候由」并其日獲物之鹿拜領被仰付 藍國玉目四疋

候」馬書 十二卷每卷 惟新判 并御腰物 備前盛次長 拜領被仰付」元和五年 伊東新六トノト有之 十五歳之時 家久公御供ニテ江戸へ罷登候」其子刑部右衛門祐平八京都へ蹴鞠稽古被仰付飛鳥井家御第子ニ被召付十八人賦被下地頭職被仰付候子孫伊東九左衛門新八郎

一 伊東肥後守祐辰道祐辰<sup>末</sup>「母有川飛騨守女」初源次ニ云在衛門 子孫木脇八郎右衛門 伊東氏之長流日州 都於郡之内木脇ヲ領シ家下ス其子孫木脇主親助代伊東大和守尹祐之女子 忠治公御入御興入之節御供仕 御家ニ罷出候其子大炊介祐兄 貴久公へ御奉公其子若狭守祐光其子祐辰也 父祖ノ云々ノ部ニ記ス 祐辰代伊東大和殿免許ニテ伊東氏ニ相改候」高麗御陣相良日向守殿同前御船奉行役相勤高麗へ渡海<sup>末</sup>「是時殿下米七千石ヲ公ニ賜フ祐辰本田甲斐守ト委積出納ノ事ヲ掌ル追テ朝鮮ニ至ル日向ト共ニ軍勞アリ因テ各禄百石ヲ賜フ是年帰國二年 慈眼公ニ從テ復朝鮮ニイタル四年十二月廿二日廳下十二人鹿皮一枚ツ、賜リ袴ヲ作ラシム祐辰与ル廿七日五候ニ歳暮之御使ヲ勤ム慶長元年兵具役ニテ復渡海二年進入敵境」慶長三年十月朔日泗州御勝利之時分御兵具役<sup>御兵具奉</sup> 同行同役有馬次右衛門高崎左京三渡次兵衛小野左京家久公御供一軍功アリ

一 本田伊賀守鎌田加賀守「御取次ニテ」三人ニ御道服一ツツ、拜領被仰付候與入之節モ御兵具奉行」御帰朝後関ヶ原乱之勅ハ在大坂後祐辰父子江都ニ抵役スル事凡三度又右川淡路ト旅代官トナル又野添太郎右衛門ト旅進物役トナル又大根古山川片浦久見崎秋月ノ倉吏トテリ互勤ス」寛永十九年七月六日卒ス祥翁長瑞庵主<sup>華ハ大徳寺ニアリ元和初其子伊東肥後守祐昌」源次仁右衛門母有屋田右衛門佐女天正十三年生」</sup> 御使役」慶長十九年大坂人数賦与奉行人数拾人乘馬一疋」寛永九年兵賦十七人<sup>乘馬一騎十五人衆中一人</sup> 王子村犬追物ニハ奉行役 綱久公御初入部之時御老中代相勤<sup>祐臣二男六右衛門祐章御納戸」末</sup>「伊東三左衛門祐玄祐辰二男母上床古左衛門宗円女御使役高江串木野等ノ地頭」

一 稱留石見守「入道伝翁」求摩相良之枝流相良四郎兵衛頼親之子孫稱留職人ト申七ノ 忠國公御代御家へ罷出候テ相換守友久公へ被召付其子慶麟其子石見守<sup>末</sup>「宗純記田布施ノ人トアリ」永祿四年七月十二日隅州廻ニテ戰死」伝翁常心禪定門其子新助長泰<sup>本名相良ニ相成相良新右衛門日向守入道閑齋伝記</sup> 佐之部ニ委クアリ

一 伊東肥後守祐辰道祐辰<sup>末</sup>「母有川飛騨守女」初源次ニ云在衛門 子孫木脇八郎右衛門 伊東氏之長流日州 都於郡之内木脇ヲ領シ家下ス其子孫木脇主親助代伊東大和守尹祐之女子 忠治公御入御興入之節御供仕 御家ニ罷出候其子大炊介祐兄 貴久公へ御奉公其子若狭守祐光其子祐辰也 父祖ノ云々ノ部ニ記ス 祐辰代伊東大和殿免許ニテ伊東氏ニ相改候」高麗御陣相良日向守殿同前御船奉行役相勤高麗へ渡海<sup>末</sup>「是時殿下米七千石ヲ公ニ賜フ祐辰本田甲斐守ト委積出納ノ事ヲ掌ル追テ朝鮮ニ至ル日向ト共ニ軍勞アリ因テ各禄百石ヲ賜フ是年帰國二年 慈眼公ニ從テ復朝鮮ニイタル四年十二月廿二日廳下十二人鹿皮一枚ツ、賜リ袴ヲ作ラシム祐辰与ル廿七日五候ニ歳暮之御使ヲ勤ム慶長元年兵具役ニテ復渡海二年進入敵境」慶長三年十月朔日泗州御勝利之時分御兵具役<sup>御兵具奉</sup> 同行同役有馬次右衛門高崎左京三渡次兵衛小野左京家久公御供一軍功アリ

一 本田伊賀守鎌田加賀守「御取次ニテ」三人ニ御道服一ツツ、拜領被仰付候與入之節モ御兵具奉行」御帰朝後祐辰父子江都ニ抵役スル事凡三度又右川淡路ト旅代官トナル又野添太郎右衛門ト旅進物役トナル又大根古山川片浦久見崎秋月ノ倉吏トテリ互勤ス」寛永十九年七月六日卒ス祥翁長瑞庵主<sup>華ハ大徳寺ニアリ元和初其子伊東肥後守祐昌」源次仁右衛門母有屋田右衛門佐女天正十三年生」</sup> 御使役」慶長十九年大坂人数賦与奉行人数拾人乘馬一疋」寛永九年兵賦十七人<sup>乘馬一騎十五人衆中一人</sup> 王子村犬追物ニハ奉行役 綱久公御初入部之時御老中代相勤<sup>祐臣二男六右衛門祐章御納戸」末</sup>「伊東三左衛門祐玄祐辰二男母上床古左衛門宗円女御使役高江串木野等ノ地頭」

一 稱留石見守「入道伝翁」求摩相良之枝流相良四郎兵衛頼親之子孫稱留職人ト申七ノ 忠國公御代御家へ罷出候テ相換守友久公へ被召付其子慶麟其子石見守<sup>末</sup>「宗純記田布施ノ人トアリ」永祿四年七月十二日隅州廻ニテ戰死」伝翁常心禪定門其子新助長泰<sup>本名相良ニ相成相良新右衛門日向守入道閑齋伝記</sup> 佐之部ニ委クアリ

一 稻留丹後守長常 相良慶麟一男八郎 右衛門尉子也 日新公ヨリ左兵衛督尚久江御後見ト

シテ被召付候「丹後守身帶宜キモノニテ 竜伯公ヨリ金銀御用被仰付

大分差上候右為御褒美長秀江 丹後守 二男 御高干石被成下候「稻留金兵衛寛

兼日記大正十二年三月伊集院幸侃部下金兵衛アリ」其嫡子稻留勘解由

左衛門其嫡子民部左衛門其嫡子勘解由次官當代相良氏ニ相改候 左之部 二有之

子孫 相良權兵衛

一 稻留丹後守長秀入道隣松 丹後守長常 一男 惟新公ヨリ圖書頭忠長江後見ト

シテ被召附候「竜伯公ヨリ御知行下石被下候」其後依願嫡子相良吉右

衛門長信江并領高干石致附屬鹿兒島へ罷移次男左京亮隣松跡相統仕本

姓相良ニ罷成候 子孫 宮之城ニ有之 「稻留五郎右衛門岩屋ノ役強弓ニテ敵ヲ

多ク射殺ス後帖佐地頭代」

一 稻留左京亮 隣松 一男 天正十二年於肥前高木戦死小者弥助同前ニ戦死」天文

十七年九月五日於熊本城下合戦之時軍功如木之刑部少輔降参之時左京

亮等於島原北原氏ト戦ヒ軍功 子孫 宮之城ニ有之

一 家村筑後守信是 初彦次郎子孫家村次郎左衛門 織部一父ヲ源左衛門信連ニ云 渋谷重困嫡子中山太郎重

実其子遠州家村ヲ領シ候テ其子孫御当国江罷出候出」竜伯公ニ奉仕」

其子家村源左衛門信房 竜伯公御代御奉公仕候」天正十五年 竜伯公

初テ御上洛候時御供仕候 寛永十七年人数賦ニ高百二十石 一信房子ナルベ 人数五人源左衛門トアリ

シ」 竜伯公御代連歌所へ罷出候

一 家村清兵衛住常 家村孝右衛門 孫 「河崎」平三太夫重家嫡子渋谷庄司兄中山

次郎 太郎 重実廿六代采女信康二男也」島原戦功アリ」東郷重位ニ劍術

ヲ学ヒ又歌道ニ達ス

一 入佐郷左衛門久為 伊集院家五代久氏他腹長男入佐三郎五郎 一其子助三 郎忠清其子助二郎久胤其子之助 四郎右衛門 久利其子

八郎奎之助久実其子 郷右衛門久為也

天正四年高原城攻之時戦死 其子助八久利庄内戦死伊集院之任人トア

リ」久利養子「慶長十九年大坂御人数賦高二百十石乘馬一疋卒五人入

佐郷左衛門」入佐郷左衛門「久貞」実ハ林但馬嫡子也於徳之島死去子孫

入佐助八

一 池田六左衛門貞秀 池田大學左衛門 弟土佐守子ナリ 天正年中御軍談合人数五十四人之内

也飯野ト有之」伊東合戦ニ軍功」於肥後堅志田分補イタシ首ヲ取」豊

後入之御 惟新公御供」小田原へ 久保公御供木村主殿ト兩人御馬之

別當へ被仰付騎馬十六騎之内也」高麗入 惟新公御供ニテ罷渡リ中比

御暇ニテ帰朝又々 久保公ヨリ被召呼伊勢貞昌福島半助頼乗坊黒木宗

左衛門椿松与兵衛等同船ニテ罷渡候於彼地御本陣江参候時数口之事

ユヘ火繩難続皆々火ヲ消シ候貞秀ハ我ニ火ノ可入事モ難計ユヘ火ヲ付

ケ居候処山中ヨリ鹿ニツ走出皆々可捕トイタシ候得其貞秀鹿之出ルハ

不審ナリトテ火ヲ皆人江ウツシ候処如案敵大勢出来候得共皆々打伏候

其晚貞昌ヨリ御礼承候其後 久保公御遺骸御供ニテ帰朝鹿見高ヨリ高

野迄御供仕候庄内御陣ニモ御供山田之新城江帖佐浦生衆被攻付候時貞

秀御使ニテ三度迄可被相退由中務豊久被仰候得其退キ不被申長寿院被

中候ハ右之人數被捨置候テ御退候得ト被申候貞秀中候ハ彼人数御ハメ

被成候テ城ヲ御攻被成候ヘトモ無左候ハ、山田其外ヨリ敵罷出右ノ人

數ハ悉ク可相果由再三申候得ハ豊久尤トノ御意ニテ軍衆一度ニセキノ

ホリ新城本城御攻落被成候其時分捕此時分 惟新公伏見へ被成御坐此

旨被聞召上有川助兵衛殿ヨリ御惑不淺候由御書被下」若年之時分ヨリ

惟新公御供ニテ貞幸江罷移」慶長五年出水境目江被石移足輕大将 至奉 行ト

モ有 被仰付為御加増御高百石被下候」元和五年七月 日 惟新公御逝

去同年八月十六日於加治木実窓寺川原殉死六十二歳法名孝翁永忠居士

浦生永興寺ニ葬ル初殉死之事ハ堅御禁止ニ候処御法度ニ背キ殉死仕候

ニ付 家久公被遊御立腹所帶没収被仰付候其後十四年ヲ過テ寛永九年

中七月六日家財ヲ本ノ如ク被返下候殉死人々之為地蔵塔ヲ伊集院妙円

寺二建立被仰付候貞秀ハ第三番目之塔ナリ 永興寺之墓ハ元和二年丙辰三月吉日彫刻ナリ四年前建立

セシ逆修石藏加治木古老物語ニハ大株寺ニ葬ルトアリ寛永十四年大株寺ヲ別所ニ移シ長年寺ト云此時改葬セシム

○池田治助貞盛貞秀高麗御供泗川合戦之時敵七人打取候一関ヶ原戦死子孫池田六左衛門

○池田左近將監貞安貞秀朱羽第五二男之事故親貞秀分別ヲ以庄内御門箭森出御陣

百日番相勤九月山田ヨリ平田増宗等都城近辺マテ打返候時貞安山口大藏大井五兵衛青山利兵衛四人案内者被仰付此時薄手貞安永ヨリ中霧島伏兵之時御手廻衆百五十人程被相果御手廻明候間伊勢貞昌御下知ニテ山田江被召寄 家久公御側江御奉公申上候庄内加増トシテ十六石被下候其後親江相付出水江罷移為加増十石被下候其後肥後佐敷ニテ御奉公薄手貞安是ハ慶長五年加藤ト戦ヒシ時ナルベシ

一池田源六六左衛門貞秀兄也高麗陣古館之陣ニ鎌田藏人殿主取ニテ御持被成候時漢南人攻取之御戦死

一和泉刑部左衛門島津尚久之家臣也弘治元年三月帖佐早原合戦岩野原合戦等ニ軍方アリ

一和泉三河 宗兵衛久正和泉家二代忠直二男豊政忠勝其子河内忠次其子政久其子源江親久其子三河家久其子越前久良其子久正也久正ハ肝付兼演家臣ニ相成候家跡相統実ハ三島筑後子也筑後事ハ 竜伯公被召仕公弟

二之御娘島津彰久江御輿入之節筑後夫婦被召付右三河妻ハ久正娘ニテ候処三河子小兵衛致出生候節久正ヨリ為引出物和泉家系圖ヲ三河江致附屬候依之 竜伯公垂水江御光駕之節彰久與方ヨリ右之段御申系圖備御覽其子三河國分へ御使者ニ參上之節父筑後御年來ノモノニテ彰久與方江被召付候ユヘ三河事和泉名字御免被仰付久正家跡相統被仰付候三河嫡女事ハ 光久公御局相勤候御局御訴申上寛永六年十一月小兵衛二男茂兵衛「ヲ」鹿兒島へハ被召出子孫和泉小右衛門也

一和泉勝左衛門保重島津忠長家臣ニテ朝鮮渡海泗川御合戦之時一万余之赤備守返候ヲ忠長百程之人数ニテ請答打敷候テ待掛候時保重馬ヲ乘廻

シ下知イタシ右備及敗北致追打候処 忠恒公御馬馳倒シ纏切候ヲ保重奉見其場江走參候テ切レ候纏ヲ結ヒ御馬へ奉乗上候然処保重馬取ノモノ不追付候故馬上ニテ太刀打不自由馬ヲ棄捨候ハンモ無本意存居候処 國師太兵衛定清保重ニ申ケルハ騎馬ニテハ太刀打不自由ナルヘク是程之合戦ニ太刀打ナキモ無念ナルヘシ暫時之間果馬ヲ率ントテ馬之口ニ取付保重忝シト即馬ヨリ飛下リ敵中江切入思之儘太刀打イタシ候 子孫之孫 城殿

一壹岐助兵衛永祿七年 忠平公飯野江御在城之節罷移六十人之内ナリ 一壹岐少左衛門高麗御陣前五百石之軍役自分ニ相勤參候ハ、婦朝之節高五百石可被下旨被仰渡少左衛門五百石之軍役ニテ自身渡海仕候出陣前ニ式百五十石被下候ニ付婦朝之朝殘二百五十石之儀申上候処壹岐ハ伊東先方ニテ致御敵対候間二百五十石ニテ可然旨鎌田出雲守口達ニテ被仰聞候

一壹岐勝三郎大阪御出陣賦 高二百七十石大數 生一足下壹岐氏別領 六人乘馬卷足

一伊丹道甫師親 初孫兵衛尉高師直五十三代之孫之由先祖根州伊丹師親牢人ニ郡有崎之叔主ニテ候ユヘ伊丹ヲ家号ニイタン候山

泉州境ニ罷在享德庵三法印医道之門人ニ罷成慶德庵道甫ト改名イタシテ医道名高者ニテ候道三 惟新様御茶湯之友ニテ候ニ付慶長五年之秋濃州大垣江御越之節道三御同道可被成御約束ニテ候得共病氣ユヘ道市道三同前 御頼被成大垣之様御同道為被遊出候其後道甫御当国江罷下候 処被召留松平松御高百式拾石被下其後加治木江被召移候 元和七年 高麗 百六十石

寛永二年七月十九日卒ス月窓常雲庵主

辭世

アタノ世ニシハシカホトハ旅衣キテカヘルコソ本ノ道ナレ 墓所加治木大株寺ヨリ長年寺江改葬

一今井市兵衛初能 兼練入道松岡 子孫今井仁右衛門 仁礼藏人頼景二男ニテ候 処泉州境之田那部屋道与養子ニ被仰付道與事惟新公御茶湯友ニテ其上 関ヶ原乱後御入魂申上候儀異十他候故御知行千石被下高度々御困へ罷

下り候其後道與ヨリ中上候ハ誰ソ被召仕候人之子ヲ養子ニ被仰付候ハ、右之高致附屬以來御奉公為仕度段中上候ニ付能登ヲ養子ニ被仰付千石之内七百石被成下候テ御納戸奉行園分山川百次等之地頭職

一今井仲兵衛貞則寺沢氏之末流之山 小倉太刀 肥前唐津之城主寺沢兵庫頭 子孫今井八右衛門

正成之家臣今井十右衛門貞旧三千石ヲ領シ家老職ヲ相勤其上兵庫師兼ニテ或時兵庫頭職ヘ致諫言候処氣ニ不合依違テ被為切腹候其子貞則率人仕居候ヲ 家久公初ヨリ御存知為被成モノユヘ被召拘寛永六年御当地ヘ罷越御高三百石被下候テ被召仕候サレトモ今井氏ヲ遠慮イタシ母方之佐藤氏ヲ相名乘候得共其後ヨリ又今井ニ相故候旨寺沢正成ヨリ貞則ヲ誅戮可致候由 家久公江被仰候得共御許容不被遊首尾好御奉行公候

一朱外同氏別稱指宿能登守忠次指宿之郡司彦次郎入道盛榮之其清六左衛門忠次 姉ハ鳥津清子孫也 子孫指宿清左衛門久之空ナリ 其子指宿清左衛門忠政初武部 關ヶ原御退陣御供其外高麗入於諸所軍功有之御感状并御高百石被下候寛永二年乙丑三月十一日八十三歳ニテ卒ス且卜利繁居士墓ハ福山不動寺ニ有之 其子内蔵助寛永五年福山ヨリ出水ヘ被召移十月十一日移加増トシテ御高五十石被下都合百五十石也 賞兼日記天正十一年閏正月高城之山田新助殿之使ニ指宿清左衛門ト有之 一忠次カ称名茶志曰山田新助有信ニ從ヒ天正十五年新納院高城ニ城守又慶長五年関ヶ原ノ役有信ノ子弥九郎有采ノ遂下ニテ 松崎公ニ從軍シ有采ヲ佐ケ 公ノ左右ヲ衛リテ西帰ス因テ高百石ノ御感贈ヲ賜フ

一伊佐敷左近將監久理子孫伊佐之助 佐多平左衛門直行 中務小輔為久子 氏義四男三郎九郎 為氏感永廿年十二月八日於鹿兒島本城毘沙門堂ニ戦死三十三歳法名淨因從兵十 一人同死其子二郎太郎氏豊老後去鹿兒島移居知覽其子尾張守久尚其子右馬助 其子加賀守 遊久其子為久也 天正十四年豊後入之時久理但一家督久政從二軍 義珍公ニ 勞所々軍務 公陷滝田城一時使久政守之久理從之 同十五年三月十四日久政一所ニ戦死二十五歳 法号清居士 從卒五人同死 其子伊佐敷平兵衛久基初小吉 小左衛門 幼而父喪 馮久慶而呼之知覽 以後百太

守公ニ給ニ采地百石 山水ニ移居ス其後移伊作或鹿兒島ニ居ス又為知覽士ニ当代因ニ佐多忠光免許ニ初冒ニ佐多氏ニ 慶長二年佐多久慶之軍代トシテ佐多久英ニ相付朝鮮渡海 寛永十二年四月四日卒ス五十四歳 法号天応法清庵主 一伊佐敷又九郎猛久 白務少輔為久弟佐多忠將家臣也弘治二年十二月廿四日蒲生馬立戦死 年二十六法名慶隆道善 子孫鳥津李家來伊佐敷勇右衛門 一池上源左衛門重治 佐多紀伊守一男久師之兄久師一所ニ朝鮮ニ戦死 子孫池上源石衛門 家來 外ニ池上氏別冊ニアリ

一井上主膳 長寿院盛淳之家來ニテ十九歳之時盛淳之供ニテ関ヶ原江龍立鍵職ニテ盛淳江取放レ里人ヲ頼京都ニ出夫ヨリ南部ニ參リ大隅宮内之出家円明坊ヲ頼伊賀之中野與左衛門江致奉公居其以後正興寺文之和尚ヲ頼帰國之時與左衛門ヨリ刀大小給候明曆二年所著之覺書有之 一井上勤ケ由寛永十七年人数賦高八百石人数十七人 一飯年礼紀伊光家慶長十六年国分高帳 竜伯様ヘ御奉公国分江罷在候御他界前吉田六郎右衛門入道ヲ以被仰聞候ハ紀伊介伊地知勝左衛門儀ハ 国分様江御遣セラレ候左候テ紀伊介末田主馬允胤良善助事ハ御行水之時參候間誰人ヲモヨセ付問敷由被仰付候間如御意其御誼之御奉公三人ニテ相勤候 其後琉球入ニ渡海国王下城ニテ平均ニ付光家ト貴島采女頼張兩人右之御注進トシテ久高之命ヲ以鹿兒島ヘ罷登候 外飯年礼氏別冊 一石坂大和守久武 御家石坂 北郷家々臣也永禄元年三月十九日於肝付宮之原戦死其子右衛門忠陳同前戦死 一石谷伊賀守梅久入道伝心 十二代之孫 町田家十四代之家督ナリ委ク町田家伝ニアリ 町田監物久根 町田家十四代之家督ナリ委ク町

家來 外ニ池上氏別冊ニアリ 一飯年礼紀伊光家慶長十六年国分高帳 竜伯様ヘ御奉公国分江罷在候御他界前吉田六郎右衛門入道ヲ以被仰聞候ハ紀伊介伊地知勝左衛門儀ハ 国分様江御遣セラレ候左候テ紀伊介末田主馬允胤良善助事ハ御行水之時參候間誰人ヲモヨセ付問敷由被仰付候間如御意其御誼之御奉公三人ニテ相勤候 其後琉球入ニ渡海国王下城ニテ平均ニ付光家ト貴島采女頼張兩人右之御注進トシテ久高之命ヲ以鹿兒島ヘ罷登候 外飯年礼氏別冊 一石坂大和守久武 御家石坂 北郷家々臣也永禄元年三月十九日於肝付宮之原戦死其子右衛門忠陳同前戦死 一石谷伊賀守梅久入道伝心 十二代之孫 町田家十四代之家督ナリ委ク町田家伝ニアリ 町田監物久根 町田家十四代之家督ナリ委ク町



所襲戰没于難乃葬其地松為表故勳代墓十二世孫町田久視誌 表松ハ水上ノ辺ニ 街邊二里塚有之

一石原佐渡上方江罷后庵丁之芸道ニ付 中納言楳被召拘御庭丁役被仰付子孫代々傳來イタシ候子孫石原次郎左衛門

一石原助兵衛尉帖佐居住ニテ候処寛永二年加治木江被召置山伏陽春坊ヲ差殺候九寸五分之合口ニテ左文仕留為御褒美御家老三原備中守御取次

ニテ信國之御腰物一腰并御上下一具并領被仰付候其後陽春坊親族敵討可致由相聞得候ニ付鹿兒島江被召移候テ屋敷ヲ被下候「物奉行ニテ江戸ヘモ相詰遣世之後 光久公御加衆ニ罷成御側ニ近仕也子孫石原助左衛門陽春坊事兵

庫頭忠則御懐之類ニテ 寬陽公ヲ奉呪咀候故也依之右御懷幸鹿兒島中村之間に二重虎落ニテ押込セ被召置候由也助兵衛陽春坊ヲ殺候節自分殺候シルシニ是之腹ニ文字ヲ彫置トイヘリ 是當國ニテ陽春坊之伝故矣ト云々 國賊伝ニアリ

一石神彦左衛門藤原重永 子孫 石神伊左衛門 鉄炮鍛冶也重永作之刀子孫ニ相伝ス 称名墓志源兵衛トス重永之 薩州藤原重永寛永十一年々々八月吉日ト銘

アリ子孫石原次郎左エ門

一伊鹿倉織部丞忠兼 豊前忠長子忠兼子豊前忠年代為北郷家之臣子孫郷之城ニ有之 其先ハ伊集院四世忠國他腹長男伊鹿倉又太郎也忠貞其子

左近將監久近其子豊前守久宣其子左近 弘治二辰八月十七日於大崎勢箇嶋戰將監忠知其子節後守忠因其子忠長也

死

一伊作与吉郎久次 太郎兵衛久國子也祖父ハ甲斐久吉曾祖父ハ式部左三門忠房高祖父ハ宗左三門忠清於其所戰死其先ハ四代 忠宗公御舍弟伊

作大隅守久長三代之孫下野守親忠七男石見守久岡二子アリ長 於高麗戰死 子孫

ハ宗次郎久清次ハ石見守久清久満子宗次郎忠忠其子忠清也 子孫

ヲ以氏 トス

一岩切彦兵衛國信 子孫 彦兵衛 其先不詳 或云彦原大神 信種ノ庶流 慶長十四年琉球征伐ニ付諸軍勢三月四日曉天出船如琉球渡海同廿日 家久公國信御使ニテ御酒三十樽諸軍勢ニ被成下御書翰ヲ久高ニ被下軍令ヲ御下知被遊候ト也

一岩山半兵衛直朝 光勝 左京父ヲ岩山三左エ門光期ト云本姓ハ足利氏也野州烏山城主成田泰喬之家臣也泰喬早世其子新五郎重永若年ユヘ泰喬弟左馬介泰元番代ニテ候処是又早世ユヘ重永致軍人候光朝モ浪人ニ罷成武州江戸ヘ致居住候初烏山ヘ罷居候内岩山治部左エ門ト別懇故岩山名字ヲ致所望岩山ニ罷成候娘於佐井事 光久公江奉仕御姫讓御出生被遊候テ織田因幡守殿ヘ御縁与ニテ候一故ニ直朝事 寛永十五年於江戸 光久公被召拘御高三百石之所務并十人賦被成下候テ小番相勤候 直朝子ナク弟金左エ門

直通猶子「トナル」入道シテ故木ト云貞享三年「子孫岩山金左エ門」初テ薩州ニ下リ三百石ヲ給フ姉於佐井モ下ル也

# 本藩人物志 卷之二

波之部

川強兵衛公近ト城中へ忍入其外高麗陣ナト武功多シ「寛永十四年島原ノ乱諸將ニ從テ赴ク」

一島山中務少輔源頼國入道橘陰軒ハ八幡太郎義家之三男式部太輔義國四代之孫遠江守義純母方ノ島山ヲ名乗給フ義純母ハ島山莊司重忠之後家ナリ九代之孫尾張

守尚順之子頼兼之子也母ハ法成寺殿女ナリ「頼國法成寺殿ヨリ和歌ヲ相伝シ藤原姓ヲ給ヒ京都今出川ニ居住」河内國守護ヲ以テ將軍義輝

ニ仕フ」天文年中三好争乳之節京都小河ニ隠レ剃髮シ橘陰軒ト号ス後近衛ニ頼テ「御當國ニ罷下リ坊津辺ニ住ス其後被召出御客人ナトノ席ニ被召出候覚兼口記ニ相見得候橘陰軒男子一人女子二人共ニ出家サセ候此男

子ハ長寿院盛淳ニテ候女子ハ曾於郡念仏寺ニテ尼ニナリ以後還俗シ桑幡常陸守ニ嫁ス橘陰軒ハ天正十三年八月七日坊津ニテ卒ス法名啓叔

常栄庵主」墓ハ一乘院ノ上ニ鳥越ト云所ニアリ法成寺前関白太政大臣道忠公和歌ノ門弟也又万年寺ニ於テ仏ヲ學フ又医ヲ學フ」三十歳之

時京都ヨリ薩州ヘ下リ天正十三年マテ三十余年 太守公御三世ニ奉仕ス」卒ニ及テ公弔等薩ニ命シ其像ヲ凶シ釈春渚寺盛之ニ贊ス」長寿院盛淳之伝子之部ニアリ

一林仙朝坊景福景福ハ初之姓名トモアリ朝鮮人ニテ朴氏ニテ候朝鮮征伐之朝鮮ニテノ守ナルベシ嗣十六歳ニテ被生捕御當國ヘ參リ 竜伯公江御奉公仕リ 竜伯公御病

氣ニ付仙朝坊小島ヘ千日独居シ御願ヲ立ル又大峰江入峯イタシ或ハ霧島ノ火井ニ侍宿イタシ御延齡ヲ奉祈慶長十六年御逝去之御自殺イタシ

殉死ス三十四歳梅大僧都法印御廟前殉死石塔十五番目ナリ

仙朝辞世  
君ハ花惜トスレト春風ニ散テヤモトノ根ニカヘルラン  
トモナクテイカテカ跡ニ残ルヘキトニモカクニモ君ノ行スエイ道

仙朝子ハ林仲右エ門鎮澄 惟新公御姫御下様ヘ被召付御奉公イタシ候子孫佐志ニ有之

一浜田民部左エ門経重入道栄臨初重門子孫浜田佐渡守重好三男也」村

田越前守経定之附衆中ニテ於諸所軍勞武功拔群ユヘ 竜伯公鹿兒島ヘ被召出」 秀吉公九州御勳座之砌達台聴御目見被仰付御手鑑金房兵衛尉正次作

一八二余一子并知行五百石并領被仰付候得共知行ハ老ケ年致取納御孫ノ家ニアリ」

断申上 竜伯公ヘ返上仕候」持高百石」慶長十六年正月廿一日 竜伯公御逝去二月廿日御茶毗之砌於福昌寺殉死七十八歳法名鏡山栄臨居士殉死十五人ノ一ニシテ

第十一号ノ地藏塔ナリ  
二ツナキ命ヲ君ニ奉ルコ、ロノウチハスメル月カナ  
武士ノ取伝ヘタル粹弓君ニヒカル、後ノ世マテモ

栄臨ハ村田越前守手ニテ諸所之御合戦城責等ニ敵中又ハ城中ヘ忍入武功多ク 貴久公御代ヨリ 義久公御代迄御出陣コトニ戦功忍ノ功者也

栄臨ノ子主水重昌「天正十四年白杵合戦敵一人ヲ斬ル」伏見城攻之時押

一橋口石見守安張入道壽菴 子孫谷山「神光」坂之上二居在 相馬小次郎將門

之後胤正國大和之國之鐵治ニテ一條院御宇薩州へ罷下ル 正國子行安上

於海上途難風乘船危候ニ付行安日作ノ刀ヲ海中沈メ候代々刀鍛冶谷山波平

へハ波平カニ相ナリ候ユヘ其奇特ヲ賞シ波平ト申候由

へ居住正國十五代之孫安宗子壽菴ナリ」文祿慶長年間 惟新公御供ニ

テ朝鮮へ罷渡リ彼地ニテ刀ヲ作ル

今度此表兵船浮出通用難成候ユヘ他之手之船一艘モ無渡海候処ニ抛

身命參陣之儀甚深被思召御感知行五石可被下之旨被仰出候仍狀如件

慶長二月廿九日 本ノ儀 比志島紀伊守 伊集院下野入道

橋口石見守殿

右之外慶長五年七月九日同六年二月三日同八年七月十日同年十月

朔日天正廿年霜月九日文祿五年二月九日之加増目録返地目録名寄

帳存之

一橋口對馬介泰重 初上野基三郎大左衛門 上野勝三郎泰芳子也泰芳ハ

永正六年京都ヨリ御當國へ罷下ル伊集院居住ノ由○對馬ハ 惟新公御

中間相動膝突栗毛銅方被仰付木崎原御合戰朝鮮國ケ原へ御供」朝鮮泗

川御合戰之禱 忠恒公御供仕居或橋ヲ御越被遊御橋危候ニ付於橋之

口御馬之轡ヲ取候テ引留候得ハ御立腹被遊御鞭ニテ御打被遊候へハ二

ケ所ニ疵付血流ケ候得共放シ不申候処無程右之橋落候ニ付 惟新公被

聞召御褒美ニテ橋口ヲ名乗可申由被仰付是ヨリ橋口對馬ト改名」関ケ

原ヨリ御歸路於伊賀之内鎌子ヲ盜取 菊花之御飯ヲ炊テ差上候由今ニ子

孫所持アリ」寛永二年丑三月九日病死年八十三法名重山宗珍上坐慕ハ

帖佐龜泉院ニアリ系凶ニハ慶安二年丑巳死ス八十九ト有之由

忠勝也 八世」母北郷數久女延徳三年辛亥生」口州救仁院志布志ニ在城

大輪松山末吉恒吉高隈市成牛根垂水」等」ヲ領ス」川上十郎左衛門尉義

久入道々安へ犬追物ヲ相伝イタス」天文二年遊行上人他阿天下ヲ經

歴シ志布志ニ至ル忠勝享礼ヲ設ケ和歌會ヲナス忠勝歌ニ曰

行年ハフケイノ浦ノ浦波ヲ遙ニ契ル鶴ノ毛衣」

天文七年志布志没落イタシニ男忠常ト飢肥ノ島津豊後守忠朝ヲ頼ミテ

飢肥へ參リ」同十八年二月八日」五十九」歳ニシテ卒ス」法名鳳林儀道

庵主」忠勝嫡子忠茂 初忠」父没落之時母ト共ニ舟行シテ山東ニ至リ外

家伊東氏ニ依ル十一月十三日剃髮シ十二月潛ニ山東ヲ出麗府小野村ニ

来リ居ル其後大中井公忠茂ニ日當山ヲ賜フ因テ移リ居ル永祿四年十一

月廿日卒五十二法名梅屋芳林」其子近江守武久」初四郎母島津忠顯女

享祿三年志布志ニ生ル天正三年三月十六日 貫明公御家督ノ犬追物有

之武久射手」別紙アリ」犬三足射ル同九年八月水俣御陣副將先鋒ニテ

赴ク後日當山ヨリ平泉ニ移リ又日州富田地頭トナリ移居ル其年十月十

九日卒法名天祐良宅」其子四郎忠貞

新納近江守忠影」初久助」 忠影「実ハ」島津備前守忠清子ナリ忠清ハ薩摩

國ニ住ス関ケ原以後行長伏誅 守義虎之三男也兄改易以小西行長ニ預ラレ肥後

後トナルニ及テ祿下二百五十石ヲ領ス後四分一上地ノ節三百石余差上

殘高九百四十石余○犬追物射手相勤候ニ付鞍置馬及小刀一腰ヲ賜フ○

寛永五年戊辰二月廿九日卒年廿五法名大鑑宗智」此子孫新納四郎ナリ

新納之嫡家也○忠勝 ハ國賊伝ニ出ツ

一 新納能登守忠澄入道魚隱齋 初又六子孫新納五郎 新納家四代忠治之二男

駿河守是久之嫡子伊勢守友義之二男ナリ」母三原氏」○伊作河内守久

逸瀨間江被成御坐候時分忠澄祖父駿河守是久女 是則 日新公之御母也大

妙方大姉 久逸之嫡子又四郎善久之妻室トナリ久逸瀨間ヨリ伊作江掃城

是ナリ

之節忠澄モ扈從ニテ伊作へ罷移ナリ○日新公御幼年善久御死後御母堂島津相模守幸久へ御再嫁ニ付忠澄モ御供ニテ田布施へ罷移御後見相勤明応七年日新公御七歳之時御母堂忠澄ヲ以日新公ヲ海蔵院頼僧法印ニ御頼被成日新公御登山ニテ御学文被遊ナリ一永禄二年巳未一忠澄於田布施病死

○新納伊勢守康久入道一珪齋又五郎右衛門佐忠澄子也「母三原氏女」父忠澄

日新公御幼年ヨリ御奉公仕候ニ付康久出生之時日新公ヨリ大式卜中女并安樂雅楽介伊駒筑後介三人ヲ被召付康久養育ヲ被仰付也後日新公ノ御家老トナル「天文八年巳亥三月康久日新公ニ從テ川辺故殿ニ軍ス廿八日高城々主鎌田政貞降參シテ神殿村ヲ獻ス公乃康久ニ賜フ翌日平山城降四月朔日公城ニ入ル康久ニ命シテ凱歌ヲ唱ヘシム」此時加世田未入御手候ニ付康久謀略ヲ運シ伊作田尻村之百姓荒兵衛トイフモノ剛勇ノモノユヘカノ者ヲ近付汝当城之案内イタシ無恙御手ニ入候ハ、我力御ニ取ヘキト約束イタシ荒兵衛粉骨ヲ尽シ加世田之城落城ニ付日新公御褒美トシテ加世田地頭被仰付候康久長女他腹ヲ以荒兵衛

ニ嫁ス荒兵衛夫ヨリ被召出於諸所軍功ヲ康久ハ渋谷氏謀叛之潮市來地頭被仰付弘治カノ地ニ罷移計策ヲ廻シ数度合戦終ニ渋谷代降參ナリ康久

ハ老年「八月二日年号不知」病死ナリ「法名雲宗全朝」

○新納又八郎ハ康久之嫡子也永禄四年七月十二日於廻井原山戦死右馬頭忠將ト

一所朱一法名喚山舟公又喚山慶舟

一新納休閑齋旅庵幼名康久入道一珪之三男天文廿二年於加世田生「久統同母弟」幼少ヨリ出家イタシ長住ト号ス「永禄十二巳年十七歳之時加世田ヨリ上方へ赴遊行上人へ相付諸国ヲ廻歷十七ヶ年目上人ヨリ肥後ノ国八代莊嚴寺住職ニ申付候大正十四年七月岩屋城攻之時長住功勞アリ天正十五年六月十五日竜伯公初テ御上洛之朝八代玉泉寺へ御止宿

旅庵御旅館へ參候御目見仕候時還俗之上意有之御刀大小刀疋光脇指信國御道服新恩地拜領「名ヲ旅庵ト改ム後」高原栗野市來之地頭職相勤惟新公御家老ナリ」文禄三年十月十三日忠恒公御供ニテ名護屋ヲ発シ同日日唐嶋へ着船同年十二月十二日帰朝イタシ直ニ上京御父子様御旨越ヲ竜伯様へ言上其後帰國栗野へ在番「慶長五年」関ヶ原御供敗軍以後鞍馬山ニテ被召捕京部へ出テ近衛様ヲ便リ罷在御和談之以後慶長七年十月廿五日於大坂病死五十歳帖佐願成寺ニ墓アリ天嘗呂蓮居士子孫新納源左衛門二男家加治木ニアリ

○新納仲左衛門忠雄入道所印「初川上平兵衛忠紹幼名葉師丸又雅楽介」ハ旅庵ノ聖養ナリ実ハ川上左近將監久辰入道意船二男也「母頼姪兼朝女天正十六年鹿兒島ニ生ル」御用人役迄相勤「薩州高城地頭職」以後中納言様ヨリ兵庫頭忠朗へ被召附加治木「ニ移リ」元和七年高帳ニ五百七

ヨリ先忠雄知行百六十九石進上是年四月復忠雄ニ賜リ延宝四年十二月十二日加治木ニ卒ス年八十九

一新納加賀守祐久次郎四郎刑部大輔ハ左京亮忠祐子也「忠祐ハ新納家四代忠治次男男駿河守是久伊作久逸ノ旗下ニ属シ文明十七年六月廿一日於日州妖肥川原戦死其子伊勢守友義其子忠祐也享禄元年五月朔日於庄内冷水戦死法名忠祐喜庵」嫡家忠茂志布志没落之朝兄弟トモニ守護方ニ罷出叔父忠澄ノ依奔走肥近ニ罷成

○新納武藏守忠元入道拙齋為舟次郎四郎刑部大輔祐久之嫡子ナリ大永六年丙戌誕生月シレス母岡氏周防守久友女「某年六月廿一日卒法号門一房墓ハ大口専念寺ニアリ」○天文七年十三歳之時父ニ相付田布施へ參上日新公へ奉見○御使役大口清敷飯野再大口地頭職也所領十七町天正十二年比大口諏方

祭礼以鐵米賑ニ見ヘタリ

一伯耆公伊集院へ被成御坐候朝天正十四年乙巳八月七日夜神殿ヨリ伊牟

田左衛門入来院殿格護之<sup>一</sup>郡山<sup>二</sup>蔵之城江忍入候時伊集院二番衆被見  
続候其節忠元ク、リ城戸ノ前ニテ敵一人打取鎗疵一ヶ所薄手也<sup>一</sup>南郷  
四郎市来小四郎亦続テ進ム春山越中統參ル 公諸萃ニ命シ矢ヲ放ツ事  
雨ノ如シ忠元川上十郎左衛門野間為阿爾野村民部ト共ニ血戦ス<sup>一</sup>同心  
衆同前ニ城戸四重取破於内城庭中山口名字之モノト渡合打果其首ヲ  
伯圃公懸御目候于時十九歳初合戦ナリ翌八日郡山落城也

一入来院郡答院東郷浦生加治木御敵對之時吉田難儀ユヘ三原遠江守山内  
蔵人宮原筑前長野兵部忠元五人被召移候數年軍勞イタシ年号不相知三  
月十七日終日之合戦各碎手同四月八日大合戦於興慶寺前馳馬場某忠元  
ト太刀初ニ争候得共翌日敵方ヨリ太刀初ハ大太刀持候人ト申候ニ付忠  
元ヨリ外ニ大太刀持タル人無之故勿論太刀初ニ相成候<sup>俗謂之八年</sup>

一吉田釐ヲ破リ垂越ニ數度合戦殿同<sup>殿同ハ纏頭ナリ纏頭ハ今俗ニ云實ニ与フ  
ル程ノ暗ナル有之也</sup> 花ト云フ事ナリ殿同合戦トハ賞セラ  
ルト云事ナリ有之也

一天文廿三年岩刺御陣ニ<sup>一</sup>屋也五郎<sup>二</sup>名地ニ戰テ殿同アリ

一弘治元年<sup>一</sup>正月廿二日<sup>二</sup>蒲生北村返忠之時伯圃公御太刀ヲ御持セ被成  
候処後殿可仕旨被仰付 義久公御自身御殿ナリ忠元御馬前ニ進尽粉骨  
ナリ

一永祿二年八月朔日鹿兒島ヨリ牛根ヘ兵船被指<sup>一</sup>向候節上乘ハ忠元也其刻  
合戦有之同乗合故手負十二人戦死余多ナリ

一一同三年冬將軍義輝伊勢備後守貞運ヲシテ末吉ニ至ラシム公出テ相  
見ス此時忠元權山善久肝付兼盛ニ命シ其辱ヲ拜ス且報復之事ヲ主  
ル

一永祿五年六月三日横川崩之時 伯圃公御供溝辺ヘ罷在候処伊集院久  
春向人御使之時於城戸久春同心ニテ鑓合手負ナリ<sup>此合戦歳久先陣ニテ  
城ヲ攻ラレ 忠元公</sup>  
モ御出  
馬也

一同十年十一月廿三日馬越城落去此時度々鑓合忠元<sup>一</sup>矢管ニ中テ<sup>二</sup>手

負馬越崩候テモ大口城求摩衆三百程ニテ致入番大口地頭菱刈大膳持  
答候ニ付市山城之市来伊集院田布施川辺衆御番難成由ニ付忠元御番  
可仕旨於馬越 伯圃公ヨリ被仰付市山ヘ罷移リ御番ナリ大口御手ニ  
入候ハ、忠元ヘ地頭可被仰由御意有之

一同十一年二月廿八日馬越ヨリ為軍談合何レモ市山ヘ被米ナリ其鹿小  
苗代業師ヘ可参迎島津忠長御若衆之時肝付彈正同心ニテ參候処大口  
城ヨリ見付候テ多勢打出ミナク市山ノ如ク被引入候敵造掛テ爰彼  
所ニテコタヘ候得共敵如雲霞取掛及一大事候処市山向之坂ノ上ニ忠  
元コタヘ敵ニ指合鑓合セ候此時披官久保筑前一人召列レ求摩ノ足懸  
竹添丹波ト申モノ後ヨリ忠元ノ左ノ片腹ヲ鑓ニテ深ク突候ヲ筑前見  
テ忠元ヲ坂ノ下ニ引オロシ候其時鑓ニ取放レ刀ヲ寝ナカラ抜候テ敵  
ニ指合候鑓五六本ニテタ、キ掛候ヲ相シラヒ市山外ノ垂マテ退入候  
<sup>一</sup>此時川畑藤七兵衛春成外記援來抽戰功<sup>二</sup>此時小苗代ニテ敵式人<sup>一</sup>

ハ川畑市山城之垂ニテ三人一人ハ東郷藤左衛門 打取り腹ト頭ニ鑓六  
甲斐守 一人ト申有武士ナリ

ケ所此時ハ我ナカラ随分之働ト被申候由 伯圃公ヨリ長谷場織部介  
三原右京亮ヲ市山ヘ被差遣御感之由被仰聞候忠長兼寛モ途中ニテ敵  
ニ逢ヒ合戦シ新納右衛門鎌田尾張迎ヒニ出候テ馬越ニ歸ルト云々  
或云此時忠元堂ニ上リ牡丹花下睡猶心在飛躍ト著書イタシ候時敵兵忽出來リ  
久保筑前告急忠元尚靜ニ年号月日ヲ書ス竹添鑓ニテ忠元ノ左脇ヲ突久保則忠  
元ヲ引ヲロス忠元太刀ヲ抜切弘ヒ鎌田彦岐 同年三月廿三日菱刈大膳曾木  
親所右衛門兵衛四元源太兵衛援來リ抽戰功

城ヲ攻崩ルサニ市山城江押寄セ殺挑戰候忠元手疵イマタ不致平快候  
得共白坂口ヘ打出大口ヘ追入候

一同十二年<sup>一</sup>公忠元及肝付兼盛ニ命シ俱ニ羽月城ヲ守ラシム<sup>二</sup>三月十  
八日平和泉ヘ御番被召置候処大口ヨリ度々通路ヲ掛切候ニ付肝付彈  
正忠元以談合御人教ヲ申受<sup>五月六日大野忠宗宮原景種ハ稻荷山誠方山ニ  
伏ス忠元ハ戸神ケ尾ニ兼寛ハ白木河内ニ知ヘ</sup>  
タ<sup>一</sup>釣手ニハ中務家久大口ニ鉄炮ヲ打掛候得ハ敵大勢打出追掛候家久  
戸神ケ尾ノ面ニ至テ返シ敵ヲ忠元目ヲ吹忠宗景種伏起リ忠元横ニ出テ打破ル  
兼寛亦起テ前後ヨリ打破大敗ス是ヨリ先忠元市山ニ居ル時敵方鎌一刃飛來ル

出所ヲシラス其後其奇瑞ヲ感シテ飛龍方神ト稱シ崇  
敬ス毎年七月廿八日ヲ以テ祭ル其柱大口ニアルナリ

一元龜三年五月四日木崎原御合戦之時忠元大口ヨリ御加勢ニ差越ナリ  
一天正元年十二月ヨリ牛根城攻トシテ御出陣同二年正月十八日逆瀬川  
嶺前久留半五左衛門本村筑前同道ニテ牛根惣陣ヘ伺公半根相支候付  
竜伯公御誕之越右三人談合砂城之事候間夜中ニ岸ヲ切テ見度ト申談  
毎夜岸ヲ切也敵此行ヲ見テ致和談地頭安樂備前弟ノ安樂彦八郎ヲ人  
質ニ出ス此方ヨリ忠元嫡子忠純人質ニ出シ同廿二日忠元牛根ヘ入ル

一三三年三月十六日犬追物ノ事アリ忠元射手犬三疋ノ射ル

一同四年八月高原ヘ御出馬之節忠元罷立候

一同六年十月大友宗麟日州ヘ攻入候節大口ハ肥後求摩之境目ナレハト  
テ出陣不被仰付大口ヘ在番也

一出水之義虎ト天草殿天草大夫ヲ箭尽期ナキニヨリ和平御收成之御使  
被仰付般若寺別当五知院同心ニテ和泉ヘ差越致逗留兩家之無事申ナ  
シ候其使ハ天草ノ米迎寺或米迎院トモイヘリト申僧ト海上ニテ致參公其故ヲ

以知人ニ罷ナリ次第ニ致計策候此借大口原田ニ逗留之砌甲初天草殿  
ヲカラクリ付豊後之屋形宗麟行義惡敷旗下之衆心底相替由承リ達  
上聽馬越地頭之鎌田政年以談合出水ヘ參リ義虎ヘ遂談合天草殿上津  
浦殿志岐殿大矢野殿同前ニカラクリ付出水迄渡海ニテ御当家ヘ無別  
儀御奉公之由被申定其逗留中ニ義虎ヨリ発句可仕申被仰候間敵調伏  
ノ心ニ

ムカフカタキハナク殿ム海辺カナ

一同九年八月相良義陽格護之水俣城御取囲之時忠元先陣申務殿御手ニ  
テ罷立候九月廿日義陽降參ニテ葦北七浦進上被致候

一同十二年二月二日相良義陽於肥後豊原戦死ニ付八代察之外騒動イタシ義  
陽子息四郎太郎忠房ヨリ御人数ヲ被申請候節忠元羽月曾木馬越平和  
泉本城山野市山湯之屋之人數ヲ召列馳參リ八代城ヘ八番同十年十一  
月吉利下總伊集院作州同前肥後隈本御番ナリ  
一同十一年肥前之有馬殿竜造寺取合一大事ニ及ヒ為御見次人数御遣之

節忠元病氣ニ付嫡子忠純罷渡候勉六月十三日廿三日於有馬深江戦死トモ云

也刑部大輔忠純 一十月忠元又八代城ヲ守ル

一同十二年三月又々中務殿御大将ニテ有馬ヘ御人数千五百人被遣候時  
忠元モ鎌田政近同前ニ渡海イタシ同廿四日於島原竜造寺殿之六万人  
ト味方有馬殿人数合三千程ニテ遂合戦味方海越ニ存切タル故力肥前  
衆令敗北敵三千程打果候節淮分碎手致軍勞大口衆鎧下ニ敵三十六人  
打留候太刀初ハ忠元ニ男弥太右衛門忠増ニテ候白坂駿河入道齊前致  
同道無比類軍勞也此時戰場ニ武藏カ合戦場ト札ヲ立若疑フ人於有之  
者可承由書付置候得共兎角中人無之武藏老之合戦場ト沙汰中タルヨ  
シ即日隆信格護之城三重江打入夫ヨリ守山大野比良伊福神代皆致落  
去五月七日致歸帆八日佐敷江着船夫ヨリ大口ヘ帰着也

一同年肥後國不殘御旗下ニ罷成計策多シ

一同十三年八月十日肥後花山ヲ崩シ木脇刑部左衛門打死ヲ 竜伯公被  
聞召八代ヘ御發向忠元モ御供聞八月十一日限莊ヘ相働千敵二百程打  
取同十三日甲佐堅志田城攻落シ同十四日三船津守之両城召崩シ九月  
七日肥後豊州ヘ之通越等一円不知案内ニテ御談合難成候ユヘ平田豊  
前拍原周防同心申候テ同十三日阿蘇ヨリ罷歸境目之鉢申上候一十六  
日上蒲地氏忠元ニ因テ降ル廿五日福昌寺和尚ヲ限莊ニ遣シ施餓鬼ヲ  
ナス忠元及有馬筑前ニ命シ花香供養齋飯ノ事ヲ主ラシム十一月六  
日 義久公ヨリ御感状是年三船地頭職被仰付候

一同十四年正月七日大口打立同九日三船ヘ到着ス三原下總新納四郎左  
衛門其外家臣立木玄蕃大口衆有村傳人差遣野心ノモノ共ヲ成敗  
シ同廿三日高森ヲ可仕崩ト日取候勉廿三日ハ 伯園公御忌日ニテ候  
間可有如何トノ出ナリ忠元申候ハ 伯園公ハ軍神ニテ御座候間候御  
内語ニアフヘキトテ各心同心高知尾之甲斐長門入道宗掃ト共ニ高森  
之館ヘ馳向ヒ即時ニ打果候二百程打捨夫ヨリ晝後ヘ入り先ツ入田ヲ  
カラクリ山伏ノ仙鏡坊ヲ以心見其後三船ノ地下人勸之丞并披官中村

源之丞差遣互ニ書状ヲ取カハシ其後入田ヨリ吉良甲斐河南勸解由兩  
人為使者八代へ進上此ヨシ 忠平公へ申上忠元取ナシニテ御見參候  
本  
「忠元又猶木右京中馬源之丞ヲ豊後ニ遣シ志賀道益ヲ誘ウ道益乃大塚  
右馬介新野新助ヲ八代ニ遣シ麾下ニ屬セン事ヲ告ク其後 松陰公野  
村与三石エ門及披官尾崎彦兵衛中馬源之丞ニ命シ志賀城ニ至リ伏針  
ノ法ヲ行ハシム」

一 同年六月筑紫岩屋御成敗之節 竜伯公御兄弟八代ニ御出馬忠元モ罷  
立八代へ在陣

一 同年十月豊後入之時 忠平公御手ニテ肥後口ヨリ罷立管之処病氣ニ  
有之於限致養生候故豊後へ遅ク罷立候間豊後諸所城攻并利満合戦之  
儀ハ不存候

一 同十五年閏白殿御下向ニ付三月十五日豊後府内御引陣ニテ四月五日  
マテ北里へ在陣候処豊後兼坂無二陣ヲ付城中 大野七郎久高 及難儀  
并相良之人數守

由相聞得候間是非見次可申之ヨシ披官田中内藏之丞ヲ以夜中ニ陣中  
ヲ忍ハセ申入置同朝四月十六日ノ曙ニ豊後ノ陣營之地ニ相掛逐合戦  
候町田久倍伊集院元巢ト同前以武略彼陣切崩敵首程打果シ城中へ入  
久高等同前坂無城ニ罷立合志御船船福小川打通リ高田へ參候松浦  
筑前谷山城へ相籠候間足輕衆少々差遣無事ニ追松山へ追入候又尾牟  
田ト云所へ肥前衆罷在候間元巢以談合彼陣切崩シ候間之城へ二三日  
令滞留夫ヨリ樺山殿同道ニテ八代江入候此時肥後國中過半敵ニ罷成

八代之退口難成未一故人ヲシテ詐テ一以武略羽柴秀長ト於日州致合戦  
耳川マテ追打ニテ軍勢令敗北候段今日薩州ヨリ申來候旨諸所へ申散  
サセ同十八日於八代城中花見ニ事寄セ地下ノモノトモ相集沈酔之紛  
ニ右之子供ヲ人質ニ取其夜八代ヲ打立翌十九日安勢智ヲ越へ是ヨリ  
右人質ヲ返シ球摩江退入候処人吉城之留守居深木宗芳 此時相良長每  
御加勢トシテ  
致山陣居候処四月十七日根白坂敗北ニ付 令作病不罷出候ニ付忠元人數三  
同廿一日求摩江歸城ナリ大事之時也 百程召列人古ニ差越宗芳呼出シ手ヲ取候テ求摩川迄同心川ヲ渡リ候  
テ互ニ致暇乞四月廿二日大口へ帰着

一同月廿五日閏白殿川内表御動坐被成同廿八日平佐城被取話候処依御下  
知城頭桂神祇致下城五月六日 竜伯公御剃髮之上水引泰平寺江御指出  
被遊御對顔之上御息女龜壽様御質人ニ御出被成也

一 五月廿四日閏白殿先勢既ニ曾木天堂ケ尾ニ着陣六月中旬閏白殿天堂尾  
ニ御動坐候へ共洪水故河渡リ難叶數日滯陣ニテ候忠元事大口城ニ罷在  
防戦一篇ニ相定且又京勢根ツマリニナリ長陣ナル間敷ト見及必定閏白  
殿可打取寛悟之処 此時米一俵ヲ細川幽齋ニ贈リ御陣中兵糧支御難儀ト承及候  
間乍少進入候謂草勞御働候へト遣ス幽齋閏白殿へ披露之

感實之 竜伯公ヨリ新納右エ門佐義珍公ヨリ伊東右エ門佐ヲ以閏白  
殿へ可罷出之由及度々御異見候 御向殿トモニ御指出之上ハ弓箭不可  
然之由被思召候其ユヘハ御數人様又一郎様為質人御指出ニ付テハ慮外  
之扱共仕候テハ御敵タルヘク思召候段被仰出候間上意難背口惜次第ナ  
カヲ不得已令下城於知学院 今成就寺 遂剃髮拙齋ト罷成曾木ノ御陣場へ

罷出御目見仕候閏白殿忠元之忠勇ヲ被成御感即坐ニ御長刀一振 無銘鞘  
柄共ニ  
裂地金具赤銅 御道服一領地黒肩之通り前後五寸 拜領イタシ仕合好御暇申上  
命之柄アリ 程之獅子織出シ有之

大口へ罷歸候 謂ニ秀吉「秀吉呼ニ武蔵一曰汝亦御歸陣之前又々羽月園田江  
敵、我平忠元云主人義久次第云々」 表惣金面花桐 拜領仕候テ御暇申  
上候其以後此長刀ヲ 太守公江献シ奉リケル時和歌ヲ添

若ニ讓リ奉リ銀山賤ノ身ハ數ナラヌ下代ノヨハヒヲ  
公山賤ヲ武士ト御添削アリシト也

一 以台命拙齋為人質二男弥太右エ門忠増ヲ進上直ニ御供ニテ令上京其後  
忠元三ヶ年致在京人質之御任中上候得共御免無之候處慶長元年季春御  
暇ニテ帰国孫之忠光又々罷登リ在京慶長四年人質御免相濟 忠恒公御  
供ニテ帰国前後十三年人質被召置候

○ 文祿三年甲午忠元上洛忠佐給暇帰国在京中拜台願又待竜山公其外公家  
武家之命事不可勝計  
一 慶長四年三月伊集院忠真令逆心庄内江橋籠ルニ付 竜伯公ヨリ忠元并

山田利安江人教ヲ被相添庄内江被押置伏見へ御注進被遊候ユへ 忠恒  
公右之趣内府公へ被遊言上早速御暇ニテ御帰国此時孫忠光帰国ナリ  
同年六月廿三日山田城攻之時塵取ニ乘リテ相勸時二十七十五歳也

一同五年三月廿四日庄内在陣之為御褒美從 忠恒公御感状并幸光御脇差  
拜領ス同年九月又々大口地頭被仰付彼地江被召移御加増高千石被下候

一同十三年秋 家久公江月毛馬ヲ獻ス八月十日御書被下御惟子三領兩種  
ヲ拜領且多年之武功忠勤ヲ被感之御書面ナリ

一同十四年 竜伯公ヨリ税所弥右工門尉ヲ以拙齋幼少ヨリ老年迄於諸所  
軍勞之場數書記シ可備上覽之由被仰下依之証跡無之殿同垂越屏越等ハ  
相除キ殿同數十九度之分書認メ進上十二月七日 竜伯公御感之御書ヲ  
被下也

一同十五年癸戌十二月三日病死八十五歳法名善翁良英菴主於天竜寺火葬今  
觀善院ナリ墓ハ  
大口興善院之東口之中ニアリ位牌ハ大口青木村  
泉徳寺ニ安置ナリ泉徳ハ古ハ祥雲寺トイヘリム

サノウ春ツレナキ老ト思フラン今年モ花ノ跡ニ残シテ  
是年暮春ノ口号ナリ辞世ナリトソ殉死兩人伊地知又十郎重近入道世  
休宮竹休兵衛也此外多人教可致殉死由候へトモ御免許無之候ニ付指  
ヲ切テ葬ニ相殉候モノ五十余人ト云

一 忠元之和歌

立 春

音羽山コヘクル春ノシルシニハ氷打出ル滝津川波

帰 雁

引コトニ響カヨハ、帰雁朱イカヘル峯ノ松風春ニフカナン

杜 更 衣

ケサミレハ是モカヘキヤ若葉ソフ花ハキノフノ衣手ノ杜

松間時鳥

万代ノ声ヤソフランコ、ニタル松ノ梢ノ山ホト、キス

中書豊久ノ家土窟山次十郎二八ノ比ニテ打死セシ形勢ヲ見テ

キノフマテ誰カ手枕ニ乱レケン蓬カモトニカ、ル思髪

高麗國へ御渡海ノ時大島忠泰へ遺ス

今コヌト別レ行トモ七十ノヨハヒノ名残思ヒヤラナン

敵ノ大口城ヲ囲ミ悪口シテ忠元ヲ引出サントセシ時

敵ノトテ何シニ人ノニクカラン同シ浮世ニ同シ身ナレハ

高麗ヨリ御帰朝之時東霧島へ御名代ニ詣テ、

ハルカナル鷲ノ高根ノ雲ナラン御法ノ庭ノ花ノケシキハ

近衛菟山公薩州御下向之節忠元留隈城ニテ御目見公其手ヲ執テ

日久ク子ノ名ヲ聞ク詞無クンハ敢テ合サシ忠元即詠ス

數ナラヌ深谷ニ生ル夏草ハ高根ノ松ニ身コソ及ヌ

慶長元年三月十一日近衛菟山公御所御庭前ノ糸桜盛之時被召寄

終日御酒宴帰國ノ由申上候勉御餞別ノ御詠寄被下候此春帰國ナ

リ

セメテサハ此春ハカリ糸桜旅タツ人ヲ引モトメハヤ

忠元晩年和歌三十首ヲ詠シテ細川幽齋ノ高覽ニ備フ幽齋点者十

六内拔萃者一首時雨之詠

晴クモル光ハ空ニサタマラテ夕日ヲ渡ル村時雨カナ

此歌幽齋讚美之上書状ヲ被遺ナリ

少将様ヨリ御唯子ヲ拜領ノ節余リニ難有一首

オホケナキ若カミケシノ吞ニフレテシハシ我カト身ヲタトルナリ

此ウタヲ御使ノ別府舍人助へ進覽之処即備上覽候ニ付頼テ朱「高

崎某御使ニテ」御返歌ヲ戴キ候御短冊

オホケナキ身トモオモハシカラ衣キツ、モナレヨ幾トセフトモ

松陰納涼

住吉ヤ西ニ秋風松フケハ涼シサヨスル沖津シラナミ

月前時鳥

時鳥雲間ノ月ノ一声ニ面影キユル花モ紅葉モ

題シラス

サマノニ影ト頼メハ伏テオモヒオキテモ君ヲ先イノルカナ

一 秀吉公御朱印 天正十五年十月廿一日 近衛植家公 三月 信尹 六月廿六日

二月八日 十一月廿六日



前久公永禄七年三月十三日童伯公一惟新公一家久公ノ御感状御状一數多有之能徵録九十二之卷ニ有之

○新納刑部大輔忠辨次郎ハ忠元ノ嫡子ナリ天文廿三年寅誕生母ハ種子島修理亮時女也忠元一女二男ヲ生ス女ハ有川貞真之妻也嫡子忠堯二男孫

太右衛門忠増也天正六年十月大友日州へ攻入候節將ト豊後之松山陣ヲ切崩シ高城へ引籠軍勞一番ニ致城乘同八年五月肥後至ノ河内城忍落之時鏑初之軍勞同十一年癸未有馬殿為加勢川上左京亮忠堅同前ニ有馬ニ渡海六月廿三日於深江戰死三十歳法名大雄宗心居士墓ハ泉徳寺ニアリ位牌ハ大仙寺殿大翁宗心トアリ雄翁ノ墓石塔ト違エリ童伯公ヨリ懸命地大門口青木村ニ被下泉徳寺ヲ建立シテ菩提所トス

○新納次郎兵衛尉忠光次郎ハ忠堯ノ嫡子一母上原尚常女一男一女ヲ生ム男林ノ天正十四年八月廿二日於肥後八代元服 童伯公御加冠御腰物并名次郎四郎ト拝領同十八年祖父忠元人質トシテ京都へ罷上リ在京其後忠佐罷登候テ給暇帰国慶長八年卯八月廿五日早世英伝宗傑居士忠光ノ妻ハ肝付兼寛女一ニ女一ニ女知志清室有男ナシ 二女持志能室

○新納加賀守忠清次郎ハ忠光養子実ハ弥太右衛門忠増嫡子一母ハ猿渡信孝女寛永二年十一月晦日本法号松室妙貞大姉也一文禄四年三月九日生寛永中高奉

行トナル転シテ本城地頭職トナル同五年十二月大口地頭ニ移ル一寛永十四年島原へ一揆相起候節大口之人数召列出陣二月廿八日致城乗戦功アリ小者小金不離一傍力戦シテ死ス大口ノ從兵四人一久富木狩野寺師内記高城七郎左衛門谷口三左衛門一戦死一火口地頭二十七年也出火有之伝記不分明一寛永二年新二高百石ヲ賜フ一承応三年二月十七日卒六十歳法名春屋宗天居士大口兼九田元心山下慶右衛門家臣金丸宇右衛門牧山清兵衛殉死

アラタマル年ニマタル、モノトテハ深山カクレノ鷲ノ声 忠清  
○寛永八年十月明春琉球へ官船渡来ニテ御書被差遣候ニ付忠清ト最上義時へ被差遣候

○新納刑部大輔忠秀能千代丸次郎ハ忠清嫡子母ハ忠光女元和三年十一月廿一日生一寛永四年元服 慈眼公自加冠一慶安三年五月八日於琉球病死年三十四一清泰寺ニ葬ル法号悟心金了居士一大口兼田代諸右衛門并小モノ源兵衛殉死且家来西田龜右衛門事忠秀渡海之時蒙勅当居候魁右之左右承候テ殉死イタシ候一孫新納次郎四郎忠秀子次郎四郎忠繼御用人

一新納弥太右衛門尉忠増次郎九郎左京亮子孫新納弥太右衛門ナリ 忠元入道拙斎二男母種子島時與女一天正十二年三月肥前島原合戦之時太刀初イタシ候同十四年忠元名代トシテ豊後へ罷立候権現城城ヶ尾滑之城平田豊前ト西人以粉骨切取候同十五年忠元關白殿江罷出候時為人質直ニ御供ニテ上京常ニ奉仕 太守公ノ膝下一同十八年忠光上京忠増帰国一朝鮮国御供其以後一慶長五年八月 惟新公御供ニテ大垣へ罷立候同廿二日関東岐阜城ヲ攻落シ江渡之渡リ相渡候故三成大垣城へ可引入由ニ候 公被仰候ハ家来トモ多人數須吳江召遣候間彼等悉引退不中内ハ罷成間敷被仰候へハ三成ハ一人先如城被引退候忠増并川上久右衛門三成之屬ノ口ヲ取

惟新此許江罷在候未練ニ被成間敷由申候得共不聞入如城ニ引退候九月十五日関ヶ原合戦敵殊之外相掛候テ如何可被成哉ト皆人存候時長寿院盛澤高所ニ此期ニ相成候テ御談合ハ入間敷候乍慮外合戦可被成衆ハ某ニ御附被成候得ト被呼候時忠増一審ニナカノト申馬ヲカヘシ候島津久元毛利寛右衛門モ同前ニ被仰跡ニ御殘ニテ候一隰州山田地頭職一慶長十三年墓誌九年申五月七日卒又鉄翁盛閑居士墓ハ泉徳寺ニアリ忠増二女二男ヲ生ム一女島津下野守久元妻二女上井市正兼道妻一男為忠光嗣二男左京亮久連也

○新納左京亮久連次郎忠増二男也隰州山田地頭職一元和七年高三百七十

三石」慶安三年「七月廿八日」於大口卒ス「法号月山良松居士」

一新納五郎左衛門尉忠佐次郎忠元入道為舟之弟忠元為人質上京文祿三年

春見忠元上京故忠佐ハ御暇ニテ罷下ル子孫大口郷士

一新納越後守忠誠初十郎治部少輔 本家二代実久二男悪四郎

久頼之後胤也実久長子久吉ハ他腹之故大崎ト家号ヲ相立中候久頼事ハ

雖為嫡子故有之不被相統居城志布志ヲ去リ肝付ニ立除後ニハ外舅ヲ頼

豊後佐伯ニ罷在於彼地生害ニテ候後家嫡忠臣之代久頼之靈ヲ於大慈寺

中江臨大明神ト崇メ為被申内候久頼之子越後守忠泰三保院高久頼嫡子

伯ヨリ志布志江罷越元久公以敵命十二歳ニテ致預俗上郎忠泰ト号シ後兵部大

大慈寺江罷居候処ニ輔越後守ト号シ新恩地六十町被宛行被補二保院高城地頭

職 其子刑部少輔忠親三保高城地頭 其子越後守孝久於横川 其子十郎三郎

忠亮其子忠誠也「永正七年生母大道志岐守忠勝女」忠誠代初テ 貴久

公ハ奉仕永祿六年九月三日躰府ニ卒ス年五十四「法名称阿」

一新納三河守久徳入道楚弓初忠院孫四郎 八四郎左衛門忠充入道栖雲齋

嫡子永祿十一年於日州福島生祖父孫四郎忠常ハ本家八世近江守忠勝二

男ニテ天文七年忠勝志布志没落ニテ福島之内市木ハ警居忠常事モ忠勝

ハ相付豊後守忠朝ヲ頼罷在天文十年丑九月於日州山東火柱戰死「法号

日山喜妙居士」其子四郎左衛門忠充入道栖雲齋母島津忠朝弟備中守

忠秋女」父同前火柱之戰ニ罷立其後御家ニ罷出度奉願候得共飢肥福島

之地ハ肝要之境目故豊州家ハ致合力候処承知仕候ユヘ多年福島ハ罷在

永祿六年「八月十一日」岩川之領地如元拜領御家老伊集院忠倉証状有

之同十一年「七月」豊後守忠親福島没落ニテ庄内へ退去 忠元庄内へ

差越北郷一雲之子忠虎ハ忠充婚之所縁ヲ以一雲ヲ頼梅北へ致居住天正

十二年「七月六日」於梅北病死「年五十余法名俊暲道齋居士」忠充臨

終之節其子久徳ハ申置ケルハ御家ハ罷出度多年之所存不遂素懐相果候

儀残多候得共不及是非兼々是趣ヲ御家老伊集院忠棟ハ致内談置候間其

心得可致ト申置候ニ付幸侃ハ相付右之越ヲ以致愁訴候得共不相達幸侃

ヨリ拙者方ハ致奉公候ハ、知行千石可遣ト申候ハ其父之遺言トイヒ非

本意知行之多少ニハ不辯偏ニ御家ニ罷出度猶又相頼置候得共幸侃ハ不

相隨儀ヲ慎候哉愁訴不相達候ニ付不得己享慶長元年之春久徳密々富隈

ハ致參上指宿志岐守ニ相付右之成行奉訴候処 竜伯様ヨリ先富隈江罷

移以後鹿兒島ハモ御訴申上候様ニト被仰下難有家人共モ暇ヲ遣シ其身

富隈ハ罷移候慶長三年春高麗へ渡海酒川ニテ戰功アリ細糸ノ同四年庄

内陣ハモ罷「立弓ニテ多賊ヲ射殺ス」賊山下次右衛門矢ニ中テ創ヲ被ル和平

射ルノ矢也今ヤ事平ク諱テ之ヲ 慶長十六年 竜伯公御逝去以後加治木へ

參上 惟新様ハ奉仕元和八年鹿兒島へ罷移 中納言様江奉仕寛永十四

年川上道安在判之犬追物書一部并小笠原刑部少輔光清在判之犬追物書

一部曾祖父忠勝相伝之書ニテ候ヲ仁礼頼景ヲ以 中納言様へ進上其後

源氏物語一部是又進上仕候明曆三年丁酉八月「廿一日」九十歳ニテ卒

ス「法号松岩常清居士」忠陸則久徳 事外伯父日置越後守「忠充」ハ相

付司法致相伝其後弓法書閉本十八冊卷本廿四卷其外品々本田源右衛門

ヲ以 惟新公奉備御覽其後 中納言様へ進上子孫新納四郎右衛門 安千代

久徳子母同氏民部太夫女元和五年六月二日生長シテ 慈眼公

御小姓トナル元祿二年四月四日卒法号秋澤獨月居士

一新納四郎左衛門忠秀入道慶雲初宮内 本家三代近江守忠臣五男因幡守

忠時文明十六年十一月廿七日孫也忠時朱ノ子因幡守忠定其子駿河守忠臣

八日」於飯肥嶋戰死 一本家忠勝ニ事ハ廻城主トナル忠勝没

落ニ及テ來テ公ニ事フ 其子八郎次郎忠次於吉田戰死其子駿河守初十郎左衛門

ト稱ス「天正十二年三月廿四日於肥前島原戰死四十二

三歳其養子ニ右衛門忠貞真実同姓五郎左衛門忠佐 若年ヨリ新納忠元ハ相付於

三男ナリ其養子忠秀也実伊勢守康久三男 諸所軍功アリ「天正五年十一月六日野尻城主福永丹波守伊東氏ニ叛シ

テ來降ル是時忠秀發高原城ヨリ入テ野尻城ヲ守ル」天正八年辰夏忠元

ノ差凶ニテ肥後室之川内之屋ヲ坂元源二郎ト河人忍見テ被地ノ儀委細申上候得ハ人数被差越被攻落候此時合志玄宅ト申モノヲ打取也二十四年忠秀豊後ニ使ス初薩州人川内勘右衛門私ニ鎌田甚兵衛ノ僕ヲ殺シテ肥後ニ出奔ス是ニ於テ忠秀勘右衛門ヲ誹謗シ導トス兩ヲ侵シテ養笠ヲ被リ竊ニ入田ニ至リ吉良甲斐守カ家ニ匿レ留ル事三口久管追城ニ往キ陰ニ謀ニ城主志賀播摩守ニ告ケテ還リ報ス一、天正十五年豊後御引陣之時「賊徒等岡坂梨ノ二城ニ屯シテ尾路ヲ塞ク忠秀先登シ賊ヲ擊破リ創ヲ被ル後」八代ニテ新納忠元伊集院肥後守桂山城守ト後殿ヲ争論之時忠秀曰不肖ナカラ後殿可仕乍憚爾將之旌旗ヲ御預可被下由申候得ハ而將許容後殿相勤也「其後」朝鮮「二從軍ス一日二公志ニ馬ヲ馳セ唐島ニ至リ諸軍皆後ル忠秀及同氏久宣等十五人從フト云婦朝後納殿役トナル」寛永十七年「七月廿二日」卒去「法名高山宗明居士」元和年間鹿兒島高帳三百二十石新納四郎左衛門トアリ

○新納二右衛門久親初宮内少輔忠秀子慶長八年生母ハ合志伊勢守女父忠秀肥後ノ妻トナス家久公光久公御代小番相勤御荷内役山奉行「トナル」御納戸奉行正保三年島津大和守久幸川辺宝福寺へ寺領ニテ遠島被仰付候得

共元來無道人之故御家老衆御下知ニ可被致違背モ難計トテ十二月十日久親并市來備後家尚ヲ宝福寺へ差越久章無異儀御下知ニ可被相附旨得ト申合候処初ハ承引無之候得共漸ニ理ニ屈シ納得ニテ伊東仁右衛門祐昌高崎宗右衛門能延御使ニテ遠島被仰付候旨被仰渡候ニ付久章出寺清泉寺江被差越一宿ニテ候然久章家來ニ三次ト申者宝福寺ニ罷在候ニ付久親三次ヲ召列清泉寺へ差越候於途山三次後ヨリ久親へ切付候願得リ三次ヲ打果シ早速致掃宅候得トモ同廿四日右之疵相破レ死ス下時四十四歳也「法名活度了決居士」

一新納式部少輔忠朝初源八郎八本家三代忠臣之三男四郎三郎忠臣長祿二年七月三日戰死其子七郎左衛門忠辰其子安兵衛守忠與其子四郎三郎久民戰死

其子紀伊守久景之養子忠朝也矣ハ新納式部大輔忠衛嫡子ナリ永祿九年生母ハ新納氏慶長十六年辛亥竜伯公御逝去二月廿日御茶毗之節於福昌寺門前殉死四十六歳「蘭室宗隱居士」御後世之御供御約京中上ル園分ヨリ御遺骸御供ニテ鹿兒島へ罷越本御内へ宿被仰付也「御途中ノ御棺ヲ賜ヒテ其葬礼ニ用ケルトソ」

○新納式部少輔久治源八郎忠朝子天正「十五年二月三日」生「母春山越中直定女元和五年七月廿一日」惟新公御逝去八月廿三日於大乘院川原殉死三十三歳也「竹翁元林居士墓福昌寺ニアリ後寛永九年殉死者ノ為ニ石塔ヲ伊集院妙門寺ニ立ツ第二番地藏塔即久治ノ塔ナリ」  
惟新公へ殉死セシ時伊勢貞豊へ遣サレシ消息ノ末ニ  
淺カラス契ナラスヤ君ニシモ後ノ世カケテ仕ヘヌル身ハ  
澄ノホル月ノ跡ヲシタヒ行心ハ西ノ空トコソナレ

此三首子息龜三郎へ与候遺書ニ載  
久治殉死之節中納言儀ヨリ伊勢貞豊御使ニテ殉死之儀後世之御供ニテ無比類被忠召候得共於戰場抽忠節御奉公仕候ハ、可為御祝着之由被召留候得共御約諾申上置候一筋難然止不奉応御意殉死仕候

○新納宅右衛門久永ハ初久晴龜三郎久治子也「元和元年五月七日生母大炊掃部兵衛女」五歳「之時父殉死命ニ違フノ故ヲ以」知行被召揚寺入被仰付置候故家内難波ニ罷成「其後」父子殉死之御奉公無比類被忠召由ニテ光久公ヨリ右宅右衛門江御切米拾五石拜領被仰付候先祖代々戰死殉死ニテ右之通御切來永代ニ拜領ナリ「或記寛永元年十月四日久永ニ田祿ヲ賜フ」幼少ニテ父ニ離レ諸事無案内ニ有之伊勢兵部殿ナリ江得差圖御目見之願中上兵部殿世話ニテ御太刀進上中納言様へ御目見御普請奉行ニテ江戸へ被召列身上逼迫之段被聞召白銀百枚拜領

万治三年屋久島奉行ニテ渡海「四年四月」彼地ニテ「卒年四十七法号一覺了心居士」

○新納九右衛門久有<sup>建三郎</sup>久永子<sup>朱</sup>「母柳元吉妓女寛永十年二月七日生」

幼少ヨリ 中納言様御側へ被召仕 綱久公へ奉仕殉死御約束申上置候

廻天下一統殉死御太禁ニ付 綱久公御逝去後弟宅右衛門忠丘へ家督ヲ

譲リ夫ヨリ御奉公不仕候テ病死<sup>此子孫</sup> 新納宅右衛門ナリ

一仁礼藏人頼景<sup>初景親又頼尊信濃寺小吉合人</sup> 別府隼人頼延<sup>朱</sup>「別府伝へノ部

ニアリ」子也頼延ハ天正十五年於日州根白坂討死也祖父ハ民部左衛門

頼昌ト云曾祖父ハ土佐守頼堅高祖父佐渡守頼長「主殿助頼房ノ子頼平

ノ子孫」其先新羅源氏也<sup>朱</sup>「世々加世田別府村ヲ領ス因氏トス」頼景ハ

天正八年誕生<sup>加治本古老物語ニ小吉父根白坂ニテ戦死 若年ヨリ 中納言ニ</sup>

被召仕候文祿二年京都ヨリ直ニ朝鮮御供ニテ渡海

虎狩之<sup>朱</sup>「御屏風絵ニ一丸之内ニ扇之紋付タル陣羽織ニ振袖之衣裳着

タル兎騎馬ニテ手鐮ヲ為持 忠恒公御跡ヨリ御供イタス人頼景ナル

ベシ狩之場ニテ 忠恒公御床机ニ被遊御座候時右之兎 公之陣笠ヲ

持 公之右之方ニ伺公ス

慶長三年「酒川軍紺系威」冬御帰朝直ニ御上洛之御供ニテ在京同四年

三月於伏見御茶亭伊集院幸侃御手討之時走寄り留ヲ刺御奉公入御感御

脇指<sup>関長一尺二寸八分</sup> 拜領同年御帰国御供同五年十一月為御加増御高

百石被下候 義久公ヨリ二尺六寸之御腰物<sup>新蛇</sup> 拜領其後 家久公ヨリ

九字切物御鉄炮并奥州鹿毛駒二尺六寸之御腰物<sup>九州</sup> 御弓伝御御鋌拜領

御使役串木野高山高限<sup>高限初テ外城ニ被立</sup> 市来地頭<sup>朱</sup>「慶長十九年大坂陣

御供直ニ江戸江御使相勳元和元年四月帰国是年又大坂出陣」元和六年

御犬追物御張行之御依頼仁礼氏ニ相改候様被仰付<sup>此時宮原左近下相論ニ</sup>

之小名ユヘ仁礼ヲ名乗可申由左近方ヨリ別府ハ宮原一姓ニテ候間<sup>或謂敷ト申</sup>

候就夫御前ヨリ御分被成候ハ藏人ハ別府之仁礼左近ハ宮原之仁礼ト各別之様ニ

仁礼<sup>仁禮成候</sup>「元和七年十二月四日犬追物射手三疋イル翌日又三疋

イル」寛永八年琉球在番翌年夏帰国正保三年正月十三日於江戸卒ス六

十七歳<sup>朱</sup>「如実要心居士」<sup>一本頼広岳院ニ葬ル右塔福昌寺塔司得水軒ニモ有</sup>

元年与頭被仰付候江戸へモ御礼使相勳日光へモ<sup>其子主計頼充復月人地頭其子民部左衛門頼宣明曆</sup>

綱久公御名代相勳諸所北頭被仰付其子仲右衛門

「仁礼佐渡守忠頼<sup>初宮原寛兵衛景</sup> 劍術ヲ東郷重位ニ受ク寛永十八年八

月晦日卒法号喜叟常脱庵主墓ハ加世田日新寺ニアリ<sup>子孫今加世田ニアリ</sup>

# 本藩人物志 卷之三

保之部

一 北郷左衛門尉忠相 讚岐守子孫都之城主 讚岐守子孫都之城主 島津筑後「播磨久本」 北郷尾張守資忠八代之孫也資忠

ハ 御四代忠宗公之六男ニシテ筑前金隈合戦之依軍忠文和元年四月廿

五日將軍尊氏公ヨリ日州庄内北郷院三百町拜領北郷ヲ家号トス二代讚岐守義久永和元年築一城都城ト号シ代々在城三代藤二郎久秀永元年

三月廿日 七口トモ 於梶山城打死世繼無之弟中務少輔知久家督其子讚岐守持

久享徳二年四月 忠国公之命ヲ以都城ヨリ三保院高城へ移ル寛正六年

六月高城ヨリ安永薩摩迫ニ罷移応仁二年同所勢田ヶ辻ニ城ヲ築キ安永城ト号罷移 文明二年二月十一日 卒六十二歳 六代讚岐守敏久文明八年六月再ヒ都城ニ

罷移代々在城 明応九年正月廿二日 卒年七十一歳 七代尾張守敏久 大永元年三月 九日卒ス 其子忠相

也文明十九年誕生母ハ島津豊後守季久 妖肥女也 大永三年十一月八日

伊東北原之勢野々美谷城ヲ取囲ム城兵伊東尹祐 義祐ヲ射殺トイヘトモ

敵兵嚴敷責寄地頭北郷右衛門尉尚久流矢ニ当リ相果候ニ付城終ニ落城

夫ヨリ伊東氏押領之地ト相成此時忠相ハ都城安永兩城ヲ致領知從兵總

ニ八百人程有之トイヘトモ伊東北原新納本田四家之大敵ヲ四方ニ受候

テ多年戦争イタシ候時ニ伊東ハ佐土原ニ在城ニテ川南川北三保高城山

之口梶山野々美谷ヲ押領シ從兵一万余人 イ六万八千トモ 有之其内八千之人

數ヲ分テ忠相ト敵對ス北原ハ飯野加久藤三山高原志和地山田馬園田栗

野横川ヲ領知シ一万余之人数ニテ忠相ト争戰ス新納ハ志布志福島安樂夏

井大崎松山恒吉梅北岩川末吉ヲ領シ八千余人ニテ忠相ト争戰ス本田ハ

清水曾於郡其外隅州之諸城ヲ領シテ忠相ト境日ヲ争ヒ鬪戰已時ナキト

イヘトモ忠相武勇ヲ以伊東ヲ山東ニ追退ケ北原ヲ真幸ニ追込新納ヲ遠

境ニ追出シ本田ヲ崖下ニ屈セシメ威名ヲ四方ニ振フ誠ニ御困遠境之藩

鎮也」大永六年五月六日忠相一族北郷左京亮加茂民部ヲ清水ニ差遣シ

曾於郡ヲ為攻取候城中内通之モノ有之人数ヲ引入候ニ付容易ク入手裏

北郷二郎右エ門久利ニ地頭ヲ申付ル」享祿元年五月朔日新納近江守忠

勝日州中郷ニ致出張冷水ニ陣取伊東義祐小鷹原ニ陣取進テ冷水ニ押掛

合戰イタシ候処忠勝設伏兵置候故伊東先陣及敗走此時忠相ハ八百余人

召列城ヶ尾ニ陣セシ処伊東援兵ヲ忠相ニ求ム新納モ又加勢ヲ頼ム忠相

伊東ニカヲ合セ横合ニ新納ヲ打破リ梅北城戸口迄詰メ新納力勢ヲ七百

三十余人打取北郷方ニモ北郷民部久剛同嫡子三郎四郎北郷撰津介忠政

池袋肥後守等打死也」同二年十一月廿八日忠相本田ト春山原ニテ廻合

敵五十余人打取候也」同三年本田并那答院之人数曾於都城ヲ攻打城兵

防戰難叶地頭北郷久利城ヲ本田ニ相渡シ庄内江退去故ニ忠相又々人数

ヲ倍シ曾於郡ニ築向」西城ヲ攻打之処清水ヨリ後詰押來候故忠相退陣

ス此口北郷左京亮井上平左衛門戰死ス」然ルニ高城山之口勝岡野々美

谷下之城小山城梶山城松尾之城八ヶ外城ハ伊東押領之地ニテ義祐一万

三千余召列高城ニ在陣ユヘ忠相島津 豊州 忠朝并北原ト申合セ内々高城

ヲ可襲由候処敵方ヘ洩聞得八ヶ外城ノモノトモ高城ヲ堅固ニ相守ル」

天文元年辰十一月廿七日忠相忠朝北原三家之兵高城ニ押寄ケル故城中

ヨリ切出於不動寺馬場合戰敵敗北ニ付石山越迄追打伊東方高城之主八

代長門守其外福津落合 梶山 海江田 勝岡 須木之米良 野々美 長倉 海老原 城主

(原表紙)

本藩人物誌

保邊  
止

三

(原寸 縦二七・六釐、横三二釐)

山之口 福永下城 官崎宮永 小山村山川崎松尾 以下三百八十余人ヲ打取

此合戦島津忠朝之伝ニ有

○惟新公御自記ニハ勝岡城ニ村山川崎小山城ニ海江田松尾城ニ長倉海老原野々美谷ニ須木之米良下之城ニ福永福崎山之口ニ宮永宮崎トア

同三年高城城代落合刑部少輔兼住勘藏主ト云フ出家ヲ以忠相ヘ致内通趣有之聞正月六日夜忠朝人数ヲ差遣シ容易高城ヲ攻取依之翌七日梶山勝岡山之口敵皆々城ヲ焼払ヒ退散ス故忠相入手裏依之家督ヲ嫡子忠親ニ譲リ自身高城ニ引移ル忠相四十八歳也同四年八月十四日忠相人数ヲ新納領之末吉松山梅北ニ差出シ豊州家ヨリモ加勢之人数ヲ差出ス伊東北原隙ヲ伺ヒ在々所々ニ放火シ同十一月廿九日北原カ領内志和地ニ人数ヲ遣シ城下ノ町ヲ打破リ敵ノ首五級ヲ打取百五十人ヲ生捕ル同五年二月廿五日北原山田之人数ニテ安永ニ攻入忠相之兵防戦シ敵六十二人打取是日池袋源左衛門戦死同六年三月三日忠相岩川新城ヲ攻取テ武拾余人生捕同七年正月三日財部城ヲ攻取同二月二日梅北城ヲ攻取同月廿日豊州家安楽城ヲ被攻取候四月二日夏井没落七月廿三日忠相松山末吉城ヲ攻ル家臣城ヶ崎右衛門儀英来住源七郎秀光同源六綱安等末吉ニテ打死同月廿七日志布志ヲ攻ル右五ヶ所忠相カ領地ニ相成右諸所新納家之領土也新納家之伝同九年伊藤之家臣穆佐城主長倉上野介長嶺地頭長倉能登兄弟伊東ニ叛キ川南ヲ致押領候伊東是ヲ為征伐援兵ヲ忠相ニ求ム長倉モ又援兵ヲ差遣給ラハ川南之地忠相之領ニ可罷成由申遣候得トモ忠相不致必諾依之長倉又豊後守忠広ニ加勢ヲ求ム忠広早速穆佐ニ打越及合戦候処敗軍ニテ是ヨリ豊州家伊東ト不和ニ相成合戦ニ及フ事数十年也同十年北原伊東ト致同意可取高城トテ伊東ハ鳥越ニ陣ヲ取北原ハ志和地ニ屯シ罷在此以前北原カ家臣豎山丹波忠相カ家臣有田加賀等カ計ニテ北郷北原致和睦以誓紙堅ク結約ニテ候処家臣等之依卒尔又々和儀相破レ再及戦争此年四月忠相人数ヲ遣シ志和地ノ繩瀬ヲ焼払同五月山田ニ打出敵六人ヲ打取同六月十六日伊東北原ノ両勢高城

ヲ攻ル梶山勝岡山之口ヨリ後詰之人数馳来リ忠相カヲ得城門ヲ開キ打  
出ル諺方之馬場ニテ前後ヨリ攻打候ニ付敵敗北六十余人ヲ打留ル北郷  
方ニモ北郷次郎左衛門久利以下数十人打死同月廿六日忠相人数ヲ志和  
地ニ出ス五十二人打死ス同十一年二月十二日北原カ領内志和地水流  
繩瀬等之妻作ヲ荒シ願越マテ乱入イタシ五二矢軍同開三月二日又々森  
田并児玉口西椿等之妻作ヲ荒シ候処志和地之敵西椿之辺ニ打出候ニ付  
一戦イタシ追込候同月廿三日山田木野牛谷ヘ差越又々妻作ヲ荒シ候処  
敵三百余人打出矢軍ニテ敵敗北如霧引退ク同月晦日豊州忠広肝付之  
蓬原城ヲ攻候出ニテ加勢ヲ被求候ニ付北郷左馬介ニ人数ヲ差遣遣候処  
蓬原榎手鹿野屋ニテ及合戦肝付方敗走称寝之人数齒田将監称寝八郎左  
衛門同長門以下五十余人打死同年六月十八日梶山勝岡之人数北原カ  
領内志和地ニ発向相働候処敵打出候テ平江ニテ及合戦北原之人数十七  
人打留同日豊州忠広平房ニ出張加勢ヲ被相求候ニ付北郷信濃ニ人数二  
百余人相添差遣ス同八月二日忠相木野牛谷楠牟礼之作毛ヲ荒シ候処北  
原之人数真幸ヨリ馳来候テ志和地之人数ト一ツニ相成忠相ト駈合候処  
忠相無勢ニヘ及敗北高城ヘ引退ク敵薄谷迄追掛来候処返シ合於丸谷川  
敵四位助七田上治部以下ヲ打取味方山田勘解由栗地与一左衛門等分捕  
高名同月廿日伊東北原高城ヘ打入春日田間之作毛ヲ薙散ス油断之折ヲ  
見スマシ忠相父子打出小山川原ニテ合戦イタシ志和地城下迄追詰北原  
方志和地之城主白坂下總守本田市兵衛栗野地頭洪谷兵庫大將以下七百  
三十人打取ル三男又五郎久原手柄イタシ味方ニモ馴松太郎助并郎等織  
部等打死同十二月十六日野々美谷城ヲ攻落ス北郷信濃ヲ城主ニ申付置  
其後北郷三郎右衛門ヲ地頭ニ申付依之伊東方鳥越陣ヲ払ヒテ退散ス  
山田之城ハ北原氏押領之地ニテ白坂左衛門地頭ニテ候処城兵釘村伊予  
ト申者忠相江内通イタシ忠相山田ヲ攻落候テ小杉某ヲ地頭ニ申付置候  
処北原又々攻落小杉以下六十三人打死ス故ニ北原遠江守城主羅厩候ニ  
付天文十二年正月廿一日忠相都城安永ノ人数ヲ以山田ノ城ヲ攻ル同廿  
四日落城シ城主ヲ打取北郷岡書介忠茂ヲ地頭ニ申付ル同五月九日  
忠相父子志和地城ヲ攻ル同十日城中ヨリ乙守某柚木某使者トシテ忠相

ニ降ヲ乞故ニ伊黒丹後有田加賀ヲ城内ニ遣シ下城ニ相決同十一日未刻  
蒲生式部小杉右近城ヲ受取忠相父子城中ニ入勝算之祝儀有之」同十四  
年三月十八日 貴久公守護職ノ事島津忠広豊州忠相同心ヲ以諸家江申  
調伊集院江參越仕 太守公ト奉仰候一同年十一月忠相稻荷大明神修造  
仕候忠久公御代庄内鴨津  
ニ御建立之稻荷ナリ 天文十五年 義久公御年十四ニテ御元服忠相  
江加冠被仰再三御辭退申上候得共頻ニ被仰付候間任上意相勤候貴久公  
ヨリ被  
進候太刀ニテハヤシ候ア 御髮ヲ木田紀伊守結ヒ中候忠相ヨリ御衣裳進上  
テモノハ双六盤ニテ候 御髮ヲ木田紀伊守結ヒ中候忠相ヨリ御衣裳進上  
仕候忠相二男北郷左馬持參候ヲ伊集院治部請取候御三献之宮仕ハ当奉  
行本出下野同弥六同彈正同宗左衛門ナリ御名ヲ又三郎様ト 日新公ヨ  
リ御付ケ候御名祝トシテ 日新公ヨリ 又三郎様江被進候御太刀ハ加  
世田被召落候節 日新公御帶添敵御打御嘉例ノ由ニテ新納伊勢持參候  
ヲ 御西殿様御前ニテ川上上野受取候テ差上候御祝物御太刀一腰金覆  
輪  
御鎧甲御弓征矢鞍置御馬一疋引添一疋烏目五百文忠相ヨリ進上上持撰  
津介并同名之モノ此兩人ニテ渡候御屋形ヨリハ三原遠江同次郎左衛門  
受取候御返礼ニハ御太刀一腰金覆  
輪 御鎧甲弓征矢鞍置御馬一疋烏目五百文  
忠相江被下候同日 義弘公御年十二ニテ御元服御髮ヲ 貴久公御ハヤ  
シ候伊集院一掃部本 結ヒ申候事 天文十七年本田紀伊守蕪親不臣之聞  
得有之御征伐可被成由候ニ付蕪親相驚キ曾於郡ヲ忠相ニ致附与頻ニ取  
成相頼候得共 太守公御許容無之候五月忠相宮内へ差越本田父子ヲ相  
招候テ和睦之儀申請置候如又々祁答院北原江相通候無謀謀反取企候ニ  
付九月九日蕪親父子清水没落イタシ庄内へ遁來り忠相ヲ相頼罷在候  
同十八年三月鉄肥へ出陣同十一月加治木御征伐ニ付忠相出陣イタシ調  
達ヲ以肝付蒲生渋谷販服之儀申請候依之何レモ忠相并菱刈ニ相付誓紙  
ヲ以降參仕候十二月朔日諸軍帰陣同十一日忠相菱刈以同心右之三十致  
同道清水江罷出御目見仕御礼申上候 永祿元年曾於郡ヲ 太守公江進  
上仕候鉄肥之後詰ヲ  
為可奉頼上也 同二年十一月十六日於高城病死七十三歳法名音

峰寺殿仙岩浄永大禪定門葬幸祥寺姓石  
以於竜峯寺

○北郷尾張守忠親次郎左衛門後島津  
豊後守入道泰心 忠相嫡子永正九年誕生母ハ島津修理

亮忠康女 天文三年父忠相都城ヲ讓渡候テ高城江隠居依之忠親父之名

代拾年余相勅北郷家九代之家督ニテ候 同十五年正月十七日島津豊後

守忠広養子次郎三郎賀久忠広從弟武藏  
守忠廣之子也 病死故ニ同月廿七日忠親ハ忠広

危急之出承り加勢トシテ鉄肥酒谷城ニ相籠ル此時忠広外ニ世継無之候

ニ付忠親ヲ養子ニ致度頼ニ致懇望 太守公へ申上御沙汰之趣モ有之故

不得止尋忠親家督ヲ嫡子二郎忠豊ニ讓渡候テ忠広養子ニ罷成候二月十

八日鉄肥本城松尾城ニ罷移祝言之儀式有之候此時武藏守忠親偏怒ニ堪兼  
不致出任候ニ付一家中相談

ヲ以武内忠昭并一族ヲ配流イタシ候白ナリ○忠広之養子忠広之養子  
ニ罷成候ハ天文十四年十二月十八日ト書記候書モ有之 同十八年四月十八

日忠広家督ヲ忠親ニ讓渡シ代々之文書家伝之重器等日置伊勢ヲ以忠親

へ被相渡平山越後ヲ以右之品々相受取家督相統鉄肥江致居城候六月十

八日忠広櫛間江罷移天文十九年正月廿日忠  
以卒去法名曰翁智鑑 永祿十一年鉄肥没落ニテ都城

へ退去ス 元龜二年六月十二日於都之城病死六十八歳法名大香寺殿齡

岡永寿居士養子以後ノコトハカノ伝ニ詳ナリ  
養子以後ノコトハカノ伝ニ詳ナリ

○北郷右衛門尉時久入道一雲法印忠親  
忠親 忠親嫡子享祿三年庚寅誕生母称

寢大和守尊重女也天  
來 天文十八年二月廿九日卒法号安先文詳大姉 天文

十五年十四年十家督時久十  
二月モモ家督七歳也 同十六年末正月十九日実父忠親郷原城ヲ可

攻由候ニ付忠豊為加勢庄内之人數ヲ召列差越郷原ニ打向ヒ敵五十二人

ヲ打取生捕百三十人也同四月十五日鉄肥南郷へ新城ヲ構へ北郷將監忠

直ヲ城主トス同九月十三日豊州家之家臣日高源右衛門新  
本 新城ニ有之

心替之聞得有之籠舍申付ラレ候処源右衛門力親族宗善ト申モノ其党類

ト相語ラヒ俄ニ源右衛門奪取目井之城江逃入候テ敵方ニ相通シ候十一

月十八日之夜也依之南郷新城殊之外致騒動候得共堅固ニ相守居候如同

廿二日伊京勢押寄セ來候テ野領ヨリ火箭ヲ射候テ城中悉ク致焼亡及落



城々主忠直其外北郷源七郎久幸大村美濃父子阿多若狭父子以下數人打  
死ス」同十七年正月廿四日豊州大友之使僧真光寺致來着豊州伊東和陸  
之慶ニテ候得共伊東不致承引候同七月七日伊東勢鉄肥本城へ襲來候テ  
八幡馬場ニ責入候得共追返シ此時加勢トシテ差越居候北郷凶書忠茂竹  
下某以下數十人打死散外山某 同八月八日伊東又々新山之井手平二陣ヲ  
取候テ鉄肥方ト致合戦候此時北郷家臣來住源之慈秀貞等打死同十一月  
五日之夜伊東勢鉄肥新山城ニ忍寄候テ火箭ニテ城内ヲ射候城主豊州家  
臣平田出羽北郷加勢入水刑部來住三河防戰イタシ敵本城ト新城トノ通  
路ヲ相支ヘ一戰イタシ引退ク同十二月廿日夜敵又々新山ニ押寄セ夥數  
火矢ヲ射込候テ攻入候ニ付村田八郎經廉戰死イタシ候」同十八年三月  
十一日 貴久公ヨリ鉄肥加勢トシテ伊集院大和守忠則ヲ被差越候時久  
カ祖父忠相同前鉄肥へ差越豊後守忠広へ相讓シ四月二日業毎ケ辻或作護條  
舞ケ之伊東陣ニ押寄セ天文十六年七月晦日 志布志福島木吉人數ハ野頭ニ  
責入鉄肥庄内之勢ハ追手ヨリ押寄候テ攻落ス平田出羽守拳凱歌候此日  
伊東一族伊東治部少輔稻津四郎左衛門以下二百三十六人之首ヲ打取候  
忠相家臣小福三郎打死翌三日郷原ニ打出麦作ヲ難散シ候此夜井手平陣  
去年八月八日 其外高障子郷原悉ク致放火退散ス同四日高佐鶴戸宮之浦  
伊東陣取所也  
目井城皆々落去イタシ一日一夜之内七ヶ所之陣城落去イタシ同十日忠  
朗掃陣ニ永祿元年三月十九日肝付勢庄内ニ打人之間得右之依之時久之  
人數并豊州忠親之人數馳向候テ於恒吉宮ケ原及合戦候処恒吉而成平房  
廻之敵兵味方後ヲ敗包候ニ付味方敗北イタシ忠相三男北郷越入頭久履  
北郷又八郎久親同治部少輔教久石坂大和守久武同嫡子右衛門兵衛尉忠  
陳小相筑前守頼武山内彈正義種同美作義紹以下數百人豊州家臣日置四  
郎左衛門久範平田出羽守宗仍木吉 同嫡子新左衛門尉宗徳以下兩家凡式  
百余人打死或書曰七百 同十一月五日伊東勢鉄肥新山城ヲ攻圍ミ時久カ  
叔父左馬介忠孝北郷三郎右衛門久信其外知覽大和守忠幸北郷 山内次郎  
右衛門長井勘解由左衛門利始河野兵部通俊以下致打死城落去是年忠相

隅州曾於郡ヲ 太守公ニ獻シ奉ル鉄肥御加勢為可奉頌如此也」同五年  
「五月十八日時久初テ松山ニ突向」六月十二日 太守公ヨリ末吉三百  
五十町拜領仕候依之土持振津介駿綱ヲ地頭トシテ召置其後長男忠虎ヲ  
末吉ニ召移シ梅北八十町豊州ヨリ受附屬致領知候一豊州伝ニハ六年ニ  
与フトス」同十六日肝付勢岩川ニ打出候北郷之人數防戰候テ敵首式拾  
六級ヲ取味方釘崎丹後等十余人打死七月二日時久鉄肥ニ出張イタスナ  
リ此時鉄肥ハ伊東取委 同十一月十三日伊東勢二万余鉄肥ニ打入篠  
ヶ峯ニ陣ヲ取鉄肥酒谷北郷凶書 往來ヲ取切ル豊州久家臣日置周防介忠  
達酒谷迄忍來候テ急ヲ都城ニ告候ニ付時久早速北郷左近忠増同蔵人久  
盛同出羽久蔵ヲ差遣時久モ人數ヲ召列酒谷之陣ヲ取同廿二日伊東勢三  
百余ニテ永谷口ヲ攻本城之人數打出酒谷之北郷勢一度ニ相掛候テ切立  
候ニ付敵敗北シ落合右衛門以下ヲ打取然共城中糧尽候テ甚及難儀候ニ  
付二月廿一日時久土持撰津介頼綱二人夫ヲ差添兵糧ヲ本城江入候処伊  
東ノ大將伊藤修理木脇越前ナト篠ヶ峯ニテ相支及合戦味方敗北北郷凶  
書介忠俊山口 同又八郎久周本田蔵人親豐土持撰津頼綱和田民部同嫡子  
和田助六十八 財部權兵衛一稔島 三河宮原福泉房伊地知新左衛門財部勘  
解由落合將監納民部瀬戸山兵部池上新左衛門推原主水左衛門以下」數  
多戰死伊東方ニモ落合ハ三郎 時久堅ク酒谷ヲ相寄候処島津右馬頭征久鉄  
肥之後詰トシテ酒谷迄被差越候左候テ右之越 貴久公御聽ニ相違候処  
北郷紀伊守忠徳ヲ被召手便ヲ以和議ヲ相調ヘ可申由被仰付按ニ忠徳ヲ征久召シテ  
被仰付タル 依之忠徳須木へ差越米良筑後守へ致相談和睦之計イタシ  
六月六日酒谷城へ差越和融相調同八日鉄肥ヲ伊東ニ相渡シ福島ヲ肝付  
ニ附屬シ同七月十九日忠親入道泰心息男朝久都之城江致退去候時久ハ  
家臣和田越中入道起雲ヲ酒谷城ニ留置候テ都之城へ退去豊州家臣瀬戸  
口源三郎秀安塚田大隅ヲ鉄肥本城松尾城ニ留置関鎖之役人ト相定候伊  
東相模守同右衛門 岩坂四郎左衛門等鉄肥ニ突向イタシ城ヲ受取候酒

谷城ヲ宝蔵寺并鎌田駿河守ニテ伊東ニ附与イタシ引退候一同年八月豊州入道泰心齋北郷肝付和陸之調議ヲ被巡候依之同月八日時久一族北郷右衛門兵衛并上持美濃泰心之使者餅原越後入道一路末吉江差越候肝付家ヨリ一族肝付左兵衛尉渡辺隠岐国合原元堂之辺ニテ和陸相調同廿日肝付刑部和議之祝儀トシテ都城へ参越於西丸饗応有之同廿四日北郷彈正左衛門久越返礼トシテ申良へ差越候又鹿兒島へモ此段申上候同十月二日 義久公ヨリ其境与肝付和融之企有之由舟給尤肝要候然ハ到当家向後於真実之入魂ハ聊以罪執之儀有間敷旨御書致頂戴候一同十二年五月十日時久河野筑前大岩根河内ヲ以申長江差遣候 太守公ト和陸之儀相計ヒ候得共不相調候同月廿二日依御下知北郷小二郎ニ人数ヲ差添候テ菱刈御陣ニ差上候同九月菱刈降参也一元龜三年九月下旬 義久公肝付御退治トシテ下大隅江御出陣有之時久依御下知同月廿九日月野之泰野ヲ攻破候テ敵数人打取同日梶山之人数堀島之敵ト相戦ヒ敵数人ヲ打留一天正九年正月六日肝付勢数千人末吉へ推寄来ル時久并嫡子相久二男忠虎早速馳向ヒ於住原致合戦得勝利松山城戸口迄追詰肝付一族肝付三河入道竹友時久江渡辺肝付修理亮同左衛門尉等以下百八拾余級之首ヲ打取其外切捨数不相知候同三月 太守公御人数ヲ被差遣肝付御退治ニ付時久モ人数ヲ揃へ平松ニ陣ヲ取翌年十二月五日都城へ帰陣是等之依軍忠岩川五十町拜領仕候一同四年八月 義久公高原へ御出陣同十八日時久可致出張之旨被仰聞時久忠虎一方之人数ヲ召列都城ヲ首途ニテ直江平ニ発向敵五十人ヲ打取同十九日 義久公高原へ御着陣時久耳付ニ陣ヲ取テ城ヲ攻圍家臣等数十人戦死同廿三日高原下城同廿八日帰陣同九月三日 義久公三之山ヨリ上井神五郎ヲ上使トシテ都城へ被差越候同四日神五郎都之城へ到着上意之趣ハ高原出陣之御礼且又田野城ヲ相伺出候近日御人数ヲ被遣彼城ヲ可被取卷之間人数之分眼等ヲ委細可申上之由也一同年十月肝付兼輔押領之地悉ク 太守公之御領ト罷成候志布志ハ最初北郷江可被下之由御約束ニテ候得共恒吉末吉内之浦百八十町ヲ志布志之返地トシテ被下候

同六年大友日州へ責入時久先陣之仰ヲ承リ致出陣鹿山城ヨリ宮崎城ニ屯イタシ罷在候旭三納平野之モノトモ一千余人一揆ヲ起シ候テ都於郡川原田道場ニ火ヲ掛候ニ付時久父子人数ヲ召列出張敵三百余人打留悉ク追散候北郷藏人久盛等軍勞有之同十二日於高城々々大合戦北郷人数軍勞時久從弟北郷藏人久盛久盛等岩崎美濃守原武部其外家臣村田能登経重山中宗左衛門等打死又敵敗北イタシ追打也名貫川ニテ家臣北郷右衛門兵衛久兼伊集院美作守同前ニ先登致分捕也目上坂合戦等ノ儀ハ忠虎ノ伝ニアリ文祿元年秋細川幽齋薩州江下向三州之寺社領勤落也同十月都城へ被差入候ニ付一雲城中ニ招請候テ饗応イタシ候幽齋発句 神無月サナカラ春ノ都カナ 幽齋 時雨テ四方静ナル山 時久之脇

同三年近衛信尹卿薩州江下向都城へ御滞留有之和歌之会有之其後坊津へ被成御座候九月三州御檢地相始ル田中信濃国広向井三郎右衛門友出新之丞宮森九介上林又兵衛尉等命ヲ受ケ時久所領庄内十五邑ヲ檢地ス都城安永山田志和地野々美谷高城山之口勝岡梶山梅北木吉郎部恒吉永吉内之浦萬六万九千五百十四石四斗十二月忠虎於朝鮮病死一同四年七月五日忠虎嫡子長千代丸幼少ニ付宗次郎三久平佐家督代相勤長千代丸十七歳ニ罷成候ハ、家督可致附屬之旨 童伯公義弘公御連判之証書被成下候同年依台命三州之諸家之所領改易被仰付時久普代之領知六万九千石一円被召上薩州那答院三万七千石御繰替被仰付同年八月廿三日時久入道一雲并孫長千代丸都城ヲ立テ同廿六日宮之城へ致着候此時家中之人数一万余人之内五百卅余人召列罷移候都城ハ忠徳所領ニ相成候左候テ長千代丸幼少ニ付時久之四男久二郎久村名代トシテ多年致在京候依之時久那答院之内伊牟田長野中津川之内三千石ヲ配分シ庶子分トシテ久村へ致附與候是石田三成ノ下知ナリ同十二月宮之城南谷ニ天長寺ヲ致造建開山覺翁上人也一慶長元同五年内申 義久公ヨリ久二郎久村直ニ奉公可仕由被仰出肝付小原式千石ヲ被下候テ浜之市ニ罷在御奉公

仕候事 慶長元年三月三日時久於宮之城病死六十七歲法名月庭梁新庵  
主 此月時久為菩提所一寺ヲ虎井ニ致建立電筆寺ト号ス石崇此寺ニ有之然也  
寛政元年七月廿六日都城電筆寺ニ改葬ス時久ヨリ十三世筑後久倫代ナリ  
○時久青連院尊朝法親王ニ入木之道ヲ伝授イタシ飛鳥井家ニ職鞠之作  
法ヲ伝受仕候事

殉死 長峯伊予守入道宗珍

法名 家翁宗珍上座

蓮ヲヨメル

時久

蓮葉ニ光ヲソヘテ月ノ名ヲ露ニモユツル暮ノ涼シサ 時久

○北郷常陸介相久 次郎時久嫡子也天文廿三年生母ハ本田紀伊守薫親女  
也天正六年大友ト高城合戦之時相久島津征久同前横ヨリ撃テ敵ヲ打破  
ル也天正九年八月晦日父ト不和ニ有之安永金石城ニテ切腹二十九歲常

徳院殿了山等玄大禪定門 後數盡驗アリ因テ其靈ヲ崇テ若宮八幡宮ト  
号シ祠ヲ都城ニ建ツ 慶長十三年靈八幡宮ト改号シ明暦元年十月兼喜  
明神ト昇進シ天和二年八月正一位兼喜大明神ト追尊也

○北郷讚岐守忠虎 彈正忠時久二男弘治二年誕生母本田紀伊守薫親女

天正元年正月住吉原合戦ニ軍勞十八歲也 同四年廿一歳ニテ軍代ヲ相  
受取候テ高原へ出陣 同六年十月日州江大友攻入候節父同前軍勞 同  
九年八月十八日肥後国水俣へ出陣島津義虎同前湯川原ニ陣取候 忠虎脇

列ニテ庄内物頭十二人名 同廿日相良殿降參同年十一月九日肥州竹宮口在  
列 忠平公御手ニ屬ス 同廿日相良殿降參同年十一月九日肥州竹宮口在

番被仰付城入道一 要相談ヲ以村里ヲ放火イタン利徳ヲ得候 同十年四

月吉利下総伊集院下野守同前肥後之敵ヲ打破リ首六十級ヲ取候 十一  
年三月廿九日島津忠辰ニ代テ熊本城ヲ戌ル 同十三年閏八月肥後御免  
向隈莊ニ打入敵式百餘打取同十三日堅志田城ヲ攻取候時粉骨ヲ尽シ家

臣野崎掃部介「重運」打死 同十四年六月十八日筑紫御征伐七月六日  
鷹取城ヲ攻落候砌忠虎抽戰功家臣福崎左近打死同十日筑紫広門降參同  
十四日岩屋城へ発向搦手之笠陣ヲ相守同廿七日城攻忠虎先登家臣財部  
平右衛門「清成」兎玉越後姓名ヲ名乗テ攻登ル河島羅殿介打死依此軍忠

義久公ヨリ助成之御太刀ヲ被下候同年十月豊後府内ヨリ豊前境迄

警衛之大將ヲ被召置候忠虎脱屋倉之兩城ヲ攻拔候家臣數多打死同廿一  
日忠虎并舎弟宗次郎三久 義珍公へ相付南郡へ攻入鳥嶽城ヲ被攻落候  
先陣ハ求摩勢其次忠虎也家臣津曲玄蕃兼詮前原弥七郎国実等打死其外  
在々諸所ニイテ軍勞大形ナラス候 天正十五年三月太閤御下向豊後

衆心替峰起イタン同十一日 義珍公野上ヲ被為立御退陣之処敵襲米リ  
大鶴城之通路ヲ遮リ候乍漸迫引退候此時忠虎家臣長井縫殿助黒川將  
監山内備後等打死同十三日府内江着十五日夜半府内ヲ打立候処清田郷  
ニテ敵通路ヲ遮リ味方難儀ナカラ駈破リ候テ同十八日日州泉江御着忠

虎諸將同前御供ニテ帰陣 同年四月羽柴秀長二十万之大軍ニテ日州へ  
被攻入候同十七日 義久公 義珍公二万余人ヲ被召列根白坂之敵陣ニ  
被取掛候得共味方敗軍三百余人戰死此時忠虎父時久モ人數ヲ勵シ粉骨

ヲ尽シ家臣來住備前高橋吉加江某數多打死北郷源左衛門久嗣後殿ニテ  
引退キ如庄内帰陣諸外城ヲ疊ミ都城安永末吉財部之四城ニ人數ヲ手配  
リ防戦 一篇ニ相定居候 此時京勢既ニ野崎 義久公御和談相濟時久父子  
モ速ニ可罷出候由頼ニ被仰聞候ニ付時久父子モ不及力陽州宮内ニ差越

石田三成安国寺へ見參イタシ翌日安国寺案内ニテ野尻之御陣へ罷出秀  
長卿ニ御日見致安堵候左候テ時久五男新次郎忠頼ヲ人質ニ差上候同三  
男宗次郎三久ヲ京都へ差登セ殿下江勤仕為仕候 是年殿下石田安国寺

之兩使ヲ以殿下附近之御朱印ヲ時久江頂戴被仰付候得共追テ御托中上  
候、同年肥後熊本之城主佐々陸奥守成政国中之仕置不宣国人等一發ヲ  
起シ国中及大乱由相聞得殿下御立腹ニテ御朱印ヲ九州大名ニ被差下成

政誅伐被仰付 義弘公肥後御免馬也一雲父子モ十月廿一日御朱印頂戴  
早速肥後へ発向仕候処同十六年春肥後国中靜謐ニ付二月可致陣之御  
朱印又々頂戴父子帰陣仕候是迄時久伝 同年六月十四日忠虎都城ヲ發  
馬イタン上落仕リ於大阪太閤公江御目見御湯濟ヲ被下候其時御座之次

第一番 義弘公其次細川幽齋其次筑紫某其次忠虎ナリ其次深水宗方出  
浦等着座ナリ此時分大仏殿ヲ創草ニ付忠虎事モ一ノ大柱可致献上之由  
依台命御請申上候処御衣服拜領被仰付同年十二月庄内ニ下着 同十七

年春於末吉城下大杉ヲ求出シ早速大阪へ献上同年十月忠虎又々上洛仕候一十八年正月年頭御祝儀トシテ御太刀馬代殿下へ献上御朱印頂戴イタシ庄内へ下向一同年小田原御陣 久保公御發向大軍不及召列段依台命騎馬十五騎被選候忠虎弟宗次郎三久其列ニテ二月三日都城首途ニテ罷立候一文禄元年朝鮮入ニ付三月三日忠虎都城ヲ致首途同十八日名護屋江着船四月十二日乘船ニテ翌曉出帆イタシ老岐之風本江着岸同廿三日對馬府中江漕渡り同廿八日同國飛崎出船イタシ同日朝鮮釜山海へ着岸也忠虎家臣朝鮮渡海輩ニハ

北郷又五郎久根 北郷右衛門久兼 北郷弥左衛門忠政 北郷四郎左衛門久武 北郷久五郎久吉 北郷下次郎久種 北郷伊助久滿 北郷式部久頼 北郷源左衛門久親 北郷紀左衛門久陸 本田内蔵助親幸 小杉新七 上持古右衛門重綱 和田与左衛門 和田半兵衛匡綱 津曲太郎兵衛兼親 以下数百人

同年五月朔日釜山浦致發足同十八日夜半朝鮮都へ到着六月五日毛利老岐守同前江原道へ赴キ金化城ヲ警衛イタシ越年ニテ候一同二年正月十六日忠虎金化ヲ退去イタシ同十九日都江差越候処晋州之牧司數方之人數ニテ釜山浦ト都之間ヲ取切候由相問得候ニ付 義弘公 久保公意仁城ニ被遊御移候依之同廿一日忠虎都ヨリ竜仁江罷移候左候テ大明ト日本和議ニ成四月廿一日釜山浦ニ引退候処又々和議相破レ五月十三日忠虎昌原城へ差越同七月唐島城ヲ相守候此間於諸所家臣等之戦死不知其數候同閏九月六日帰朝之御暇被下帰朝仕候弟宗次郎三久十月比服鮮へ罷渡リ在陣イタシ候一同三年三月九日忠虎妻室卒去新傳忠同年七月二日忠虎都城ヲ打立再朝鮮國へ渡海同十一月三久帰朝忠虎高城ヲ三久ニ附屬イタシ候一同年十二月十四日忠虎於唐島病死川九歲同十八日遺骸唐島出船翌年正月「五日」都城へ到着同九日於十念寺送葬行之法名天室常清居士号天清寺石塔ハ「是日」家臣鎌田飛彈貞明一書ニ市右衛門ト有之切腹イタシ殉死也

朝鮮ニテ忠虎家臣戦死人数

持永郷右衛門 松崎左右衛門 村田三弥正 佐藤太郎五郎信次 谷山平右衛門 土持三九郎清 細山田弥兵衛 山内興五郎 黒木彦右衛門久 山内勘七郎 新納次右衛門久 河野万左衛門 妹尾助左衛門 神村三之丞 岡田石見 岡田三蔵 曾木助四郎 津曲小左衛門 山下三右衛門 太田登勘解由 山内弥七郎 長友助左衛門 島田掃部 待木弥太郎 木幡主殿 山元弥助 山本弥平 有馬玄蕃 西原賀助 中原带刀 栗山勘解由 長野助之丞 山路出雲 以下数百人

○北郷讚岐守忠能長下代 忠虎嫡子天正十八年庚寅二月六日生母野辺宮内少輔盛忍女也忠虎妻也本妻ハ新納四郎左衛門前忠九女ナリ 忠能五歳之時父忠虎病死イタシ伯父宗次郎三久江家替代被仰付候一文禄四年六歳之時祖父一雲同前宮之城江罷移候一同五年七歳之時祖父一雲卒去孤ニ相成候得共老臣小杉丹後守重頼入道宗正無二心致介抱無二之抽忠義候事一同年二月廿一日

義弘公再朝鮮渡海伯父三久軍代トシテ人数召列罷渡候四月十九日對馬へ着岸夫ヨリ朝鮮國加徳島へ在陣在陣中軍務之義 慶長三年十一月九歳之祖若年之儀候得共自身可致上洛旨被仰出城州伏見參勤仕候 忠恒公御前ニ被召出時節ヲ以本領安堵可被仰付由御内々被仰問正広之御腰物拝領仕候事一同四年三月中旬下国是年伊集院忠真庄内江籠城同六月 忠恒公御出馬忠能罷立候伯父三久後見ニテ同久二郎久村北郷喜左衛門久陸同吉右衛門久明同次兵衛忠綱同新吉郎久規同主殿助忠持同四郎左衛門久武同勝兵衛忠時同小次郎忠泰同千次郎久種同文右衛門久吉同伊助久満同又五郎久根同源左衛門久範同伊右衛門久元同左京亮神田右京亮忠純末弘河内守小杉丹後守重頼土持振津介一書ニ市右衛門ト有之 一重綱以下三百余人召列御供也同廿三日山田城被攻落 忠恒公東霧島御陣ヨリ山田城江御移ニテ忠能へ被仰付東霧島御番仕候七月十三日山田御番手衆志和地野々美谷江打廻リ北郷人数モ少々出合候処敵打出楠牟礼谷ニ相備候ニ付味方引退候ヲ敵起合候ヲ味方及敗軍追掛來候ニ付錫杖院二王門ニテ防戦イタシ忠能手勢數多致打死候同卅日高城之敵

雖々獄ニ伏草イタシ宮之城番替之人數ヲ數多打果候八月十五日家臣北郷久陸小杉重頼丸谷楠幸礼ニ伏草イタシ敵首十三級ヲ打取九月十日於野々美谷致合戦首八十餘忠能手ニ打取同十三日 忠恒公御感状被成下候十月十日森田江能移ル同十六日高城之敵小牟田清左エ門初野伏トシ家臣等數多戰死十一月八日忠能手勢柳川原へ致テ相掛候御伏草敵數十人打留候」是年長千代丸家督相續イタシ候事月口「教按ニ莊内歸住ノ時ナルベシ」同五年二月廿九日忠貞降參是日梶山勝岡山之口下城三久島津豊久受取之三月朔日高城下城三久島久請取之其外之諸城皆下城ス同十五日忠貞都之城ヲ罷下候 竜伯公 忠恒公御入城其次忠能鶴鯨之馬ニ乘リ竹ニ金泥之短冊付候馬印ニテ乘入候於本丸長千代丸元服加冠比志島紀伊守國貞也二郎忠能ト改名本領都城高城安永勝岡山之口梶山梅北被返下一万石御加増ニテ宝刀備前經正拜領志和地山田野々谷三ヶ所之儀ハ 上様御出馬ヲ以請士粉骨之地故被殘置候同十八日太守公凱陣也今年忠能十一歳也左候テ忠能宮之城ヨリ都之城へ罷移家中之モノトモ追々庄内江罷歸ナリ一慶長五年上方大乱ニ罷成八月朔日伏見之城攻也忠能家臣北郷孫一久永去年ヨリ在伏見ニテ罷在候ニ付人數七十五人召列 義弘公御手ニテ軍旁家臣和川仲藏「義普」戰死右之趣庄内江相聞得候ニ付庄内ヨリ北郷小兵衛忠泰北郷兵部久栄津曲太郎兵衛兼親禱寢清右エ門等數百人不日ニ京都へ差登七候九月十五日關ヶ原御合戦相破家臣數多打死北郷孫一久永ハ当年十六歳ニテ候也 義弘公ニ奉離「家来」四位主水ト云物一人召列三日カ間敵中ヲ忍通候処足痛候テ步行不罷成候ニ付主水背負候テ加藤左馬助喜明之陣ニ罷出候処喜明加隣懸置囚人罷成喜明所へ三ヶ年罷居其後得暇候テ帰國イタシ候北郷兵衛忠泰ハ 義弘公御供任リ罷下候ニ付十月九日御感状ニ長盛之御腰物拜領被仰付候

北郷家臣関ヶ原戰死人數

禱寢清右エ門 津曲太郎兵衛「兼親」 小杉六左エ門「頼長」 知覽万吉「忠清」 大田平兵衛 山内刑部左エ門「義祐」 税所五兵

衛「敦員」 村木六左エ門「武俊」 河野半左エ門「通明」 松山小平次 溝行千介 白浜弥藤 岩佐八郎右エ門 大草宮内左エ門 若松藤藏 立山喜平次 和田主兵衛「匡親」 江田權平原口 軍助 二之方孫左衛門 鎌田喜兵衛「政好」 以下「數十人也」 同年十一月廿三日 忠恒公ヨリ志和地野々美谷山田三ヶ所被殘置候得共北郷家之儀及十三代片時モ不忠之儀共無之且今度之御弓箭別テ被頼思召候ニ付右三ヶ所被宛行候間全致領知可抽忠勤尤右知行之内ヲ以家老之衆江致配分其方幼少ニ付諸事入念可相勤由御判之御感状ヲ被成下御老中鎌田政近平田増宗連判之証状ヲ以家老之而々江三百石ツ、被宛行候旨日録相添被成下候ニ付先達テ致領知候七ヶ所ニ此度之三ヶ所都合四万四千五拾石余一円ニ致拜領家老北郷源左エ門久頼入道宗英北郷喜左エ門久陸土持吉右エ門重綱小杉丹後重頼ニ三百石ツ、配分イタシ高城之内石山村三千石ヲ伯父北郷掃部介久村ニ致附屬候事」同六年正月閑東勢下向之風聞有之候ニ付都城其外城々トモ致修築候得共御和談相調無事也」同七年八月 忠恒公関ヶ原後初テ御上洛同十七日伊集院忠真ヲ於野尻被誅候忠能野尻御旅館へ參上御目見仕候「十一年十一月廿五日大追物ノ事アリ忠能射手五疋カイル」同十二年三月聚右馬頭征久息女同十二月忠能庄内ヨリ上洛在伏見中吉田印西翁ニ相付射芸致稽古一流之印可相伝イタシ且唐衣ト名付候彼家之珍奇ニテ天下ニ式ツ有之箭之由ニテ可致秘藏之由被申忠能へ被讓渡候是年被任讚岐守候事」同十三年十月廿八日於東山大仏殿三十三間ニ七間ヲ相借候テ弓勢相試候処通矢數多有之候事」琉球征伐ニ付忠能一族北郷四郎右エ門久武人數百廿人召列致渡海候事」同十五年三月忠能歸國」同十七年十月五日忠能上洛在江戸也 秀忠公へ御目見御馬拜領同十九年歸國之御暇被成下又々御馬拜領被仰付下國仕候同年九月秀頼公大坂籠城ニ付同十一月家久公御人數被召列御上洛忠能モ士卒召列罷立候処翌年正月大坂御無事之由ニテ豊後之森江ヨリ歸陣也」元和元年三月又々大坂乱ニテ家久公一万三千余人被召列五月五日鹿兒島御罷足同十四日忠能モ都之城ヲ致首途罷立相從者共ニハ北郷藏人久根其子左京久孝北郷四郎右エ

門久武和田三右エ門同半兵衛「正綱」小杉宮内津曲狩野介「兼業」等騎馬卅騎雜兵共ニ七百七拾石余人召列罷立侯得共大坂城ニ付陣也」同年八月依 釣命致下城都城東方新宅ヲ構罷移一族家臣等夫々小路割イタシ家屋敷新造立イタシ罷移候事」同年三ヶ國御檢地有之忠能領分增高有之候ニ付三千石御加増ニテ本高都合四万四千四百石余也」同六年三州諸家領地御配分有之高城山之口勝岡三ヶ所進上イタシ所領三万二百三十石ニ被相減候御按流系岡高城山之口勝岡進上ハ慶長十九年請上獻采地時之事トミヘタリ寛永四年牛峠境論有之餒肥ヨリ使者四人都之城江參着ニ付鹿兒島ヨリ相良勸解出三原次郎左エ門「北条土佐」被差越多日相談有之候得共決談不相調候ユヘ被罷歸候」同八年辛未二月五日病死四十二歳本寺二歳院殿剛獄常金居士

殉死二人

紀藤丹後守光繁法号以依休心

土屋七左衛門「宗武」法名玄心宗武

「西海拾玉」

若カ代ノ治ル國ノ春ヲヘテナケキノモリモ色カヘニケリ 忠能

○北郷山城守翁久 長千代丸 忠能嫡子慶長十五年四月十四日生母島津右馬頭征久女一元和元年十二月翁久六歳之時 家久公人質トシテ駿府へ罷上候北郷文右エ門久吉林六郎兵衛重康補佐イタシ翌年四月十日 家康公江御目見御太刀馬代緒綱十卷献上同十三日駿府ヨリ江戶江參府」同三年六月十二日 秀忠公江御目見御太刀馬代草物一帷子五ツ献上御太刀御馬羽織一拜領同七月御暇被下庄内へ下着」同六年二月十一歳之時再人質トシテ江戶江參勤北郷善兵衛久柴林六郎兵衛重康相從フ四月十九日善兵衛久柴於京都病死北郷仲左エ門久永不日ニ上落仕候」其後帰國一寛永元年八月廿二日於鹿兒島御城元服加冠 家久公理髮島津下野守久元山城守翁久ト改名イタシ御太刀鐵弓申征矢鞍等進上備前御

太刀一腰御馬代青銅百貫被下候翁久十五歳也」同四年六月翁久十八歳之時 家久公第二之姫君御入與也 家久公御米臨婚禮之儀式有之元重御刀鍔鞍置御馬等拜領」同五年七月五日翁久於鹿兒島病死十九歳 法名寛心校四居士

○北郷出雲守忠亮虎頭丸 忠能二男慶長十九年十二月廿七日生母同前」寛

永元年八月廿二日兄翁久同時ニ元服加冠 家久公理髮伊勢貞昌權頭忠亮ト改名青江御刀一腰拜領」同七年忠亮江戶江參勤同年四月十八日 家光公桜田御屋敷江御入忠亮御目見御太刀一腰拾十歳上御拾十白銀百枚拜領同廿一日 秀忠全御入忠亮御目見献上拜領右同断同六月御暇被下庄内へ下着」同八年二月忠能病死同五月忠亮家督同八月六日家老北郷源左衛門久俊依科於鹿兒島切腹被仰付同七日久俊父小兵衛忠泰同弟平左衛門久仍於都城切腹同月北郷主膳久根同仲左衛門久永ヲ鹿兒島江被召忠亮幼少ユヘ宜敷可致補佐之由被仰出兩人共ニ家老被仰付御腰物拜領被仰付候」寛永九年肥後國替ニ付 家久公御出陣御人數賦忠亮人數九百七人ニテ二番大將之御賦也 人騎乘馬一騎軍役乘馬六十騎一騎ニ付六丁已七十丁騎百本本五十人本五十人御藏入ヨリ山候白石ニ付三人軍役ナリ」同十年春高宅万石ニ付騎馬廿騎軍役可相動旨被仰出」同年八月諸國巡見上使小出對馬守城織部能勢小十郎都城へ來着」同年十一月忠亮 太守公人質トシテ江戶へ參府家老北郷仲左衛門「久永」旅家老同歳入久孝供也翌年正月廿九日江戶江着」同十一年二月十日於江戶病死廿一歳法名大岩正広居士

○北郷式部大輔久直初忠直岩松丸又 忠亮養子実ハ 家久公第三御子元和三年十一月廿六日生母ハ島津備前守忠清女」寛永八年四月朔日又三郎忠元公光久同前於東武宮中元服將軍 家光公加冠次從五位下ニ叙シ式部大輔ニ任ス御太刀一腰御拾十銀子百枚献上ス包永之刀拜領前將軍秀忠公モ亦國綱之刀ヲ賜フ献上物家光 同十一年忠亮死去ニ付家老北郷仲左衛門久永同歳入久孝忠亮遺言ヲ以江戶へ致滞府島津右馬頭征久ニ相付奉訴趣有之候処忠直ヲ北郷家後嗣被仰付候旨被仰出同十月忠直都

城二罷移忠亮姉二 忠能女也一 明曆元年二月十二日病死 相嫁家督相統也同  
四十五歳一 法号春嶺長中太姉

年十一月願娃長左衛門久政比志島監物範貞忠直家臣佐藤万左衛門有村  
三郎兵衛鉄肥へ被差越鉄肥境山猪八重七鹿倉トモヲ伊東氏ニ致附与

候御下知也伊東家老岩岐將監渡辺内匠応答イタシ候是伊東ハ小身御家  
ハ御大身之故也一 同十二年十月忠直 太守公人質トシテ江戸へ參府家

老北郷仲左衛門相從翌十三年正月 家光公へ御日見遠路參勤苦勞之由  
蒙上意一 同十四年七月御暇被下々着久直ト相改候一 同十四年十一月肥前

島原へ一揆起ル翌十五年正月久直家臣津曲狩野兼業古垣四郎右衛門  
忠與人數三百召列出水米之津迄出張候得共落城之注進ニ付彼地ヨリ帰

陣也同二月廿三日 家久公御薨去ニ付御葬礼御喪與之前ハ佐多長寿丸  
後ハ久直昇之其後 光久公ヨリ江戸御留守中御國中諸事久直可加差圖

由被仰付候事一 同十七年四月久直人質トシテ江戸江參勤北郷藏人久孝  
處從ス同七月朔日大樹 家光公へ御日見一 同十八年久直下着 同年十

一月六日久直於鹿兒島病死廿五歳葬與國寺法名廓安了聖庵主  
○久直三世之孫外記忠長代寛文三年二月二日島津名字拜領

一 北郷加賀守三久 初忠亮十代鶴丸宗次郎 子孫平佐邑上 時久入道一雲  
作左衛門佐渡守加賀守 北郷作左衛門佐渡

三男天正元年三月十日生母北郷左馬介忠孝女 忠孝女ハ初 忠平公被召仕  
候テ其後時久妻トイタシ候

由天正十六年 竜伯公初テ御上洛之時三久兄弟御供仕候一 同十八年久  
保公小田原御陣三久騎馬十六騎之内ニ被相撰二月三日都城ヲ首途相州

小田原ヨリ奥州迄御供仕候九月七日 久保公御上京同八日 竜伯公  
御招ニテ 久保公被遊御出候御座何公之次第三久忠棟 伊集院 幸備 大野治部

大輔本田三清其次宗固洪谷对馬也東国御供之面々御酒被下候事一 文祿  
二年十月三久朝鮮渡海翌年十一月帰朝兄忠虎ヨリ三保高城トヲ三久江

被致附与候事一 同三年兄忠虎於朝鮮病死其嫡子長千代丸幼少ニ付翌年  
七月三久江家督代被仰付候

一 北郷讚岐守直子雖有之依為若年宗次郎為名代諸職可被相勤候長千

代十七歳之時無異儀附屬肝要候聊無相違分別尤ニ候仍為後証染筆  
訖恐惶謹言

文祿四年七月五日

義弘

竜伯

北郷右衛門入道殿

同 宗次郎殿

文祿四年依台命三州所領交替被仰渡十月七日三久所領三保高城被召上  
薩州平佐天辰官早高江隈之城久富木川上七ヶ所高一万五千五百四十石余

御繰替被仰付平佐江罷移候 忠恒公初テ朝鮮御渡海之御供十月廿六日  
釜山海へ御着同廿九日三久唐島ヨリ釜山浦へ罷越御到着之御祝儀申上

候 三久事ハ公ヨリ先キニ 慶長元年 義弘公御供ニテ三久朝鮮江渡海四  
鹿兒島江替船之筋ナリ

月十九日对馬へ着岸夫ヨリ朝鮮加徳島へ在番イタシ同八月全羅道之内  
南原城攻ニ付 義弘公御免向三久并島津以久同忠倍伊集院忠真山田有

榮等御供也同十五日夜南原城落去 義弘公御手ニ敵首四百余級御打取  
ナリ此時三久鉄炮ニテ騎馬武者ヲ打留ル願娃左馬介其首ヲ取候十月十

日海南城ニ被遊御打入数日御滞留ニテ夫ヨリ忠清道へ御免向之所忠清  
ト全羅之境ニ広サ六七町之大河有之洪水ニテ渡リ不相成候三久先陣ニ

セキ渡リ候テ夫ヨリ諸軍皆々罷渡候左候テ忠清道平均ニ付十月廿八日  
泗川江御帰城也一 同三年四月廿五日明朝ヨリ日本勢速ニ可致帰帆趣之

書ヲ持來候三久種子島久時而人口上ニテ返答之趣書翰具ニ披見イタシ  
候大明軍百万ニテモ二百万ニテモ早速可寄來悉 ニ可致トノ趣也

同十月朔日明兵六十万余人泗川御城江寄來候処 義弘公御奇計ヲ以被  
召崩追打也三久モ諸軍同前打出追打之処三久明人ト馬上ニテ組合両馬

之間ニ落候ヲ 忠恒公被遊御覽御馬ヲ被駈寄下立候テ右之敵ヲ御打  
果サレ其首ヲ三久家臣東野又兵衛ニ持可中由被仰付候依之三久辛辛命

ヲ助リ又々馬ニ打乘追打候此時三久赤糸威之鎧着用ニテ候其日三久手  
ニ敵首四千四百四十六打留候惣首数三万八千七百十七級其外切捨不知其

数同十一月朝鮮御引陣同十八日南海番船被破ニ付三久敵船へ懸合奮戰イ  
タシ一族北郷勝右衛門久兼敵船ニ切入候テ打死其外三久手竹下喜平等

打死イタシ長井六左衛門内藤仲左衛門宮里備後河野甚太伊地知弥右衛門長井孫右衛門「豊丸五郎兵衛大嶺式部左衛門荒河内但馬藤井筑前船長内蔵介」其外手負數多也同廿一日唐島出帆廿二日唐原出船廿四日釜山浦出帆ニテ牧島へ着岸十二月十日筑前博多ヨリ帰陣也「慶長四年庄内一乱ニ付甥長千代丸後見トシテ那答院宮之城之人数召列罷立軍旁忠能佐三有之是年長千代丸十歳ニ罷成候ニ付家督讓渡候、元和元年大坂御陣ニ付人数二百六十人召列罷立候」同六年四月十九日卒四十八歳法名義山忠孝庵主墓平佐梁月寺ニ有之

○北郷佐渡守久加千代鶴丸 又次郎三久嫡子慶長九年誕生母ハ上井伊勢守覺兼女「寛永十四年肥前島原江切支丹之一揆致峰起候ニ付翌十五年正月九日大将役島津豊後守久賀島津下野守久元兩人江被仰付久加并喜入忠政山田有榮三原重庸入来院重高新納忠清六人談合役被仰付候旨川上左近将監久困ヲ以被仰渡候間早速出立天草江罷渡リ上津浦御番手トシテ被召置候人数五千程也天草之内富岡江松平主税頭殿伊東大和守殿御番手ニ付 家久公ヨリ久加江御使被仰付富岡へ被差越候意趣ハ御番手御大儀ニ候天草之内上津浦へ番手之人数薩摩へ被仰付候間物頭トシテ島津豊後喜入根津入来院石見北郷佐渡召置候間御用可被仰付由ナリ御返事ニ御用之儀ハ可被仰合由ナリ其後天草ニテ切支丹狩被仰付候ニ付右之帳相認久加受持ニテ三月九日上津浦出帆有馬へ罷渡島津久元同心ニテ松平伊豆守殿戸田左門殿掛御目候帳之儀ハ左門殿へ差上置同十二日久加上津浦江罷帰候同十三日伊豆守殿上津浦江御着ニテ菓元之様御通ニテ久加重庸重高市来八左衛門四人御船元迄罷立久加重庸ハ菓元迄罷越候処千束島湯島鬼利支丹狩可申付之由豆州ヨリ被仰聞候ニ付久加上津浦へ立戻リ同十五日又々富岡へ罷渡候テ松平主税殿伊東殿寺沢殿家中衆同前ニ改帳持參伊豆守殿左門殿へ懸御目候千束湯島之狩ハ重高仕候左候テ同十六日伊豆守殿左門殿ヨリ御暇被下候間皆々首尾能致帰陣候也」同十六年十一月御旅御家老被仰付候事」同十七年金山惣監司被仰付候「正保元」年四月十八日 光久公琉球使者被召列江戶へ御発駕御供

被仰付琉球方差引ハ山田有榮へ被仰付候六月十二日御參府ニテ候」同年十一月十三日 光久公御家老被仰付候「慶安二年異国方宗門方之事ヲ預ラル」同三年四月廿六日御袖割之掟ヲ給候「寛文六年八月十七日御城代被仰付候」同七年正月三日又三郎延久公御後見被仰付候」同九年病氣故御後見御断申上候「延宝八年申八月晦日卒ス七十七歳法性院殿正覚存貞庵主墓ハ平佐梁月寺ニ有之

題シラス

花ニアカテ分クラス野ノ帰ルサヲ又ナクサムル秋ノ夜ノ月

虫声非一

秋ノ野ノ花ニメテツ、分行ハ虫モ千種ノ音ヲソ鳴ナル

深夜露衣

テル月ヲ友トヤシツノ麻衣ウチムカヒツ、夜ヲフカスラン

欲言出恋

モラサハヤヨシヤアナタハタツカマヲシコミテノミアラレヤハセシ

寄海窓

藻塩草カクトモ尽シ和田津海ノ底ヨリフカキヲノカオモヒハ

寄獣恋

ツレモナキ人ノ心ノイカリ猪ノトコトハニサト逢ハテ見ユラン

閉暮ヲ終日見クラシテ

杓果ヌオノカ命モエモシラス打向ヒツ、クラスヨコトニ

○久加自筆之詠歌一冊東郷吉左衛門所ニ有之

北郷掃部助久村 初久次郎子孫 北郷伝太夫 時久入道一雲四男母ハ三久ニ同シ」長千代丸幼少ニ付久村名代トシテ在京五年依之時久ヨリ那答院之内伊牟田長野三津川ニテ三千石庶子分トシテ配分イタシ置候処慶長元年春

義久公ヨリ久村直御奉行可仕之旨被仰出肝付之内北原ニテ二千石拝領被仰付浜之市ニ罷立御奉公仕候「慶長五年庄内本領二郎忠能へ被返下候ニ付忠能ヨリ勝岡并高城之内石山村ニテ三千石致附屬都合五千石致領知候」同十五年比庶子分三千石忠能之高ヲ拔候テ久村一分之高可致由候ニ付嫡庶不和ニ罷成三千石之出米多年相滞候ニ付右之趣忠能ヨリ



太守公江言上被致候ニ付三千石逢没収北原二千石計ニ罷成候一卒去年

月不詳法号玉翁口庵主一其子久次郎久純也

一北郷新次郎忠頼 時久五男母ハ南郷氏天正十六年六月為人質上京十七

歳ニテ早世一法号桂室栄昌 正月廿一日ト云

北郷家一族家臣

○北郷左馬助忠孝 八代忠相二男永祿元年十一月四日於既肥新山打死一法号晩壁

同左近大夫忠増 忠孝子豊後大鶴ニテ病死

同古左衛門久延 忠増子財部地頭嫡子忠治ニ家督ヲ譲リ二男忠盛ヲ

同舍人佐忠治 久延嫡子都城コリ致出奔松平下總守

同吉左衛門忠盛 久延二男ニテ父同前平佐ハ罷移

○北郷藏人久夏 八代忠相三男初又五郎永祿元年三月十九日

同藏人久盛 久夏子初初又五郎永祿元年三月十九日

同主膳正久棍 久盛子初初又五郎永祿元年三月十九日

同次右衛門久孝 久棍子

○北郷三郎左衛門久文 四代知久弟石京亮義知忠永卅四年十月廿七日於山東須田

二年五月志和地 同次郎四郎久堅子 久文 神田右京久基入道潤松

地頭

同右京亮忠純 久基子志和地頭

○北郷遠江守久友 右京亮久壽二男

北郷四郎兵衛久猶 久友子一魂山

同四郎右衛門久武 久猶子山之地頭

同吉右衛門入道堅心 久武養子夫ハ弟也梶山野々美谷

同伝五兵衛久季 久武子野々美谷地頭家老ナリ

同与左衛門久良 久季五男

○北郷兵部少輔教久 右京亮久壽三男永祿元年三月

○北郷左京亮忠真 五代持久弟左京亮信久其子左京亮與久

同源七郎久幸 忠真子又六郎早世ニテ直子無子久幸又六郎妹ニ嫁候テ家督與ハ

死戰

同伊右衛門久元 久幸養子與ハ同氏

同左京亮久盛 久元養子與ハ同氏

○北郷右衛門兵衛久堯入道雲斎 初三郎次郎長門守五代持久二男右衛門兵衛用

同勝右衛門久兼 久堯嫡子慶長三年十一月十八日於朝鮮南海討死

同勝兵衛忠辰入道耕雲 久兼養子與ハ弟也

同内藏助久和 忠辰子初虎助

同文右衛門久吉 久和子初出家ニ相成致還俗別立初又五郎初元年

同出羽守久藏入道一徳 久利初雖正左衛門時久之家老也

○北郷撰津介久次 右衛門兵衛用謙三男也享祿元年

同次郎右衛門久利 久次子曾於對地頭其後梶山頭天文

同出羽守久藏入道一徳 久利初雖正左衛門時久之家老也

梶山頭也於祇答院大村病死

同紀左衛門久陸久藏舞養子実ハ北郷紀伊守忠徳三男也時久之家老也忠能幼少之時補佐イタシ慶長十年六月蒙忠能勘致北郷家ヲ致退出家断絶ナリ

北郷千次郎久種久陸子慶長五年六月二十四日於那答院大村病死

○北郷民部少輔久剛五代持久三男民部少輔久定子也享祿元年五月朔日於郡城ケ尾討死

同三郎四郎久剛子父同時討死

○北郷次兵衛忠総五代持久四男岡書介辰久之後嗣也実ハ北郷紀伊守忠徳二男中尾口地頭其後北郷三久江相付平佐ニ罷移ナリ

同次郎兵衛久利忠総子也大坂平人稱留一夢齋ヨリ鉄炮術致相伝寛永十九年六月九日北郷久加之命ニ相背儀有之被誅候法名茂山常來庵主墓ハ平佐梁月寺ニ有之

○北郷右衛門尉尚久五代持久五男周防介常久子ナリ野々美谷地頭大永三年十一月八日於野々美谷討死

同三郎右衛門久信尚久子野々美谷地頭水祿元年十一月四日於飯能新山討死

同善兵衛久栄久信也初兵部少輔野々美谷地頭

同弥左衛門久規久栄子也安水地頭

同善兵衛久好久規子初兵部少輔安水梅北地頭

同淡路守忠持久栄二男初小吉一又主殿介野々美谷地頭

一同与左衛門久秀忠持子初大吉郎

○北郷刑部少輔忠直六代敏久二男刑部少輔久栄於加世田藤野原戦死其子刑部少輔忠直其曾孫子忠直也実ハ北郷次郎右衛門久利之次弟也天文十六年十二月十三日於飯肥南郷討死

同又八郎久親忠直子也水祿九年三月十九日於恒吉宮ケ原討死

同八郎久周久親養子実ハ神田右京亮久基嫡子也母ハ忠直妹也水祿十一年二月廿日於飯肥酒谷ケ峯討死

同将盛久茂久周養子実ハ久基二男ニテ久周弟也

同新左衛門久満久茂養子実ハ北郷藏人久盛二男也一初伊介忠能時代家老都城大岩田口之地頭

同清兵衛久宣久満養子実ハ北郷主膳久梶二男也初又五郎

○北郷六郎久家六代敏久三男右馬助近久其子久家也大永二年四月廿六日於梶山討死

同岡書助忠茂久家養子実ハ北郷源左衛門久陸子也山田地頭天文十七年七月六日於飯肥本城八幡馬場打死

同岡書助忠俊忠茂子山田地頭水祿十一年二月廿一日於酒谷ケ峯討死

同武部少輔久頼忠俊子也初孫左衛門山田地頭文祿四年十月十二日於朝鮮病死

同仲左衛門久永久頼子初孫市忠冠久直之時代家老一山田志和地々頭

同権之助久次忠俊二男也

○北郷信濃守久紹六代敏久四男信濃守久陸一初源左衛門安水地頭其子久紹也野々美谷地頭

同紀伊守忠徳久紹子也安水地頭

同源左衛門久観久紹子也忠徳子也一時久一実ハ家老相勤安水地頭

同小兵衛忠泰久観子也都之城大岩田口地頭義弘公関ケ原御掃目御供御感状御腰物長盛指領寛永八年八月七日嫡子源左衛門忠俊後依料忠泰一都城ニテ

同源左衛門忠俊忠泰嫡子忠能家老寛永八年八月六日於鹿兒島切腹被仰付父忠泰弟平左衛門忠仍切腹

○小杉丹後守重頼入道宗文時久家老忠能幼少之嗣介抱イタシ無二之忠勤ヲ抽候慶長五年二百石被下候其後寛永年中忠能ヨリ被誅家断絶一其故不詳一寛文三年二月撰津介忠長代一光久公ヨリ重頼跡北郷与右之門久秀へ相續被仰付高二百石被宛行候

○土持撰津介興綱永祿五年宋吉地頭同撰津介頼綱一永祿十一年被ケ嶮討死

同撰津介重綱初吉右之門忠能家老

同大炊介重綱養子実ハ北郷四郎兵衛久猶四男

○知寛大学左之門忠躬妻ハ北郷久滝女

○本内内蔵介親豊

同左近將監親幸 一初左市一親豊養子夫ハ  
北郷紀伊守忠徳四男

一本田紀伊守薫親 又二郎子孫  
木田作左衛門 本田三河守親安嫡子也其先相武帝四代之

孫高望王五男村岡五郎平良文六代之後胤信濃守恒文之子左エ門尉親

初テ号本田信濃守ト其子左近將監恒親其子二郎親恒 左エ門尉  
信濃守 忠久公

御下向之節御供ニテ罷下 一説親恒子  
貞親トモ 其子左エ門尉貞親近衛基道公御免

許ニ付藤原姓ニ罷成候由其子信濃守親保其子信濃守重親一旧記ヲ按ル

ニ道義公国老本田左エ門二郎入道々意ト云者アリ重親ノ祖父カ考ヘ

シ 氏久公御家老隅州守護代  
兼帯ニテ於庄内實原戦死 其弟信濃守氏親 兄重親無子  
故家督ス 其子因幡守親治

氏久公妃木并清水城御攻取氏親々 元カ  
元カ 其子信濃守忠親 元カ  
元カ 忠親直子無之五番

治父子へ被下 一因テ一清水へ在城 其子信濃守忠親 元カ  
元カ 忠親直子無之五番

目之弟又二郎重恒 後信濃守  
ト号ス 家督相統 久豊公  
御家老 イタン候得共騎奢ニテ不臣

之色相見得 忠国公御誅討被遊家督ヲ甥之信濃守因親ニ被下候 忠親二  
第二郎

五郎親光嫡子忠国公御 其子因幡守兼親 忠昌公  
御家老 其子三河守親安也隅州清水

領主ニテ曾於郡地頭大窪河北ウス崎持松横瀬帖佐餅田等ヲ押領ス大水

六年五月廿日曾於郡城北郷家ヨリ攻取十一月七日伊集院ニテ 忠兼公

ヨリ 忠良公江御国政御契約被遊御同道ニテ鹿兒島へ御帰之時 忠兼

公御劔ハ御家老阿多加賀守 忠良公之御劔ハ薫親持之享祿三年薫親那

答院之加勢ヲ以曾於郡ヲ取返シ北郷忠相又々曾於郡ニ発向候テ西之城

ヲ攻候得共打破リ追返シ候也天文四年 勝久公御退去以後三州大乱互

ニ党ヲ結ヒ交ヲ同フ時分薫親折々 日新公へ使礼ヲ差上御奉公之志ヲ

相通シ罷居候然ニ天文十一年榊山美濃守善久居城生別府ヲ依御下知差

上候ニ付則薫親江為御加増被下別テ忠節可申上旨被仰下候 此時分薫親  
ハ善久之敵

ナリ善久ニ居城生別府ヲ差上サセ候テ本田江被 夫ヨリ薫親弥以  
日新公御

下候儀ハ御深慮之由榊山玄佐日記ニ相見得候 父子様へ御奉公無二ニ相見得候ニ付一族与党モ離々ニ罷成  
貴久公御

本意ヲ被遂段ニ成立候ニ付此時分 近衛植家公ヨリ御褒美之御書ヲ被

遣候然ルニ薫親威勢益強大ニ相成領内 清水早入船不日当山曾於郡  
牛根咲隈小浜以下数ヶ所 之仕置

騎奢ニ有之老臣トモ加諫言候得共不相用家臣等野心ヲ起シ相駭候御

貴久公ヨリ御人数ヲ被差遣御和談ヲ以薫親嫡子ヲ被召出清水七十五町

ヲ被下御旗下ニ被召付置候処無幾程又々北原那答院加治木等申合野心

ヲ相念候由相聞得候ニ付天文十七年十月四日 日新公御日身清水江御

発向之処不及奉防薫親父子清水ヲ下城イタシ庄内之様退去智ノ北郷時

久ヲ相頼罷在候

○天文十五年 義久公御年十五御元服之時御髪ヲ結ヒ候ト御元服記ニ

有之庄内へ退去之以前ナレハ 近衛公御書ヲ被遣時分ナル歟

天正二年 義久公薫親ヲ被召出川内之天辰ヲ一所ニ被下且又国境之中

ニテ山田地頭ヲモ被仰付候

○天正二年八月廿日天辰ヲ入来院ヨリ進上候間紀伊江可被下敷之由上

意有之○覚兼日記ニ天正二年十二月六日地頭并天辰ヲ被下候御祝言

ニ御酒進上ナリ同四年四月九日犬追物薫親射犬二疋同十二月又射三

疋

同六年大友日州へ攻入候御 義久公御供ニテ罷立候同十二年九月肥後

困へ山陣 天正十一年正月永吉  
地頭紀伊守ト有之由 同十四年七月築紫岩屋之城攻之時出陣肥後

国八代ニ罷在候

○天正三年三月十五日 義久公御世始之犬追物薫親射手ナリ 宋  
同月十七

日犬追物射手七疋イル廿五日又七疋イル 同年「四月廿一日」琉球人

為御会尺犬追物薫親射手之内ナリ

○本田大炊大夫親兼 初薫親又二郎左京大夫  
從四位下法名玄斎 薫親嫡子也 父同前被召出大

炊大夫ニ相成 義久公ニ奉仕「天正六年耳川御陣ニ罷立候」同十一年十

月肥後八代江在陣 同十五年 竜伯公初テ御上洛之時御供仕候

○本田与左エ門尉公親入道玄叱 又二郎  
大炊大夫 親兼嫡子也 竜伯公富隈江被

成御座候時御家老相勤候曾於郡地頭 元和四年卒ス

○本田作左エ門尉元親 初「清親」又二郎  
大炊大夫美作守 公親子也母ハ伊集院忠棟入道幸

侃女曾於郡敷根地頭

一本田刑部少輔親知 初又五郎子孫 因幡守兼親 志昌公 二男因幡守親貞入

道一恕嫡子也 家嫡兼親ニ相屬シ 姫木城相守候 天文十七年 兼親驕奢ニ

シテ無罪之モノ數十人誅戮イタシ候ニ付父因幡親貞數度致諫言候得共

一四承引無之候ニ付二月廿五日父親貞清水ヲ退出イタシ候ニ付三月十

一日ヨリ親知姫木城ニ楯籠上井城主ト相計ヒ清水ノ通路ヲ相塞候ニ付

十三日兼親姫木城ヲ攻撃候得共城強ク落ス親知カ後見島田民部一族本

田式部大輔等 貴久公へ可奉隨旨伊集院大和守迄申入候ニ付同年九月

五日之夜大和守入數ヲ姫木ニ指籠北原カ番兵ヲ追出シ遂ニ姫木御手ニ

入ナリ

○本田因幡守親治 親知子也 御申口役 天正三年三月十五日 親治等ニ

命シ犬追物ヲ行ハシム十七日犬追物イテ一疋イル 天正四年 高原御陣

御供八月廿一日城可相渡由相定入質トシテ此御方ヨリ親治ト徳持舍人

兩人被差遣候 天正六年十月十二日 於新納院高城城下戰死

○本田三河正親 刑部少輔因幡守六右エ門 親治子也 御使役 天正十四年 筑紫御征

伐之時若屋城攻之人數也 御家老 義久公 出水初テ之地頭其後加世田地

頭 天正六年 耳川合戰ニ深手負 同十年 肥後湯之浦所領十町余被下候 同十一年 八代在陣 十二年 九月右筆ニテ八代在番 同十三年 三舟在陣 同十六年 菟伯公初テ御上洛之時御右筆ニテ御供也 慶長四年 庄内乱

ニテ忠恒公御帰国御出船以後六右エ門ヲ大坂城へ被差遣御帰国之儀ヲ

秀頼公へ被仰上候 公大悅 ニテ御懇之上意右之錫毛之御馬ヲ給候事

○本田助左エ門尉親光 本イ昌 正親子朝鮮渡海軍勞有之御知行被下候加世出地

頭

○朝鮮泗川ニテ親光ホカ旧館大道ヲ追フ敵大勢耐止テ防戦フ親光衆ニ

抜テ一人切入ケルカ手ノ甲ヲ切ララル、コレハ籠手指掛ノ緒丸クケニ

テ刀ノ柄握ルニ手ノ内惡シトテ迦シタル故ナリトソ此時白赤威ノ鎧

ニテ手負親光廿五刃ノ鉄炮ニテ相働ナリ

○本田三郎五郎 因幡守親治弟ナリ 天正六年 於高城兄親治戰死之時深手

負

一本田伊賀守親正 初次右エ門与兵衛 信濃守盛親子也 家嫡兼親二月 因幡守親

貞入道一恕二男盛親也 初民部右エ門入道一葉弘治 高麗庄内関ヶ原御供也 三年 岩劔陣ノ時帖佐地頭

○関ヶ原前人垣皆根之先手ニテ河内源五野村弥次郎敵ト入乱難儀之節

親正走繞無異儀引退故御褒美トシテ 惟新公ヨリ藤島之御腰物拝領

也

慶長八年 家久公御下国之御使礼相勤也同十四年琉球入罷渡候然処琉

球渡海之面々ニモ不行跡有之候処親正市來八左エ門律儀相嗜候ニ付御

褒美可被遊出御家老衆御状ニ相見得候 ○軍役十人外ニ五人合十五人と

兵衛百次并靛島移地頭寛永十六年七月廿日卒ス 法号 徳室竜陰居士墓

八南林寺

○靛島ハ小川氏伝領之地ニ候処文祿年中依沢被召上高橋へ 田布施ナ 被

召移候処跡ニ主宰無之他国ヨリ充人共入込第一切支丹隠居ル儀モ難

計出ニテ慶長十六年 一月廿二日 親政ニ靛島当明府 地頭 被仰付罷

移靛島地頭之初也 寛永三年 高奉行系凶親正領五百四十五石

○朝鮮泗川ニテ 忠恒公被遊御乗出御馬之口ヲユルセト御中間ヲ御叱

リ被遊候処ヲ親正鎌田次右衛門木脇三右衛門三人ニテ御馬ノ口ヲ取

計ニ御出被遊候得ト申上前之原迄御出候時赤支度之敵備崩候ニ付夫

ヨリ御馬ヲ御駈出被遊候也 此時 親正ハ黒赤威

一本田下野守親尚 本田六左衛門 本田右藤 法号 越山永超居士子也 其先子

親尚ハ 日新公へ奉仕伊集院地頭職也戰功アリ 天文八年 貴久公市來

御退治之御供之内本田下野守ト有之

○本田下野守親貞入道三省 初弥水 親尚二男也親尚嫡子民部少輔其子

志摩助父子共ニ家督相統之器無之故親貞家督イタシ候事 天文二十三

年九月岩劔御陣之時 義久公御大刀役相勤御供也 義久公初テ御犬

追物之節御太刀役也 天正十四年 八月筑紫岩屋御発向之御御供ニテ八

代ニ 在陣十月 中書家久之子ニテ豊後三重 打入 諸將ト緒方城ヲ攻落シ

於利滿合戰之時於諸所軍勞」九州御出馬之刻於求摩脇大将被仰付候天正八年比ヨリ御家老被仰付候」天正年中「御使役」隅州吉田地頭ニテ磯井吉野領知磯之山下ニ居住之時分置星谷御正鉢鏡ヲ吉野七社春日住吉山神並御白山権現三社大明神奉籠仕候事」天正十五年四月根白坂御陣ニ御供同五月 竜伯公御一所ニ剃髮仕号三省左候テ泰平寺へ御出之節御供仕候処太閤様ヨリ石可被下旨御朱印被成下其上御朱印ハ後年焼失

云 竜伯公御高可被下旨被仰出候得共持高相応ニ有之候故外ニ御奉公之功有之候小舟之衆ニ被下度旨申上御断申上候」加世田地頭被仰付西目八ヶ外城惣押被仰付加世田竹田村へ數年罷居八ヶ所諸士之出仕ヲモ為御名代受申候」龜寿様人質トシテ御上京ニ付親貞妻ヲ召列御供仕候御腰物拜領当慶長元丙申五月廿三日卒「本立三省庵主加世田武田村本立院ニ墓アリ

○本田内蔵允親孝 初右衛門三省兼二美ハ大炊大夫親兼一男也 加世田竹田村へ居住天正十五年日州高城へ籠城和睦之節親孝山田弥九郎有栄等同前城中人質トシテ罷出桑山修理亮請取也朝鮮御供軍功アリ其子

○本田伊予守親正 初弥六天正十五年四月高城加勢之内弥六アリ天正「十年十二月ヨリ翌年正月マテ」十一年八代在陣之内弥六アリ

○御直元服被仰付 惟新公ヨリ大坪流之馬書六冊 公御判形ニテ御相伝被成下候

慶長十一年十一月廿五日犬追物御張行親正射手犬二疋ヲ射ル慶長十四年疏球御征伐之時軍役二十七人賦ニテ御使役相勳渡海軍功有之○曾木福山等之地頭○十九年大阪陣二十七人賦ニテ御上洛御供○寛永十三年十一月三日 黄門公御病氣ニ付為御立願齋流馬有十二騎也亦六射手之中ニアリ

○本田六左衛門親武 初親昌 親孝三男也兄長十郎親宣御前元服御脇差拜修仙 領大学親秀大野準人養子早世故家督也妻ハ長七郎女称古占近大夫私領吉利江御光儀之節御前元服川内高城并福山地頭御用人犬追物射手也嫡子六之助親堅早世二男六左衛門親方家督諸家中緒書之内六左衛門親武

儀 泰清公御供ニテ江戸ニ罷登於江戸男子二人出生弥六左衛門 致候得共親武跡目之儀ハ本妻ニ女子一人有之候ヲ前之町田源左衛門ニ嫁シ其子共御座候ヲ養子ニ願可申上旨内存相極罷居候夫故弥六儀披露ヲモ不申内ニテ元服仕セ申候然処 泰清公ヨリ御国元江差下シ親武跡式可為仕候旨難有 御意ニテ召列罷下候親武死後弥六江家督被仰付候二男親方ハ母ニ相付江戸江罷在候其後御国元江罷下度奉願「」ニテ罷下候処兄弥六早世ニ付親方ニ跡職被仰付候云々

一本田若狭守親豊 兼親忠貞公御家老三男兵部少輔子孫兼賢嗣子ナリ 御使役也」天正三年春季廿四日御家老中迄御託申上候此於三ノ山子致打死老躰ニテ孫武少ニ付懸命之地被下度段申上候処所領二反可被遣上上意候覚兼日記

○本田治部少輔 親豊 永祿九年十月廿六日三ツノ山戦死

○本田与五郎於三ツノ山討死

一本田源右衛門尉親尚 了孫 加治木 家嫡十二代兼親三男兵部少輔親賢二男蔵人親尚子也「母山田淡路久綱女」御使役 義弘公御家老蒲生地頭」天正十四年筑紫岩屋城攻之時 武庫様 惟新公之御事 御供ニテ八代在陣」慶長元年近衛信輔公御帰洛之時御供鹿島右衛門ト兩人也「高麗御供七ヶ年」酒川色々威」在陣直ニ伏見へ御供関ヶ原迄罷立御退去之節於有御危急ハ御名代ニ可罷成下於途中致剃髮御供仕候御髮美トシテ百石之御感状頂戴ス」慶長十年四月廿日於加治木病死「良山道久居士火株寺葬ル後本誓寺ニ改葬ス」殉死神田藤兵衛

○本田源右衛門親存 初小源五 伊豆 親尚嫡子也「母ハ本野瀬豊後秀富女」朝鮮関ヶ原父同前御供高五十石御感状被下候」蒲生地頭」寛永二年丑四月御役ニ付四ヶ一上地高百十八石被返給候」同六年十二月廿五日」卒ス「雲雲浄察居士本誓寺ニ葬ル」

一本田丹波守親純 民部子孫 本田半兵衛 信濃守重恒 久公御家老忠國公 子民部親次子孫也

○重恒事清水城主ニテ候処塲之二郎太郎因親依讒言惣領職被召上曾於  
郡へ致齋居終ニ為國親被誅ナリ

親純代家嫡薫親因親曾孫也父子致謀反候ニ付本田之家督親純江被仰付候

○本田与四郎親贊 親純子也於牛根戰死

○本田伴兵衛家親 親贊養子実ハ本田因權守親治二男也御兵具奉行川辺  
地頭○家親代薫親子孫与左衛門公親代上意ニテ又々木出家惣領ニ罷成  
候○朝鮮御供功アリ中ニモ 久保公唐人ト御組打之時御危急奉救候ニ  
付御廻拜領

○本田半兵衛親紀 勝五郎 家人一親堂 家親子 義久公御加冠東郷重位之門第也

高麗庄内関ヶ原島原御合戦々功アリ御兵具奉行御普請奉行万治二年十  
月三日卒ス七十九歳一法号大隻榮院庵主墓南林寺」其子勝五郎朝鮮御  
供御兵具奉行

一 本田陣正忠親歳入道嘉辰斎 弥次郎 子孫 前本田半兵衛家系ニアリ  
山城守 本田助之丞 信濃守重恒 前本田半兵衛家系ニアリ

二 男也永正四年生 当家系因於慶元火災ニテ燒亡スト見ヘタリ 貴久公御申口役伊集院湯之尾  
等之地頭馬越下手村領地ニ居住也天正七年十月「廿九日」卒ス七十三  
歳「福寿院満室田公居士」墓ハ帖佐天福寺ニアリ 親歳ハ能言ナリ

○本田助之丞親貞 清常清平權之介 親貞ハ脇元豊前清元カ子ニテ候処親  
一後元親一

歳子治部子細有之 義久公之命ニテ追放イタシ親貞ヲ養子トス於諸所  
軍功就中関ヶ原以後御和平之御使相動御加増二百石被下候唐船奉行慶  
長十三年九月廿九日卒ス四十六歳一忠心院明巖清円居士 帖佐總一

覺兼日記ニ天正十年十二月肥後八代在陣之内本田弥二ト有之

○本田勝吉親明 親貞子 天正十一年生父同前関ヶ原へ罷立也ナリ 父下

薩之時為實山口氏ニ在事三年慶長十年十二月十一日卒ス廿三歳 一清涼  
目心上座天福寺ニ墓アリ 軒月窓

○本田助之丞親正 勝次郎親明弟天正十三年生兄早世故家督其子助之丞

親長勝八慶長十六年生依命鹿兒島江移ル

一 本田出雲守親貞 兵助 次郎左衛門尉 本田流右衛門 子孫 本田二郎貞親入道静親 貞親

原氏ニ罷成候下 他腹之長男次郎左衛門尉久兼三代次郎左衛門兼久二男親  
家嫡譜ニアリ 信三代之孫上野介親辰四男大和守之子孫伊賀守入道々伯之子ナリ高麗  
渡海慶長四年庄内安永ニ伏兵之時戰死五十七歳節岩道忠庵主南林寺」  
其子親右衛門親盛 甚三郎 兵助 於庄内父一所ニ戰死二十二歳 昌眼金久居士 南林寺

一 本田甲斐守親良 初新助親智 子孫 本田出羽守親綱養子也 貞親他腹  
左衛門久兼嫡孫左近藏人兼久二男親信嫡子周防守兼恒三男弥四郎高崎播磨守養  
子被成其子親綱也親綱代去高崎家木田氏ニ相成親綱了ハ李之介親盛ト云テ本田  
帶刀養子 実ハ岩切普信入道可卷二男也朝鮮在陣功アリ 天正十六年 善信 公初子御上洛御供

永祿十二年九月妻刈降参之時 伯國公ヨリ 坊泊地頭 家久公御代御相談役  
人實トシテ鎌田刑部左衛門新介ヲ被遣候

六人之内也 評定之末席 二相動ナリ 大坂御藏番相動高奉行 元和五年ニヨリ寛永十年 比高四百六十石余有之  
寛永十四年十月「廿日」卒去一源溪宗本居士南林寺ニ墓アリ

○本田右衛門親平 初新助 与五郎 親良養子実ハ毛利肥前嫡子也母ハ親良女一吟味  
役京都藏奉行假御使役」羽月財部綾等之地頭朝鮮御供「泗川紺威」江戶  
王子村「寛永十三年十一月三日 黄門公御病氣御立願流鎧馬十二人之  
内ナリ」大迫物射手之内也

一 本田吉成親純 後襲岐 子孫 又左京 伊集院ニアリ 其先キ知レス少年ヨリ 惟新公御小  
姓相動候十六歳ニテ関ヶ原御供御高五十石御感状被下候島原陣ニモ罷  
立候 二原左衛門重庸手ニテ 島原へ罷立候人數ナリ

○本田四郎左衛門尉 天正十五年四月 太閤御動座之鞠和睦ニテ六月官  
之城之内九尾之難所ヲ御通興之時四郎左衛門新納忠元之下知ヲ以九尾  
ニ埋伏シ殿下之興ヲ矢六筋マテ射候得共殿下ハ後陣之内ニ被為居空興  
ニテ候出天正廿年於滝ヶ水歳久へ殉死二十七人之也 一実隆又真上座

○本田二郎五郎 歳久へ殉死二十七人之内也「月窓幸心上座」

一本田九郎入道笑閑 了孫 高岡ニ有之 日新公へ御奉公於諸所軍勞就中「大永

七年」帖佐之城主島津政雅御誅伐之御供拜領之御腰物ニテ於玄關口政

雅并家来ヲ兩人打果也永祿九年七月二日 日新公ヨリ諸所軍忠之為御

褒美伊作入来之内原園井水田一町高地一町拜領仕候其子本田九朗天文

七年十二月廿九日於加世田戰死其子本田掃部兵衛親広諸所軍勞大正六

年耳川并九州入高麗御供慶長四年伊集院幸胤ヲ於伏見御成敗之御曾木

甚右衛門同前御近習番被仰付夜白相勤候処顔ノ古疵ヨリ眼病相煩ヒ盲

目同前ニ罷成候同五年高岡外城ニ被召立比志島國貞へ地頭被仰付候節

掃部兵衛へ与頭役被仰付被召移候

一本田淡路守親存 慶長五年高岡外城ニ被召立候節地頭相談役トシテ被

召移候

一本田吉右衛門親良 高岡へ被召移候

一堀之内日限坊藤原久規 俗名 民部左衛門 文祿二年癸巳九月八日又一郎 久保

公於朝鮮巨濟御逝去之勲久規平山作右衛門忠統ト 公之頓証御書提之

為ニ山伏ニ罷成久規ハ日限坊忠統ハ一忠坊ト改名シ久保公御位牌ヲ背

○道ヲ学ヒ書ヲ読テ捲厭コトナク義理明弁ニシテ始終閑記シ書法ヲ善

シ常ニ筆墨ヲ帶シ拾遺ヲ手ニシ或ハ禪室ニ入テ話柄ヲ拳へ人其才ヲ

稱シテ不器トス 孫 孫右衛門 堀四郎大夫

○南浦文集本郷左京大夫貞則トアリ義則初之名乗ト見ユ

死去之時御手向序アリ 家久公

ナレクテ見シ世ノ春モカキリソトウツロフ花ノアトノカナシキ

梓弓ヤヨヒノ空ニ鳴ク雁モサラス別ノ跡シタフラン

一堀四郎左衛門 後丹後守 孫 孫右衛門 堀四郎大夫 豊後大友氏之庶流ニテ堀九郎ト申

者大友豊後守政親之息女 忠昌公御夫人ニ御輿入之御右九郎御輿添之

役ニテ御当國へ罷下候由其子孫也元龜三年 二年 四年 左衛門二十五歳之

時足輕大将ニテ鹿兒島ヨリ日州福島へ被召移七ヶ年罷在候天正四年福

島ヨリ日州宮崎へ被召移是年七ヶ年境目御番地頭江相付御奉公仕候同

十五年太閤西征之御官崎没落イタシ福島之辺土江致齋居候同十六年福

島ヨリ隅州大始良江被召移候同十九年一國一城之外警衛被差留候御致

下城同所獅子村上田原へ罷移候慶長五年大崎永吉村へ罷移候寛永三年

五月廿三日卒ス「法号安清紹康居士」其子

由忠金祖父新助忠員〔後述〕穎娃〔後述〕ニ居住〔後述〕「父伊賀忠親源左衛門一松齡公ニ事へ

穎娃ヨリ小林ニ移ル」忠金伏見城攻有功関ヶ原戦死〔後述〕子孫堀源左衛門

一法元大炊左衛門 加治木へ罷在候関ヶ原御合戦以後 忠恒公御上洛被

遊候ニ付 惟新公ヨリ上方表之取沙汰御間合トシテ白坂大学坊ト兩人

御登セ被成候

一法元太郎左衛門盛宣 松齡公御鷹匠ニテ朝鮮御供

一法元右近 忠恒公御供ニテ朝鮮渡海〔後述〕泗川紺威

一法元仁右衛門 琉球入「人数六人」国王降参之砌正之貴族数人同意不

致下城不仕候ヲ討セラレ候時仁右衛門久留伴五左衛門梅北照存坊追掛

シキ名ノ野迄追候仁右衛門照存坊手負

一星山仲次 子孫 星山仲右衛門 高麗星山下中所へ罷居焼物細工仕候処 惟新

公被召列於帖佐焼物細工被仰付御腰物大小拝領被仰付星山仲次ト改名

其後瀬戸焼茶碗等稽古被仰付上方へ罷登リ御用細工被仰付御高三十石

被下置加治木へ被召置段々細工仕差上候 家久公御代鹿兒島江被召移

御切米十五石被下置候

一芳仲トイヘルモノ焼物イタス物ユへ高麗ヨリ被召列帖佐へ被召置候ダ

ツモンジノ相ナルヘシ

辺之部

一別府準人佐頼延 頼延〔後述〕子小吉頼景〔後述〕 子孫 民部左衛門頼昌子也〔後述〕 三郎

後胤主殿助頼房之永祿七年 忠平公御供ニテ飯野へ被召移六十人之内也

忠平公ヨリ 忠恒公江初テ久保七兵衛ト兩人被附進候天正十五年於根

白坂打死〔後述〕加治木〔後述〕老

一別府助右衛門 帖佐ニテ松齡公ニ奉仕後加治木ニ被召移 慈眼公御

代納殿役

一別府掃部兵衛天正十五年桂神祇ヲ授テ平佐城ヲ守ル

一別府甚五左衛門 木崎原戦死

一別府舎人 慈眼公納殿役

一別府治部忠房 久三郎〔後述〕 別府上郎兵衛 隠岐忠興子也別府五郎忠明十六代

忠興也忠房 日新公へ奉仕日置伊集院ニテ有功於岩〔後述〕戰死

一戸次半兵衛義貞入道伴齋〔後述〕其先大友能直長子二郎左衛門重秀戸次トナ

ル其後胤丹後親統〔後述〕初六 其子伊予親久其子撰津純貞世々大友氏ニ属シ津

ヶ牟礼城ヲ守ル天正十四年 豊後入之時降参御国へ罷越御家臣ニ相成

候「義貞ハ其子ナリ子孫戸次半兵衛」

一辺牟木助四郎国時 子孫川口〔後述〕 其先比志島氏之祖上總法橋柴弁之五男

辺牟木又五郎栄慶始テ辺牟木氏トナル其子又五郎義行又少納善慶尊ト

称ス其子又五郎義英頼秀ト号ス其子兵庫頭義國其子兵庫頭久家其子兵

庫家昌其子兵庫家國其子国時ナリ 比志島家之庶流ト見ヘタリ於川内

戦死其子助四郎国信天正七年從 日新公「加世田」打死其子関付左衛

門国次「助四郎」天正十五年宮部陣合戦打死「普請奉行ニテ大カノ人

之由」其子利右衛門国家「助四郎」朝鮮渡海功アリ其子右衛門兵衛国

明平右衛門家嫡比志島義貞依免許号川出

一辺牟木佐吉慈眼公朝鮮御供

止之部

一東郷大和守重尚入道喜俊 子孫 東郷九右衛門 東郷大和守重治養子実ハ菱刈

相模守重州入道天岩三男也東郷氏ハ桓武帝之後胤渡谷庄司国重嫡子太

郎光重二男早川次郎実重宝治二年父光重命ニ心シ兄弟五人武藏国ヨリ

薩摩へ下向実重ハ東郷ヲ領シ車内ニ致居住是ヨリ東郷トモ車内トモ名

乗ル其子太郎忠重其子小次郎重高十二代之孫重治也世々東郷ヲ領ス天

文中御敵対中上候得共元龜元年入来院ト致談合重尚東郷高城水引湯

田西方致進上降参仕候ニ付東郷ヲ被下候テ本領安堵也天正十三年比牟

ス天正四年高原城攻東郷殿ト行之



○東郷源七郎重虎 幼名鎌徳丸 又八郎 重尚養子「天正五年二月養子トナル」実

ハ島津中務少輔家久之二男也後逢違天正二年誕生母ハ樺山善久女天正  
年中東郷高千二百六石領知ス天正八年八月水俣御陣重虎脇大将之列ニ  
テ先陣家久ニ相付出陣 此時幼少ニヘ軍代ヲ以テ 天正十五年殿下出水御着陣  
和泉之忠辰御手ニ属野田高尾野阿久根高城水引并下城ス東郷ハ渋谷重  
尚知行ナリ中務ノ二男源七郎ヲ養子ニシ重尚ハ兩年前死去ナレトモ源  
七郎幼少ナレハ佐土原ニ居ス老臣共東郷之城ニ取籠ルトイヘトモ力不  
及シテ下城ス云々文祿元年夏見之豊久ニ相付朝鮮渡海十月十日於唐島  
義弘公御意ニテ東郷ヲ去リ本姓ニ復リ島津忠直ト改名

○東郷若狭守昌重 久昌安袈袂 又九郎 重虎嫡子也慶長十五年於日州田尻村生母

日高氏寛永九年 家久公御供ニテ江戸へ罷登節於庄内高城児玉筑後守  
ヲ以申上候ハ衰微之身分島津御名字ヲ名乗候儀御称号之儀ハ御辞退中  
上候処翌四月東郷家連続被仰付候テ正保三年戊十二月樺山又九郎  
久尚養子ニ罷成諸右衛門尉久広ト改名

○東郷九右衛門尉重經 忠経鎌袈袂 源太郎多富 重虎二男也慶長十七年「菱刈ニ」生

「母昌重ニ同シ」正保三年兄昌重跡目被仰付候「延宝三年十一月七日  
卒年六十三法号一岳道貫居士」

一東郷安房助重治入道弓伴 子孫 東郷十左衛門 瀬戸口藤兵衛重為二男也 初重七 又孫七 覚書有

「元龜三年我兵校島ニ航シ進テ下大隅荒平ヲ破ル是時伊地知朝重伊集  
院久春同前軍労働他ニ殊ナリ」天正年中唐船嚮相勤武辺之譽有之内之浦  
山川久志秋目等之地頭瀬戸口氏ニテ候処天正年中嫡家源七郎重虎之免  
許ニテ東郷氏ニ改名「十五年泰平寺御供」天正十六年 竜伯公初テ御

上洛御供之内ニ瀬戸口与助アリ「文祿中高四百石」其子十左衛門重恒  
高江山川山田等之地頭一寛永九年人数賦重恒騎馬二人卒廿三人鉄炮二  
槍十二号一

一東郷肥前守重位 瀬戸口弥十郎藤兵衛 子孫 東郷藤兵衛 瀬戸口藤兵衛重為三男也 長門守刺髪重位

永祿四年於鹿兒島誕生「兄ト共ニ東郷ニ改ム」天正六年耳川合戦ニ初  
テ罷立候聚丸壹岐親分ニ相頼參候由天正年中在京之勅示現流戰術善吉  
和尚ヨリ 俗名赤坂雅榮介洛陽 天寧寺四世之住持也 皆伝イタシ其後 家久公御師匠被仰付御高  
四百石御腰物 南無大悲觀世音 菩提ノ九字アリ 拝領被仰付隱居之節百石被下候泊地頭天  
正十六年 竜伯公初テ御上洛御供之内瀬戸口藤兵衛尉ト有之寛永廿年  
未六月廿七日卒ス年八十三歳法名能学俊芸菴主 瀧ハ南林寺南ノ 方山蓮ニアリ

牡丹 重位  
イツハアレトケフ一シホノ花盛アカヌ色香ヲ深見草カナ  
紅葉 同  
山陰ニ見ユル紅葉モケフコソハ今一シホノ詠ナリケリ

落葉 同  
行ヤラテシハンヤスロフ山陰ノ袖ニ間ナクモ散ル木ノ葉カナ  
旅 同  
又今宵草ノ枕ヲムスヘトヤカネハ聞ヘス雲カ、ル山

題シラス 同  
直キ世ニ罪モナキ身ノイカナレハカク山カケノスマヒナルラン  
同 同

サユル夜ノ夢ニ疑フ心カナイツカクレ家ノ内ニ来ヌルト  
同 同  
稀人ヲ尋口ニ時ノ移リ来テ池ノ蓮ニ秋風ソフク  
同 同

神祇 同  
鷹ノ鳴ク秋待ヘタル松陰ヤ神ノ心モ住吉ノ里  
同 同

題シラス 同  
古寺ノ砌ノ松ニ風吹ケハサナカラ法ノ声ヲ聞哉  
同 同

○文之集 武術書後  
代羽林殿下 即仲春廿八 日之記ナリ ○慶長九年申辰仲春使藤兵衛揮劍其揮在自得  
ル其妙出自然トアリ

○重位ハ古風ヲ慕ヒ儒仏ノ道ヲ学ヒ茶事及ヒ和歌マタ春蘭秋菊ヲ画ヒ

テ精神ヲ筆端ニ得マタ柳下ノ鍛ニ巧ニシテ夜ヲ以日ニ継キ得ルコトヲ務テタ、一芸ニ名アルノミナラス多芸ニ名アリ

○竜伯公初テ御上洛被遊樂へ被成御座候節重位御供ニテ上京イタシ善吉和尚へ示現流致懇望候事一寒暑ニシ得其奥

○東郷肥前守重方 孫十郎 藤兵衛 重位子慶長九年生母ハ松元伊予守女坊泊地頭町奉行 光久公御師匠高二百石被下置候万治二年卒 年五十六建立能學寺世二大肥前殿下云是也

○東郷源四郎重信 子孫 東郷長左衛門 其先出所不相知 或云大和守重治弟 東郷駿河守 親族ニテ候 其養子四郎左衛門重勝 其有川治部 貞則二男 其子重信也 忠恒公御供ニテ朝鮮渡海 人正十一年八代左陣之内 東郷四郎左衛門トアリ 慶長五年八月朔日於伏見城戦死

○東郷長左衛門尉重尚 重信養子実ハ弟也本郷伊予守義則弓之門人ニ罷成口置流射術致相伝候○伊勢貞昌谷山地頭之節地頭代相勤也此時加治木ヨリ谷山ニ移ル 光久公之御師被仰付御切米拾五石被下置候其後上意ニテ於伏見吉田一水軒印西弓之門弟被仰付是又不残相伝ス万治二年七月朔日卒伝弓院心与利成庵主墓ハ松源山中路傍ニアリ院号ハ後世之追号ナリ

元和六年九月廿二日谷山の的場ニテ七分ノ金の七十人之射手一人モ中ラス伊勢貞昌木上惟商重尚ニ望ケレハ二矢共ニ中ルニ士感シテ

武士ノイル矢ハ神ノ心ニテ誠ノ道ニ中リコソスレ

梓弓イル人ミレハ千早振神ノ心ニカワラサリケリ

○東郷二右衛門重昌 子孫 東郷八郎次 初湯田氏与七重成子也 民部重信那答院之ニ氏トシテ代々那答院へ隨身ナリ九代之孫重成テリ重成ハ於内戦死 惟新公御荷物役相勤元和六年東郷加賀重綱ト相議シ東郷氏ニ相改候也

一東郷刑部丞 金吾歳久ハ殉死二十七人之内也「法号助翁存佐上座」

一東郷勝次郎重次 子孫内膳重増代万治元年被召出候 十代薩摩守重隆 家嫡宗 東郷次郎太 郷九右

内ニアリ 二男源左エ門重宗五代 重宗子ハ越後守重房永禄十一年於何久根戦院陣正ヲ相頼陳之城ニ罷居候其子越後守重良其子右エ門佐重歳其子重次ナリ 之孫右エ門佐重歳子也入来院又六重時之家臣ニテ於庄内戦死其弟吉兵衛重明文禄年中入来院家之人質トシテ在京其後高麗へモ渡海 後入来院伯耆守重国ニ從テ江都ニ朝ス

内膳重増寛陽公之命ニ依リ入来ヨリ陸府ニ移ル子孫東郷太郎左エ門

一鳥丸紀伊介重利 子孫 鳥丸六右エ門 東郷氏八代薩摩守重位二男次郎左エ門

重世東郷之内鳥丸ヲ領シ号鳥丸其子越後守重朝其子重利也重利御家へ被召出天正初比中郷地頭職也其一 寛兼日記云天正二年八月九日未時平佐城之使者陸府ニ来申ケルハ昨日東郷ノ賊三百余人俄ニ中郷ニ攻来リ地頭鳥丸紀伊介出家一人兵三人ヲ射殺スト云々

○鳥丸六右エ門重統 初兵部 朝鮮伏見関ヶ原御供御高被成下候 慈眼公

名護屋ヨリ箕谷治部ヲシテ御渡海之段被仰越候時松齡公ヨリ重統ト治部兩人御迎ニ被遣候「慶長三年九月廿八日古館之人數泗川へ引取候砌六右エ門鷹之飼打ニ出戰陰ニ居候故真先ニ斬来リ能敵老人射落候処押川公近敵中ニ走込候テ首ヲ取候

「一鳥丸勘右エ門重珍入道重慶越後守重口ノ二男安芸重通ノ子ナリ朝鮮ノ役島津豊久ニ從テ軍功アリ子孫永吉ニアリ」

一遠矢阿波守平重良 子孫 遠矢金兵衛 秩父将恒弟小五郎忠道九代成兼領阿久

根初号莫根五代孫莫根院之領主莫根右エ門尉成友之ニ男左エ門尉成行初テ莫根之内遠矢ヲ領シ号遠矢 成行強弓ニテ四方ニ遠矢ヲ射其矢之落候七矢掛四方致領分候由初孫太郎 代之孫兵部成那於限之城致戦死其子八郎成則モ又於限之城戦死其子重良也重良 日新公へ奉仕シ田布施ハ罷在候

○遠矢对馬守重勝 重良養子実ハ同氏 常業之二男ナリ 天文十四年於川辺戦死其子金兵衛良兼天文七年加世田城攻前方以御意城中ニ忍入案内ヲ見置言上仕候ニ付無

間違御攻取被遊候其御褒美トシテ備前景久之御臨指揮領被仰付候天文十四年於平松戰死其子遠矢十郎三郎重勝ノ二男子孫長野ニ在リ

○遠矢信濃守良時 良兼 祢答院長野地頭 天正九年水俣御陣長野地頭ニテ

御供天正十四年七月筑紫江御出陣之内島津歳久之養子三郎次郎忠隣幼年ニテ初陣ニ付木脇正徹兩人被召付候長時於豊後竹田賦原戰死其子

○遠矢金兵衛重珍 良時子又菊 金十郎 三歳之時父良時戰死長野へ罷在母致養育

候処 竜伯様ヨリ代々戰功之筋目之者候由 上意ニテ御前元服被仰付御名之字被下名ヲ又菊ト被下候其後金十郎ニ罷成候テ又金兵衛ト致改名候「亦長野地頭」天文十六年 竜伯公初テ御上洛之時御供之内金兵衛尉片書高山トアリ琉球八重在番被仰付伊勢六郎兵衛相役ニテ渡海於

彼地病死  
一遠矢下總守良堅 對馬守重 子孫一恒吉 勝二男 財部ニ有之 永祿七年 忠平公御供ニテ飯野へ罷移ル六十人之内也同九年三ツノ山城攻候節太刀初イタシ候同十年十一月廿四日高城城攻太刀初イタシ數ヶ所手負同十一年正月廿日

忠平公大口堂崎ニテ御合戰御引退之時公殿ニテ羽作瀬御渡之時良堅財部伝内左エ門等身命ヲ捨防戰手負同年八月十日伊東加賀守大將ニテ飯野へ押入田原ニ陣取居候ニ付同廿日 忠平公御武略ニテ黒木播磨兩人ニ主取被仰付人數五十人被召附養原本地古溝へ夜中ニ伏兵イタシ

一翌「朝飯野ヨリ田原上小原之上へ為鶴狩少々人數ヲ被出候処田原陣ヨリ遁スナトテ人數大勢打出候節伏兵起合敵余多打取候元龜三年五月四日伊東勢加久藤城へ押寄候節後詰トシテ人數五十人被差越良堅江江主取被仰付走向ヒ久留半五左エ門兩人一番鍵也 長峰弥四郎 ヲ打取候 天正年中御軍談衆五十四人之内ニ有之死去年号不知養ハ恒吉德泉寺ニ辰八月八日トアリ「法号悦岩栄松居士」

一遠矢軍兵衛 日州高城衆ニテ岩屋城攻之時戰死  
一富山備中守入道 子孫 富山伝内左エ門 中務家久江被召付佐土原ニテ家老相勤高三百石所持天正六年大友日州へ攻入之砌 忠平公以御意酒瀨川奉

膳兵衛同前敵之通路ニ伏兵イタシ七十五人打取「備中自ラ十七人ヲ斬ル」慶長十九年四月十九日卒蘭慶常香居士 養福昌寺 内翁心許

一富山勤解出左衛門義信 備中子也  
○諸家系図ニ備中養子弥市兵衛義辰実ハ家村奎之丞三男代官長野金山奉行物奉行相勤候トアリ此説如何

天正年中御軍談合人數五十四人之内ニ有之 栗野ト有之此時分栗 高麗渡海 野居住ト見ヘタリ 其後出水江被召移候庄内ニモ出陣ナリ 覺兼日記ニ覺兼父泰安齊志和須崎 城ヨリ富山勤解出左エ門ヲ使トスト 阿利此時志和須崎ニ居住カ

○富山弥右衛門 勤解由子或云義信子ヲ又勤解由ト云出水へ被召移 惟新公御小姓相勤加治木へ罷居小番相勤候由御逝去以後谷山衆中ニ罷成居候 伊勢貞昌与方相勤鹿兒島へ被召出候其後金山奉行 一富山次十郎 豊久之家臣也庄内安永之戰ニ風呂谷ノ上ニテ鉄炮ニ當リテ死ス十六歳ナリ

新納武蔵入道忠元次十郎カ戰死ヲ悼テ 昨ハマテ誰カ手枕ニ乱レケン蓬カモトニカ、ル黒髮 一富山清右衛門義陣 子孫 富山十兵衛 先祖ハ大始良ニテ一切号大始良 忠平公御下向之時富山為父梅北為母ト有之 氏久公 忠国公ヨリ被下候書状モ有之「義陣父ヲ富山左近ト云フ敷福島之内ヲ領スト云」義陣兵具奉行ニテ朝鮮渡海伏見城攻ニ戰死其子左近義昌帖佐ニ住ス天和元鹿兒島へ被召出候 子孫十兵衛 代ナリ

一德永与市左エ門 加治木之肝付氏卒将ニテ弘治元年三月八日於帖佐山田戰死  
一德永助右エ門 忠恒公御供ニテ高麗へ罷渡慶長三年九月勝日兵右エ門戰死之翌日兵右エ門死骸退ニ余多被出候得共首ヲ取ラレ候故皆々不相知候処兵右エ門金細工イタス人ニテ大指ニヤスリノ形有之候ヲ助右エ門存知ニテ被相退候「酒川合戰 紺糸威」

一 德永对馬 貫明公ニ事テ因分代官役子孫 德永善左門

一時任伊予守義狀 源三郎 子孫 時任慶左門 日新公江奉仕有功

○時任明覚坊義高 源三郎 義狀子也伊東大友合戦有功 義久公命ニテ 源左門 宿願アリ号明覚其子金藏院義信 源八 明覚坊 其子良賢院義照「初越前坊」受

宿願アリ号明覚其子金藏院義信 源八 明覚坊 其子良賢院義照「初越前坊」受

光久公命一師三野村太郎左門善綱子烏津家軍術法

一時任内蔵允 松齡公ニ仕ヘ帖佐及加治木ニ居ル朝鮮関ケ原御供

一言永式部左門 木崎原御合戦曾木曆磨等同前戦死

一唐仁原藤七兵衛 口州宮崎衆中ニテ地頭上井覺兼ヘ相付岩屋城攻之節 一番ニ屏涯ニ相付戦死

一唐仁原肥前 永祿七年 松齡公ニ從ヒ飯野ニ移ル六十人ノ内ナリ

一烏井与八郎惟貞 惟新公御小姓ニテ高麗ヘ罷渡番船破之時戦死又関ケ原戦死トモイヘリ

一富松左京亮久友 伊集院忠国十五男飛松相模守久義七代之子 孫也父ハ左京亮久元ト云子孫伊集院弥七 天文七年十二

月廿八日加世田城攻之時文統系國城攻五日敵大山宮内少輔ト指違相果候 前進加世田トアリ

同廿九日加世田落城之時猿渡某敵市来某ト指違死ス両氏之墓在城門之

左右富松松猿渡之墓

一烏原喜右左門宗安 坊津之人ト見得タリ朝鮮御帰朝之節大明之人質茅

渭浜ト申モノ日本ヘ相渡リ居大明江可被帰遣之由五大老依仰薩州ヘ被

差下山川ヨリ吉船二艘ニ乗セ宗安ヲ被召副慶長四年八月下旬出航イタ

シ福州梅花津ニ致着船夫ヨリ順天府北京マテ百里余之行路ヲ経候テ北

京マテ参着候処紅糸白糸巻物等過分ニ預投患致帰朝糸巻物等進上仕候

一友野甲斐 元亀中下大隅ニ從戦舟中ニテ伏勢シ賊ヲ撃破候時甲斐多

ク首ヲ取ル伊集院久春亦一人ヲ斬候甲斐ヲシテ証人トス後卒二人ニテ

琉球征伐渡海

一友野次郎右衛門 兵九人ニテ琉球渡海後小根山山本田代佐多辺塚五ヶ所之代官役トナリ小根占ニ居ル

一 德持舍人 曾於郡之人永祿中敷根之戰大蔵ト云者敵之鉄丸ニ中リ候時 舍人救ヒ帰ルト云 敵ハ肝付ノ 賊トイフ 天正四年高原ニ從軍落城之時本田因播岡 人人質トシテ敵陣ニ被遣候御軍談合人数五十四人之内ナリ朝鮮御供 朱イ左 床浪善助 慈眼公朝鮮御供

本藩人物志 卷之四

千之部

一長寿院盛淳ハ橋陰軒伝島山ニ有之之子ニテ俗姓高島山氏ナリ幼少ヨリ出家ニテ大乘院盛久法印ノ弟子ニ相成及壯年紀州根来山ニ登山勤行八年又高野之木食上人ニ從フコト三年ニテ帰國イタシ其以後安養院住持ニ相成居候処 竜伯公ヨリ御家老役被仰付天正十四年九月廿七日長寿院并大善坊京都江被差上候 当春鎌田利部左衛門上洛ノ節秀吉ヨリ被仰趣有之候得共此節刑部左衛門病氣ニ付此兩人ヲ被差上ナリ同十五年殿下西征 竜伯公泰平寺へ御出被成候時御家人七人御目見盛淳モ其内也此時京勢路ヲ遮リ嘲晒イタスモノ一有之候此時盛淳目ヲ張テ叱シテ曰「何ソ如此哉トテ刀ヲ抜切私可能通氣色ユヘ軍士路ヲ開候由天正十八年小田原御陣御供文祿 年朝鮮渡海慶長四年庄内へ出陣山田城攻ノ時家来杉木帯刀安田仲藏戦死其後白石水仙伏兵ノ時家来大山与市左衛門木佐貫少内戦死 慶長四年清敷地頭無之衆中之儀ハ長寿院へ慶長五年七月 惟新公ヨリ御使被差下早々可能上旨被仰下候間同八月上方

ニ付宿許打立候時妻江中置候ハ再帰國ハ無覺東候間若計音相聞得候ハ、石ニテ淳カ圖ヲ作り我年来所持ノ弥陀像ヲ大興寺ニ安置イタスベシト申置候ヨシ 浦生之士七十人致同道發船室兵庫ヨリ大坂ヲ過キ九月十三日美濃國大垣ノ御陣へ参着イタシ候処 公陣門ニ御出被遊盛淳カ手ヲ御取候テ扱長寿院敷一番ノ御方ト思ヒシト殊之外ノ御機嫌ニテ候石田三成盛淳参着ヲ賀候テ使ヲ以金ノ軍配(扇)ヲ被贈候左候テ十五日朝御取合前盛淳申上候ハ万一御一大事ニ成立候ハ御名代ニ可罷立候ニ付御羽織ヲ拝領被仰付度由申上候ニ付御羽織被下候 惟新公殿下ヨリ御拝領ノ御羽織ニテ候 敵味方入乱候時盛淳鶴毛之馬ニ乘リ拝領ノ羽織ニ團扇ヲ持敵ク致下知防戦ス敵四方ヨリ取掛乱軍ノ折家来共へ 殿様ハ何方江御座候哉ト相尋候ニ付皆々申候ハ最早遠ク御退去被遊候ハント申候へハ其時盛淳日出度シト申候テ刀ヲ拔烏津兵庫頭死狂ヒナリト名乗り敵中へ切入候得ハ敵大勢取掛鐘数本ニテ突立終ニ致戦死家来森二郎黒木仲一山田式部等十余人皆戦死也盛淳今年五十三法名一起日純居士子孫 浦生地頭所領二百石 安養院寺高ノ内トイヘリ

一帖佐彦左衛門尉宗光 帖佐後路寺宗治子ナリ宗治ハ 惟新公御代足輕大将也庄内陣ノ節聖德奉行相勤山田城攻ノ時敵ニ入リ生捕入御実驗 天正十年冬 惟新公筑後柳川城主田尻中務大輔鑑種へ為御加勢人数八人被遊候節宗光モ其内也翌年四月十八日 公御感状ヲ被下候同十二年春帰國同十三年 公ノ御供ニテ水俣合戦之時太刀初イタシ首備御実驗也同十四年豊後入ニモ御供肥後佐敷ヨリ中務家久ノ御陣へ御使ニ被差越候処家久被召留軍奉行被仰付 此時分ヨリ足輕大将ナル候 十二月九日緒方城被賣落候時宗光首ニツ取候テ備実驗同十一日於豊後利満京勢ト大合戦ノ時宗光首五ツ打取翌年三月佐上原へ帰リ又為御使鹿兒島へ差越同四月根白坂御合戦ノ時モ 惟新公御供ニテ罷立候処家久必死ニ御究被成是非打死ト被思召由ニ付御 両殿様 竜伯公ヨリ度々御使ニテ御制止被遊候得トモ御聞入無之故 惟新公ヨリ宗光御使ニテ御止被遊候得共御聞入不被成依之宗光御使不申馬候テ空ク罷帰申儀不被罷成候間切腹可仕ト申候テ刀ヲ拔候得ハ家久モ其方ヲ切腹サセ候儀無本意左アラハ御意ニ可相隨由被仰候テ打死御止被成候トナリ同十六年七月播州之内ニテ一

万石御拝領之節宗光市来掃部兵衛阿人代官被仰付數年在伏見イタシ同十八年久保公小田原御供騎馬十六騎之内也於彼地矢二当リ手負ヒ公黒皮威之鐵筋金之御甲ヲ被下候文祿元年久保公御供ニテ高麗渡海糧奉行并普請方玉葉賦方被仰付公鑓子割ト申金ノ丸貫ノ御腰物ヲ長一尺一拝領被仰付其以後忠恒公ヨリ御感狀ヲ被下也慶長三年掃部直ニ御供ニテ伏見へ罷登同四年春忠恒公ヨリ伊集院幸侃御誅戮可被遊旨竜伯公へ被仰上候御隱密之御使相勳直ニ罷登リ六月忠恒公庄内御追討之御下向御供ニテ父宗治共ニ庄内へ出陣六月廿三日山田城攻之時首三ツ打取八人生捕入御実驗翌廿四日忠恒公ヨリ御使トシテ伏見へ罷登リ庄内ノ様子ヲ惟新公へ中上候処被召留在伏見仕候同五年八月伏見ノ城攻之時敵數人射ル九月十五日関ヶ原合戦家來三人打死二人行衛シレヌ宗光ハ御側ヲ不相離御供家來藤崎後藤兵衛大市与市大堂三吉野元源二兵衛中間荒助草臥ニテ皆々中途ニ後レ候ニ付馬ヲモ乗捨歩立ニテ御供帰國御高御感狀拜領也元和二年三月十日卒五十七歳法名竹隱榮修居士墓ハ南林寺ニアリ其子長右衛門宗康光久公御抱守夫婦ニテ相勳ナリ「子孫帖佐彦左衛門」

一帖佐六七朝鮮ニテ虎狩之時左之股ヲ虎カミツキ木ノ根ニ押ネ、シリ居ル時六七左ノ手ニテ虎ノ肩ノ上ヲ取二刀三刀切付ル六七虎狩ノ三ツ目ニ死ス二十三歳也帖佐ヲ打立高麗へ出陣ノ時米山薬師へ參リ命アラハ又モ来テミン米山ノ薬師ノ堂ノ軒端アラスナ

一中馬大藏「市来人ナリ」天正六年於高城大友御合戦ノ時惟新公御供ニテ戦死一説九州御陣ノ時於根白坂討死トモイヘリ天正十五年也トモイヘリ其子

○中馬大藏允重方<sup>初興</sup>朝鮮関ヶ原御供御高五十石御感狀被下候天正八年十月十五日矢崎城攻之時十八歳ニテ比志島紀伊守手ニ相付敵二人打取惟新公御前へ被召出難有家御意<sup>朱</sup>同十二年佐敷ニ從軍同十三年八月十三日甲佐堅志田御責落ノ時敵三人打取同十五年正月廿六日惟新公ヨリ新納忠元江阿蘇ノ軍兵御加被成豊後下之城御責ノ時本田兵右衛門

後年高岡江被申合セ屏ヲ乘越城中へ進入候処白鉢巻シタル猛將敵敷致召移候モノ也下知防戦候ヲ中馬与八郎ト名乗掛候へハ下之城大膳ト名乗り數刻太刀打終ニ打勝大膳首并太刀鉢巻ヲ惟新公ノ御前ニ差出候へハ御賞美ニテ自今以後御膝元ヲ不離御奉公可仕由被仰問候テ御奉公仕居候市來へ罷居候時分市來地頭へ仕違ヒ知行屋敷被召揚多年之間親類附ニテ蒲生へ盤居イタシ居候時分毎年極月ニハ惟新公ヨリ御密々御米二俵ツ被下候天正十九年惟新公高麗江御渡海之節多年之御勘氣御免ニテ御供被仰付妻子為介抱御米三十石被下高麗へ罷渡候慶長三年十一月十八日南海番船破リ殊之外<sup>ケシキ</sup>勵敷戰ニテ与八郎事ハ川上掃部船ニ乘リ強弓押張り一人ニテ百矢台并心腹ノ矢程射尽候テ後ハ谷山衆市來衆ト与合番船ニ乘移リ余多ノ首ヲ取御両艘様懸御目御感悅被遊則亡父ノ名大藏ト改名被仰付候テ御先ニ掃部可仕旨御直ニ被仰付川上掃部船ヨリ帰國イタシ其以後忠恒ヨリ南郷淡路ヲ以御納殿役中馬左近同役相勳可申旨被仰付候得共大藏事軍務ニ付テハ如何様ニモ可奉畏候得共今更女中方ノ役人ハ罷成間敷旨御断申候得共大藏ニ成合候訴詔ニテ尤成申分ノ出ニテ御免被仰付候其以後慶長五年出水御拜領ノ節大藏事出水へ被

召移知行出水江被下候同年上方江弓筋相起リ惟新様御一大事ノ由御國江相聞得川上四郎兵衛殿只今米之津被罷通候由承長野勤左衛門申合則時打立米之津へ走付候得ハ四郎兵衛殿乘船最早出船ユヘ声ヲ揚相招候得共急之事故船取戻リ不申候ニ付不得已事九州路夜白罷通リ関ヶ原御合戦十四日以前ニ走付惟新様御感悅被遊大藏事ハ此事承付候ハ、則可參ト被思召上候処早々走付候段神妙ニ被思召候旨御意候九月十五日関ヶ原御合戦相亂伊勢路御心掛御退去之時御供仕候御馬印モ大藏ヨリ申上途中ニ相捨候テ漸ニ撰州住吉迄御引取被遊其間<sup>伊勢近江伊賀</sup>夜ハ野宿主從トモ無飯之事モ有之大藏事ハ夜毎ニ足輕ヲ召列御旅宿ヲ三度ツ、夜廻イタシ候様御直之上意ニテ相勳御歸國之上御高五十石御感狀拜領出水武主<sup>モスシ</sup>役并脇元御飯屋守相勳也大藏ハ大男ニテ人ヲ余多切候得共一世薄手モ不負出三州一ト申大力ニテ強弓之射手也寛永十二年十二月廿八日卒七十二歳貫翁道一居士出水西目村之内瀬々浦ニ墓アリ

後年高岡江被申合セ屏ヲ乘越城中へ進入候処白鉢巻シタル猛將敵敷致召移候モノ也下知防戦候ヲ中馬与八郎ト名乗掛候へハ下之城大膳ト名乗り數刻太刀打終ニ打勝大膳首并太刀鉢巻ヲ惟新公ノ御前ニ差出候へハ御賞美ニテ自今以後御膝元ヲ不離御奉公可仕由被仰問候テ御奉公仕居候市來へ罷居候時分市來地頭へ仕違ヒ知行屋敷被召揚多年之間親類附ニテ蒲生へ盤居イタシ居候時分毎年極月ニハ惟新公ヨリ御密々御米二俵ツ被下候天正十九年惟新公高麗江御渡海之節多年之御勘氣御免ニテ御供被仰付妻子為介抱御米三十石被下高麗へ罷渡候慶長三年十一月十八日南海番船破リ殊之外<sup>ケシキ</sup>勵敷戰ニテ与八郎事ハ川上掃部船ニ乘リ強弓押張り一人ニテ百矢台并心腹ノ矢程射尽候テ後ハ谷山衆市來衆ト与合番船ニ乘移リ余多ノ首ヲ取御両艘様懸御目御感悅被遊則亡父ノ名大藏ト改名被仰付候テ御先ニ掃部可仕旨御直ニ被仰付川上掃部船ヨリ帰國イタシ其以後忠恒ヨリ南郷淡路ヲ以御納殿役中馬左近同役相勳可申旨被仰付候得共大藏事軍務ニ付テハ如何様ニモ可奉畏候得共今更女中方ノ役人ハ罷成間敷旨御断申候得共大藏ニ成合候訴詔ニテ尤成申分ノ出ニテ御免被仰付候其以後慶長五年出水御拜領ノ節大藏事出水へ被召移知行出水江被下候同年上方江弓筋相起リ惟新様御一大事ノ由御國江相聞得川上四郎兵衛殿只今米之津被罷通候由承長野勤左衛門申合則時打立米之津へ走付候得ハ四郎兵衛殿乘船最早出船ユヘ声ヲ揚相招候得共急之事故船取戻リ不申候ニ付不得已事九州路夜白罷通リ関ヶ原御合戦十四日以前ニ走付惟新様御感悅被遊大藏事ハ此事承付候ハ、則可參ト被思召上候処早々走付候段神妙ニ被思召候旨御意候九月十五日関ヶ原御合戦相亂伊勢路御心掛御退去之時御供仕候御馬印モ大藏ヨリ申上途中ニ相捨候テ漸ニ撰州住吉迄御引取被遊其間<sup>伊勢近江伊賀</sup>夜ハ野宿主從トモ無飯之事モ有之大藏事ハ夜毎ニ足輕ヲ召列御旅宿ヲ三度ツ、夜廻イタシ候様御直之上意ニテ相勳御歸國之上御高五十石御感狀拜領出水武主<sup>モスシ</sup>役并脇元御飯屋守相勳也大藏ハ大男ニテ人ヲ余多切候得共一世薄手モ不負出三州一ト申大力ニテ強弓之射手也寛永十二年十二月廿八日卒七十二歳貫翁道一居士出水西目村之内瀬々浦ニ墓アリ

其子兵部左衛門重辰ト云

一調所佐二郎武金書ヲ能ス慶長十三年六月 慈眼公心岳寺ニテ御連歌ノ節執筆トナル

一知覽四郎左衛門天文七年十二月廿九日加世田城戦死

遠之部

一上井筑前守大神為秋子孫 諷訪甚六 貞一男諷訪五郎教実一男入五郎弘民八代之孫次郎左衛門兼春之嫡子也何某代御當頭へ罷下 貴久公御代本田追討之忠候儀不相知隅州上井ニ居住ス迎田七人之内ナリ

賞トシテ天文「十」七年戊申下井二十五町被宛行下井上井致領地候

○上井武藏守兼兼入道安齊ハ為秋嫡子ナリ天文廿二年五 貴久公ヨリ薩州永吉郷拜領永吉ニ居住ス

○上井伊勢守竟兼 初神左衛門為兼ト云異本 二入道休安トモ見得タリ ○兼兼嫡子也天文四年二月十

二日生ル母ハ肝付越前守兼固女天文元年申次役被仰付候 二年十一月十二口種子島筒手火筒拜領 同四年御老中役被仰付候間万事不行届畢 竟御上之御為ニ罷成間敷ト度々御託被申上候得共 義久公無御許容相

動候同年八月 義久公高原御出陣御供十九日諸軍ト高原城門ヲ攻破リ 軍旁同六年九月上旬右馬頭征久大将ニテ日州石之城攻之時竟兼副將ニテ出陣也數日攻圍ミ城中糧尽降ヲ乞下城ス同年十月大友氏ト日州新納

院高城城下御合戦ニモ御供イタシ候同八年日州之押ヘトシテ 宮崎地頭職被仰付海江田八十町ヲ賜ヒ 永吉ヨリ宮崎之城へ被召移候 此時

父兼兼モ志和洲城ニ從居ル 同九年八月從テ水俣城ヲ攻ム十年十一月四日宮崎ヲ出十一日肥後八代ニ至リ 松齡公ニ謁ス十一年正月十二

日八代ヲ出德洲ヨリ舟ニテ米津ヲ過ギ十五日廳府ニ至リ十九日廳府ヲ出廿一日宮崎ニ歸ル 是年 義久公御病氣ニ付御願トシテ日州法

華獄寺ニ一七日參籠成就之口 二月四日ヨリ十日マテ

トキシモアレ光普キ法ノ場ニシツ心アル花ノカケカナ

三月廳府ニ至リ晦日廳府ヲ出四月八日宮崎ニカヘル 同十二年三月

中務家久高木鳥原へ渡海 義久公肥後佐敷迄御出馬竟兼御供同廿七日

童造寺隆信首於佐敷御実験竟兼等隨居 四月朔口伊集院忠棟等ト鳥原ニ至ル 同年八月廿九日 忠平公飯野ヨリ肥後國へ御出馬竟兼宮

崎ヨリ罷立九月四日八代ニ着 八日 忠長忠棟竟兼連判ニテ耕作乱妨

井喧嘩口論停止之高札ヲ肥後國ニ立ル 十日熊本ニ至リ十三日吉松ニ

移軍ス廿三日俱ニ進テ高瀬ニ入ル是日肥後平定十月廿一日高瀬ヨリ舟

ニテ衰浦ニ至リ廿二日又舟ニテ德洲ニ至リ廿六日舟ニテ水俣ニ至リ

廿七日水俣ヲ打立廿九日宮崎江歸着同十三年閏八月日州諸軍肥後へ可

致出張旨御下知ニ付 廿二日竟兼鎌田源左衛門栢原周防介ヲシテ兵ヲ

卒テ先八代ニ至ラシム閏八月六日竟兼 宮崎ヲ発シ十日八代へ着 是日

又諸軍ト小川ニ至リ夜豊福ニ宿ス 隈莊甲佐堅志田萩之尾其外諸所攻

落シ三舟ヲ打立十月廿日宮崎江掃郷是年羽柴衆下向之由世上申散候ニ

付一所衆諸地頭起請文進上被成候テ可然旨此度於鹿兒島御談合定候間

十月廿四日此段所々へ申渡候竟兼モ神文相調候テ致進上候其条書之趣

一羽柴衆就下向之儀御家本中運計策之中風聞候不可致与同其党事

一右之衆令下向可及御防戦之刻緩当病出合雖難成歩行私宅ニ罷居間

敷事

一愚拙身上於有聞召掠条ハ速被仰聴愚意亦可申被事

以上

同十四年七月九日宮崎ヲ立十三口佐敷へ着 八代ニ至ル此時 岩屋宝

満江軍衆被指向 故二十八日夜竟兼舟ニ乘リ翌日高瀬ニ至リ廿二口岩

屋ニ至ル 同廿七日 寅時 岩屋城ヲ囲ム竟兼手一番ニ岩屋城へ押寄

セ屏涯江附候衆石打ニ逢ヒ候竟兼モ石打ニアヒ鉄炮被ヲ受ル寄手石打

ニアフモノ多シ山田有信二番ニ屏涯ニ付是モ石打ニアヒ手負多シ清武

衆海江田衆戦死手負アリ同廿九日衆中者悉手負ニテ他國衆見廻ノ取

次等モ差支候ニ付御殿中上候テ岩屋ヲ出立八月四日八代江掃陣同五

日 武庫公竟兼宿江御光儀ニテ臥床近ク被成御座暫ク紙ノ鉢トモ上覽

被遊候左候テ宮崎奈古八幡并但生野八幡御祭礼ニ付御殿申上九月十日

八代出立十四日宮崎江掃着同年十月十五日宮崎ヲ打立家久ニ相付豊後國ニ出陣梓山ヲ越三重ニ打入緒方城ヲ攻落シ利滿城ヲ取囲ミ十二月十二日於利滿城下覺兼軍旁同十五年「正月」猶豊後ニ在陣三月羽柴衆九州下向故諸軍掃陣也是年日州悉ク被召上ユヘ覺兼宮崎ヲ去テ鹿兒島ニ參リ伊集院地頭職被仰付伊集院ヘ罷移候此時 義久公ヨリ御書ヲ被下候ハ日州江移居候以來致忠節之儀御忘却無之候然如當分伊集院ヘ在宅難儀之躰致推量候随分領地方之儀モ御心ニ可被添由也同十七年六月十二日於伊集院病死享年四十五法名一超宗咄庵主墓ハ妙円寺ニ右之

覺兼日記 天正二年八月ヨリ 同十四年十月マテ

○上井治部少輔經兼 初基六當代 八覺兼嫡子也天正十年四月朔日生母敷根備中守頼賀女文祿四年十四歳ニテ朝鮮ヘ渡海慶長三年ノ冬 武庫公御父子御歸朝ノ御供ニテ直ニ伏見ニ罷登リ御奉公其後 慈眼公犬追物御願行候節射手ナリ 同十五年比志島國貞ヲ以 家久江奉願御免ノ上信州高島之諏訪因幡守頼滿殿江參上同姓ノ故ヲ以可稱諏方氏旨免許ヲ請改上井諏訪氏ヲ名乗ル寛永九年中七月廿七日病死年五十一超岩明越居士一家臣谷山兵八殉死 元和初年高帳 千二十八石

一上井次郎左衛門秀秋入道伝齊 子孫 諏訪市右衛門 筑前守為秋之弟三河守親秋之養子也実ハ武藏守兼兼之二男ニテ覺兼之弟也 惟新公御家老役マテ相勤飯野江罷在 一元龜三年木崎原ノ役功アリ因テ馬関田地頭トナル天正十年十一月肥後八代ニ赴ク十四年七月岩屋城攻ノ時秀秋ハ八代ニアリ後小林綾等ノ地頭ニ移ル遂ニ卒ス 小林馬関田綾等之地頭木崎原御合戦ニ軍功アリ於綾病死

○上井次郎左衛門里兼 初神五郎 秀秋子永祿九年誕生天正十八年二月十五歳ニテ 惟新公御家老小林地頭朝鮮御供ニテ慶長三年泗川御勝利之注進御使ニテ掃朝直ニ伏見ヘ罷登其後琉球御檢地之時渡海勤功アリ同十八年 武庫様御女子為質人江戸御出府之御供ニテ在江戸八年御褒美トシテ高二百石拜領也寛永八年未六月四日於帖佐中津野村病死六十六歳中津

野村飯屋園富ノ中ニ墓有一法号梅北了香居士 上井東市正兼道ハ里兼之嫡子ナリ天正十六年誕生御使役相勤田布施地頭職 元和七年八月高帳上井西市正千二百二十二石六斗 寛永七年於江戸病死四十三歳ナリ兼道ヨリ三代采女兼延代承応元年四月廿九日 諏訪因幡守殿免許ヲ受諏訪氏ヲ名乗ル兼道子采女御使役王子原犬追物射手

一上井仲五兼政 次郎左衛門秀秋二男 子孫 諏訪市右衛門 元龜二年生小林地頭朝鮮江毛渡海慶長四年九月十日於庄内野々美谷戦死二十九歳ナリ 泗川合戦紅白雉系威鎧着用 其子仲右衛門兼安代諏訪名字改ルユヘスノ部ニ記ス

一上井右衛門兼成 筑前守為秋二男 子孫 上井五郎左衛門 伊勢守覺兼日州宮崎警固之節被召付置諸所軍功アリ

一上井六郎左衛門慶長年中公女ニ從テ江戸ニ至ル 一上井式部左衛門慶長五年始テ高岡外城ニ成ルノ時命アツテ徒り居ル 一大寺大炊介ハ 忠国公御家老大寺彦左衛門忠幸入道幸朝ノ後胤也 貴久公御代諸所地頭永祿四年忠將一所ニ於廻戦死石塔坂中ニ有之其子大炊介日州野地頭 天正三年十月廿三日犬追物呼次十一年十月八代在陣 天正十三年九月肥後八代ニ在陣筑後堀切ヨリ新納右衛門佐等書簡ヲ八代江差遣候御返書ニ大炊介ト書認被差遣候同十四年七月岩屋城攻之時上井覺兼江相付取添口之坂ニテ石打ニアヒ手負候同十五年於豊後

梓山越 武庫公江御暇申上候テ戦死ナリ其子主計政安 天正十八年閏八月保公江御書ノ内大寺大炊介アリ政安幸願寛永九年御入致職政安子彦左衛門共ニ山口地頭人數十九人馬一疋鉄炮一弓一槍 永年問高奉行 子孫 大寺弥五右衛門ナリ

豊後戦死大炊介弟ヲ大寺刑部ト云ナリ於馬越戦死 子孫 大寺弥兵衛ナリ 一大寺大寺左衛門天文二十三年帖佐原戦死九月晦日ナリ



一 大野駿河守忠宗 三郎次郎 子孫 治部大輔 大野外記 薩州家二代国久三男駿河守資久号

大野 加世田山田 二居在ス 「天文七年三月六日卒年七十法号節依忠公」二代駿河

守忠倍 三郎次郎 於中郷松 島殺死 三代三郎次郎忠友 弟也 四代駿河守忠基 弟也 五代忠宗

也代々川辺山田ヲ致知行 高二千二百 九十七石 加世田地頭永祿十二年五月六日戸

神ケ尾伏兵ノ時二番伏草宮原筑前 成云祖父忠倍 也時代相当ス 兩人為大將稻荷山ニ伏

テ敵余多打取ナリ 天正三年十月廿日 犬追物射手五疋イル翌日又六疋

イル 天正四年高原御陣ニ御供同十三年 武庫公御供ニテ肥後三舟在

陣同十五年 竜伯公初テ御上洛ノ御供天正十九年四月廿七日於川辺堂

尾被誅川辺室極門前市之瀬トイフ処ニ觀音堂アリ 忠宗被誅シ地ナリ被誅誤追テ可紀ナリ

○大野七郎忠高ハ忠宗智養子ナリ 忠宗被誅候テ家及斷絶候処忠宗娘ノ働 忠宗

被誅候御寺領イタシ候処朝鮮御渡海ノ時被召出養子違變ニテ榊山権左

エ門ト致改名御家老被仰付彼地ニ罷渡候戰功等之儀ハ加ノ部ニ相記ス

〔資久〕  
忠悟  
忠康 右エ門大夫  
忠郷

三郎五郎吉松戰死

一 大野正右衛門久武 三郎 子孫 左近將監 大野源之盛 大野家元祖資久二男右衛門忠康

〔其子正右エ門久重 三郎 兼日記ニ天正十年大野左近將監アリ又十六年

御上洛御供ノ中左近將監アリ久重ナルヘシ久重ノ子久武ナリ〕子孫也

東郷重位ノ門人ニテ示現流相伝ノ人也十九歳ニテ関ヶ原御退去ノ時騎

馬物頭武騎人数余多召列追掛候時久武一防可仕候間其間ニ各御供被成

一先御退去被遊候得ト申走歸リ藪ノ内ニ忍ヒ真先ニ參候武者ヲ鉄炮ニ

テ馬ヨリ打落候ヘハ敵騒動イタシ敗北候間懸テ御跡ヨリ奉追付候也

神戸五兵衛覚書ニハ関ヶ原ニテ騎馬追掛候ヲ弥三郎ニ彼武者可打ト

ノ御意ニテ四刃ノ御持筒猪之毛ヤスリノスリタルヲ被下則右御鉄炮ニ

テ進ミ出敵二三騎打落候ト有之

右御褒美トシテ百石之御感状ヲ被下候 天正十九年六月綾地頭トナル寛永

九年御人数賦騎馬二人士二十九人鉄炮二弓一槍一正保三年 額島地頭

ニテ正保四年 天正十月十三日 於彼島卒ス六十六歳ナリ墓ハ妙円寺ニ有

之 法号孝山良忠居士

一 大島出羽守忠泰 初高城主馬ヲ重員中比島津 出羽守後大島休左エ門 太守久豊公四男出羽守有久

莊内梅北ヲ領ス長祿三年卯七月三日於日州三俣北山戰死 三十七 歳ナリ 其子出

羽守忠福文明十六年十二月於日州鉄肥逆谷戰死其子出羽守忠明明應八

年相良菱刈押被仰付大口城ニ罷移享祿三年七月廿七日致落城自殺ス 原

八幡宮ト 崇ルナリ 其子次郎四郎明久享祿二年九月三日於大口大島村戰死十六歳

其養子忠泰也実ハ高城備前守重誠 其後備前守重誠 初テ高城其子重誠ナリ 嫡子ニ

テ付ハ大島出羽守忠明ノ娘也 其後備前守重誠 初テ高城其子重誠ナリ 嫡子ニ

宗之出家ニ成成年京師江罷在候処忠明父子打死世嗣無之候ニ付 義久

公上意ヲ以還俗明久跡相統被仰付羽月大島村ニテ新地三百石并馬越山

野等之地頭被仰付也肥後并豊後人御供高麗ヘモ馬越ヨリ出陣酒川合戰

ノ時欠倉一間狭間ニケ所御預ケ也依之父子トモニ敵軍ニ打入粉骨之事

朝鮮陣始終日記有之御帰朝以後ナリ御名字ヲ避大島休左衛門ト改名ス

於馬越平ス長寿寺殿空觀蓮騎馬越長寿寺ニ慕アリ

立居ルモ仏ノ道ヲ忘レスハ西ノ御国モ遠カラヌヤハ 忠泰

高麗出船之時風ニ放サレ長州三島ニ着ケルニ八幡ノ社アリケレハ 忠泰

誰カ里モ恵ミノ深キ八幡ナル神ノチカヒヲ頼マヌソナキ 忠泰

高麗渡海之時新納忠元ヨリ和歌ヲ送ラレシ返シ 忠泰

カリ初ノ別ナカラモ年月ヲヘタテヌト思フ名残カナシモ 忠泰

同シ時馬越ヲ立ケル時人和歌ヲ送リシ返シ 忠泰

モロコシニ行身ハ我ニ限ラヌヲイタクナ佗ソ今帰リコン

更衣 故郷ノ花ニ馴ニシ移香ノ衣ヲカヘン事ソカナシキ 同人

卯花 月カケニ卯ノ花咲ル折ヲ得テナト鳴出シ山ホト、キス 同人

此外和歌多シ ○大島久左衛門忠盈ハ忠泰養子実ハ忠明弟播摩守忠経曾孫ナリ 光久公

御代伊勢貞昌ヲ以先祖打続キ御奉公ニ戰死之一筋ヲ以 御先祖様方ヨ

リ神ニ御崇メ御取持為被仰付置事御奉公ニ付小身為罷成筋目候故御知

行干石被下家御取建可被下旨御証書頂戴イタシ居事 薩州家元祖用久二男

一大田周防介忠与 初島津四郎 子孫 大田五郎左エ門 其子中

下野守延久「入道為足」 川辺 其子下野守昌久入道政雅 帖佐地頭 其子中

務大輔忠成入道増參 於川辺 無子ユヘ弟周防守忠統入道大関 母ハ伊作又四

其子忠与也天文七年生阿多上大田門 山津野村 致所領阿多地頭也永禄元

年十月廿七日 義久公以御意御名字ヲ避大田氏ニ相改也 天正三年十

月廿一日犬追物射手九足イル 天正七年「八月七日」卒ス 年三十二

法号澄岸銀清居士 大田吉兵衛忠綱 初忠好四郎三郎 忠与子也元龜元年四月廿六日生母ハ吉

候二十二歳ナリ其後吉田美作清孝養子ニ相成治部左衛門清久ト申ナリ

一大田筑前守忠秀ハ大田家元祖延久二男山城守忠聖入道安心ノ子筑前守

忠光子也忠秀事御料人様江被召附大坂城中へ罷居候処聞ケ原御合戦以

後御料人様ハ落ニ御城ヲ御忍出可被遊之条忠秀嫡女於松事 伝女子御料

人様御名代トシテ御屋敷ニ相残り忠秀并吉田美作相良日向其外歴々御

跡ニ四日被罷居候テ罷下管候得共不及其儀於松前イツレモ御供ニテ

罷下候乍然初御跡ニ三日罷居候事御意次第ト申上候為忠節御知行二百

四十石被下候由元和初年鹿兒島高帳三百石筑前守跡断絶トアリ

一而高宥泉坊英俊 了孫運長院当 上世不詳代々山伏ニテ市来辺ニ居住之由

諸家次次肥前之内ニ面高ト 永禄四年辛酉 貴久公御名代トシテ子頼俊

云ヘル在名アリト見ヘタリ 日發足 同六年帰国下向之御京都八幡之御正躰三ツ

ト相州鶴岡へ致參詣二月十日同六年帰国下向之御京都八幡之御正躰三ツ

相調頼俊背負罷下リ鹿兒島清水八幡ニテ候 面高真蓮坊頼俊ハ英俊之子也永禄九年十月十五日日州小林城攻之時軍

勞アリ 公方義昭公へ御使者トシテ罷上リ御目見仕御太刀御馬拜領

「後織田信長使者返礼トシテ罷上ル」其外諸国へ御使者相勤也於諸所

山口殿ナトへ罷出首尾能御和談相濟別テ苦勞ニ被思召候爲御感右之御  
高百石拜領被仰付候段張紙ニ書記有之也

日州兩院先達職之事件先親令宛行者也

但御一所衆之儀ハ可被致用捨之状如件

天正八年慶辰十二月七日

上井伊勢守 菅兼判  
伊集院右衛門大夫忠棟判

○面高真蓮坊俊昌 初蓮長坊 善哉坊 頼俊子也当代鹿兒島へ被召移新地三百石被下

候文祿二年 忠恒公御供ニテ朝鮮へ渡海御供日記有之 元和六年高嶺中  
原真蓮坊アリ同

一面高祐泉坊ハ 二男 頼俊 兄俊昌鹿兒島へ被召移祐泉ニ加増百石被下善哉坊住

職也 或人云祐泉ハ俊昌之二男ナリ俊昌鹿兒島へ被召移ユヘ弟主馬當寺職之  
管候如依誤出水へ被召移候ニ付俊昌二男祐泉ハ仕職被仰付候トナリ

一面高主馬 善哉坊 頼俊 二男 家久公以御意還俗御兵具奉行數年相勤居

山田有栄出水移地頭被仰付候節主馬事御高五十石拜領民部へ被召付出水へ被召移候其嫡子主馬寛文年間長島へ一向宗之モノ有之山田主計木脇刑部左衛門并主馬長島へ被差越首尾能相治候爲御褒美御高三十石拜領被仰付候事

一上床八郎三郎阿多上床へ罷在 日新公江御奉公天文七年十二月廿九日

於加世田間之瀬川戰死 其子助六左衛門尉因成 大中公へ御奉公 忠平公御供ニテ妻子召列飯野へ罷移永祿九年十月廿六日三ツ山城攻水之手ニテ 忠平公御手負之時致力戰打死年四十二 其子藤右衛門國寄入

道宗田代江田氏ニ相改也十八歳之時御兵具奉行天正十八年 久保公小田原御陣十六騎之内ナリ 一文祿四年十二月廿一日 惟新公御上洛御供

又一高麗へモ騎馬御供御歸朝ニ付直ニ伏見へ相詰居候処嫡子國隆於庄内戰死ニ付御暇被下 後納戸役 慶長十八年御下様爲御証人 御屋地様御代リナリ

御上洛之時奥方惣差引人 頼分ト被仰付罷上り候 曾木五兵衛ト兩人役  
人相勤候トモイヘリ

其子吉右エ門國隆 初五郎兵衛 江田名字ニ改 忠恒公御供ニテ朝鮮渡海慶長二年八月

十五夜南原城攻之時安藤權右エ門相共ニ致城乘深手負時ニ二十七歳也同三年十月朔日泗川城へ大明人六十万押寄候時國隆初太刀ニテ一番

首ヲ取 國隆明軍ニ寄ヨリ忍入木明ニ一番首ヲ取其外ニ今一人先陣ヲ争フ人アリ  
不分明候処 惟新公矢倉ヨリ御覽シ置候間 御意ニハ一番ニハ箭ノ羽織

着タルモノト御意國隆石タ、ミノ具足羽織ヲ致着候ヲ遠目ニ筋ノ様ニ御覽ノ山

今一人ハ羽織ヲ着ストノ御意故國隆一番ニ相突候由泗川初首ノ時具足ノ羽計着

用御屏風ニ紺糸威ノ鎧ニイロトリアリ廿九日外 十一月十八日番船破候時樺

野伏ニ出赤飯糰ツトニ入取寄セ侍掛候ト有之

山久高同船ニテ軍勞朝鮮御歸朝以後慶長四年庄内御陣ニ罷立六月廿三日山田之城ニテ戰死二十九歳 異本廿九日 其子吉右衛門初助六後 高二百石  
山之口打死 江田氏

ニテ加治木へ罷在 家久公御代加治木兵具奉行相勤其後忠期へ騎馬十騎ノ内ニテ御預相成役人相勤候 子孫加治木ノ  
江田名字ナリ

一上床新助 公子歳久ニ殉死二十七人ノ内也法号心安春波禪定門

一押川讚岐守橋氏也永祿七年 忠平公御供ニテ飯野へ罷移六十人之内ナリ其子押川对馬守球麻境御番トシテ大口へ被召移九人之内也其嫡子河

内守トイヘルナリ二男ハ強兵衛公近ナリ (此ノ間闕文アラン) 強兵衛

家来共ハ久保彦八物馴タル人故囃取ニ遠ク連行居タル由ナリ強兵衛ヨリ右之首ヲ忠元ノ目ニ掛候得ハ若輩ニテ大事之科人首尾能打留候ト被及落涙候ヨシ其時公近二十二歳ナリ高麗へモ御供ニテ罷渡リ加徳島

ニテ番船取合之時赤崎丹後ト兩人山田有栄之船ニ乗アヒ相勤候テ手負

イタシ候ホンテン御在陣之時御鷹ノ飼鳥打ニ出居候処加藤主計頭殿陣

中ヨリ刀ノ拔身ヲ持タルモノ走出跡ヨリ五六人追掛其科人ヲ打果可給

由申掛候得ハ右科人公近ニ切掛候ヲ鉄炮ニテサ、候テ脇指ニテ打果候得ハ加藤家ヨリ此御方様へ而使ヲ以御礼被仰入公近江ハ御小袖并皮

道服ヲ被下候其後又御鷹之飼鳥打ニ出テ白鷺ヲ射候処木之枝ニカ、リ

不落ユへ鉄炮ヲ腰ニサシ木ニ登リ候処高麗人十五六人来候テ木ノ下ヨリ半弓ニテ散々ニ射掛候ニ付木ノ上ヨリ鉄炮ニテ一兩人射殺シ候へハ

ミナノ逃去候トナリ慶長三年九月廿八日古館ノ相良玄蕃ナト戰死ノ

時鳥丸六右衛門鉄炮ニテ敵一人被射落候ヲ公近敵ノ中ニ切入首ヲ取候

テ 御兩殿様懸御目候へハ無比類手柄ノ段御褒美アリ十月朔日泗川城

江大明人数十方押寄候節 御意ヲ蒙リ物見ニ敵陣江被遣候川上休右衛門殿ヨリ鉄炮ハ無用之由承リ脇指計ニテ一里程罷出敵ノ様子ヲ見切罷歸リ其日ノ合戦ニ敵數多打取候同十一月十八日南海瀬戸ニテ番船取合ノ節公近大山三次同前赤幕ノ関船ニ乘リ敵艦中へ押入鉄炮取合ノ働別テ目立候出其節公近モ手負ニケ所候朝鮮御歸朝後在伏見候処先年久保公ヨリ上方ノ堂社へ御札ヲ被納置候子細有之御札ノ故 惟新様御意ニテ公近致廻國ヒソカニ右ノ御札ヲハギ申候テ御満足被遊候由也慶長五年八月朔日伏見城攻ノ節 御意ニテ浜田主水兩人城中ニ忍入敵ノ様子見切候テ委細言上仕候夫ヨリ大垣へ出陣 惟新公ヨリ御具足押領被仰付赤坂へ到着ノ節公近物見被仰付差越敵ノ様子ヲ見切走歸り申上候ハ敵遠路ニ草臥具足ヲ枕ニテ臥居ル躰ニ御座候間此夜夜打被遊候ハ、必定御利運ト申上候ニ付 惟新公ニモ御納得ニテ候得共石田殿同意無之由其後モ御意ニテ江渡川 洲之候川中洲トモイヘリ 迄差越敵ノ様子ヲ相伺候処敵ヲ見掛大川ノ底ヲ泳渡り敵一騎馬上ヨリ引落シ首ヲ取大垣へ走歸り惟新公掛御目翌朝石田御出ニ付公近ヲ被掛御目候へハ大垣ノ太刀初ト被仰大判金一枚為御悅被下候九月十五日ノ関カ原ニテハ 公御行衝ヲ奉見失方々奉尋候処敵鍵ニテ突掛候ヲ刀ニテ切払ヒ詰掛組伏セ二刀刺候得共敵立上リ公近甲ヲ切割候得共又々組伏セ首ヲ取候然処島津新八殿ヲ初二百余人伊吹山ニ入候処兵糧無之公近ト浜田主水兩人郷ニ下リ智略ヲ以弼ヲ相調へ伊吹山へ持上り右人数江進セ夫ヨリ思々ニ落行候処公近ハ能瀬早左衛門殿手へ被生捕候其時押領之御感状三通裂捨候右田殿ヨリ給候黄金ハ泥之中江路隱置候既ニ成敗可有之由候処山口勘兵衛殿ヨリ所望ニテ不慮ニ存命イタシ則搦縄ヲ解キ刀大小衣類等山口殿ヨリ被下候其後丸腰ニテ山口殿所ヲ忍ヒ出隠置候黄金ヲ取上方へ罷登候処勞入候ニ付道傍ノ堂へ臥居候ガ罅ノ音ニ目力覺見候へハ大脇指ニ袴着タル男仏前ニ拜居候間飛掛リ其脇指ヲ奪ヒ取首打落シ其刀ヲ指直ニ京都へ参リ近衛様御屋敷へ罷出候左候テ帰國後 惟新公御供ニテ被罷下候衆同前ニ公近ニモ御高五十石押領被仰付候其以後強兵衛ト名押領被仰付 慶長六年浦生ニ被召移候ト古考物語ニアリ 左候テ三虛空藏参リト御名付島津中

務殿御行衛又ハ諸國ノ物沙汰為御聞合公近并飯野ノ成就軒へ被仰付願礼ニ出諸國ヲ致廻歷三ヶ年目罷下候其以後川内高城表 惟新公 在知行 代官役 被仰付相動候慶長十五年六月十九日於入來郡山境土瀬戸以御意桐野九郎左衛門致同道平田太郎左衛門増宗ヲ鉄炮ニテ賊殺イタシ首尾好御奉公相動候為御褒美公近江御高三十六石押領仕候一ヶ年致取納翌年差上候桐野へハ銀子被下候公近事 惟新公江二世之御供御約束申上置候処家久公ヨリ被召仕度被思召上土持平右衛門ヲ以 惟新公江御所望被遊 惟新公ヨリ比志島紀伊守殿ヲ以二世之御供之儀ハ相留 家久公江御奉公可仕旨被仰付寔ニ難有御意ニ隨ヒ則御受申上慶長十九年鹿兒島江被召移御番トシテ御城内江被召置御高五十石可被下段被仰出候得共御断申上候於加治木ハ中御丸御番被仰付切米二十石被下置候公近事慶長六年大口ヨリ浦生城内へ被召移同十一年平松同十三年加治木夫ヨリ鹿兒島へ被召移候テ種物出来相煩候時 家久公御見廻被遊候テ御洒拝領仕リ左候テ向日イタシ死去時ニ寛永六年四月廿九日法名勝山良忠居士五十九歳也差ハ大徳寺ニアリ公近一世ノ中人ヲ殺害スル事百六十人余トイヘリ 子孫公近之ヲ押川市之近高トイヘル也 或書曰關カ原前大垣ニテ敵之氣指ヲ遠物見可仕旨公近へ被仰付ヤカテ走歸り申上候ハ敵ハ如雲霞野山充滿イタシ人馬之足不分明旨申上候へハ扱ハ石田ハ負タルベシトノ御意ニテ總テ夜ノ中關カ原へ御陣替之由調カ原ニテ小返シノ五本鍵トイヘル一人ナリトソ 一押川治右衛門則義ハ穆佐之土也慶長七年伊集院源次郎忠貞御成敗之節穆佐地頭川田大膳須木地頭村尾松清へ被仰付候ニ付大膳ヨリ則義へ被中付候故岡原七左エ門案内者ニテ源次郎朝呼ニ出候中途ニ致伏草罷居候処鴨毛馬ニ乘リ候モノヲ源次郎殿ニテ候ト申候ニ付則義則鉄炮ニテ打落シ候処平田太郎左衛門増宗之嫡子平田新四郎宗次ニテ候源次郎ト馬ヲ乘替居候ユへ為見誤由也源次郎ハ其跡ヨリ參候ヲ大膳松清之手ニテ打留候則義儀ハ右通人違イタシ候ニ付致切腹相果候檢者平田大久坊ナリトソ

「一押川喜左衛門 慈眼公ニ加治木ニ事ヲ納殿役ナリ」

一 大山織部佐經綱 系圖三平七鮮綱トモアリ○大山筑右エ門家伝ニハ佐々木三郎左エ門盛綱後贈二河守行綱 忠久公御供ニテ體下リ七代ノ孫

主馬佐綱行兇方水大山ニ居住号大山トアリ 其先ハ佐々木高綱一子出雲守

光綱其子」乃白五郎行綱「佐々木隱岐守義清ノ義子ナリ」初テ薩州へ下

リ四代ノ孫和泉守乘綱日州白糸莊ニ居住イタシ 久經公御代隅州之内

西侯ヲ被下候テ五代之孫源兵衛尉友綱西侯落城イタシ顯姓之内大山村

ニ致居住号大山其子ハ雅葉頭元綱 於野々美 其孫掃部助綱次 於吉田城 打死 九代

之孫鮮綱ナリ經綱トモイヘリ「永正十一年生大山村三十町領地加世田

ニ居ル」 大中公ニ奉仕天文廿三年九月晦日岩城下星原ニ戦死

一 大山稻介幸綱 初「小太郎又新藤」後佐々木氏ニ相成本名 之段申上依命改名ナリヲ孫佐々木小太郎 大山織部經綱之男

大山金藤次綱実嫡子也」永禄十一年生母村上式部少姉」 惟新公江被

召仕科人ヲ御打セ候時稻カラニ蹈カ、リ倒候ヲ新藤打果候其時稻介ト

名ヲ被下由一世髪ヲ茶セン髪ニ結候儀ハ御感状被下候儀ト中替候由

一天正十八年久保公小田原御供」文禄一元」年中高麗へ御供御兵具奉

行被仰付本田隼人ニ役儀相渡候由其身書付直候得共今ノ兵具トハ相

替成程カロキ事ニ御座候 御父子様金化城へ被成御座候御 久保公金

化山中御狩之節虎走出馳廻リ 久保公御鉄炮ニテ御ネラヒ被遊候時危

候ニ付新藤御前ニ畏リ私ノ肩ヨリ御放被遊候得ト申上候得ハ則肩ニ御

鉄炮ヲ御ノセ候テ虎ノ頭ヲ御打被遊候ハ勿大田吉兵衛忠綱走掛リ虎ヲ

切殺候由慶長三年番船破之時深手ニテ海ニ落入浮居候ヲ味方ノ船ニ

引乗セ候由元和初年鹿兒島高帳九十三石稻介トアリ「寛永十二年六月

廿一日」 卒年六十八法号月山常心居士墓ハ陸盛院ニアリ子勤右エ門実綱初新藤」

支候ニ付綱宗歩者ト三尺八寸ノ太刀ヲ打振路ノ脇ヨリ野原ヲ横ニ敵ノ

後ニ走通り敵數十人打殺候処太刀折候ニ付添指「一尺八寸」ニテ又敵

十人打果候此時兇ヲ不着候ニ付頭ニ淺手負候然ル処味方三次打スナト

テ大勢相掛數百人打取候也此時三次二十五歳也同年十一月十八日南海

番船破ノ時綱宗押川公近黒田宅右衛門三人一艘ノ船ニ乘リ相働候時金

扇ノ御船纏ヲ敵奪取候ヲ宅右衛門敵船ニ飛乘リ取返シ候也御帰朝以後

「慶長五年」在京之処スリ切ヲ仕候様風聞有之何トナク被召下候其身

ニモ無心元存居候処大坂川口ニテ順風相待居候内綱宗昼寝ヲ致居候処

船ノ矢倉ヨリ水主ノモノ怪我ニテ落掛候ヲ綱宗心ニハ我ヲ取手ト心得

右ノ水主共ニ余多切付候依之其身ヨリモ切腹可仕ト申上御上ヨリモ其

通被仰付正月五日有馬藤七兵衛大井三右衛門揆使ニテ於大坂切腹「年

二十七」法名勇悍誠忠居士 豐盛院遊去帳ニハ慶長五年曆月廿二日トアリ又 有馬藤七兵衛純房宿元伏ニハ正月五日トアリ久保之英見開秘記ニハ慶長五年子

八月廿二日於大坂切腹トアリ

一 鬼塚助八トイヘルハ宮路紀伊介ト兄弟ノ契約イタシ木崎原御合戦 忠

平公御必死之時兩人敵軍江切入無比類相働戦死ス其子主税介天正十四

年豊後入御供同年之冬十一月十一日ヨリ平佐城御普請ニツキ宮路三之

丞ト兵飛渡方役人被仰付慶長四年朝鮮渡海其後朝鮮御軍忠ニ付出水五

万石御拝領ノ時福崎主水兩人出水江被差越御糸書広メ方イタシ何レモ

難有御受申上候寛永十年持留ノ知行ノ儘又八郎忠朝へ被召付候此子孫

加治木之鬼塚氏也

一 鬼塚對馬 松齡公ニ飯野ニ奉仕  
一 鬼塚兵部左衛門助八弟ナリ天正十四年野津ニ戦死  
一 鬼塚吉内左エ門天文二十三年岩廻御供九月十六日黒木兵衛ト城中ヲ忍ヒ見敵ニ出合浜塚山ニ戦死  
一 鬼塚三藏 久保公ニ殉死法号即伝慎空禪定門」  
一 小川中務大輔日奉有季一初又八」日野宰相家頼之後胤 日野家振武威顯ニル地ニ生スルユヘ小川川太郎季能承久之兵乱ニ関東方ニ属シ甲斐宰相範川ト号スルナルベシ

頼ヲ打取軍功ノ賞トシテ薩州甌島ヲ拜領其子小川小太郎季直代甌島へ下島代々領地イタシ一季直子又太郎季有其子季久其子公季其子遠江守久季其子又太郎高季其子越後守久口初太郎其子遠江守公口其子伊勢守

季安其子越前守忠季其子有季ナリ有季母ハ吉利文祿年中 義久公御忠益ノ女ト云

代甌島御縁替田布施之高橋千石被下候有季妻ハ島津義虎之女也有季男子「藤八」早世ニテ「妹」誓之伊勢内貞朝之二男長次郎養子相成居候得共長次郎事 家久公御意ヲ以有馬丹波跡被仰付候間越前跡ハ長次郎弟ニ被仰付小川喜兵衛尚常ト云高橋千石之内五百石ヲ被下候長次郎事後ニ有馬次右エ門純生ト改ム

一諸家大概記ニハ甌島御縁替ハ父忠季ノ時トス有季事天正十四年岩屋城攻之時八代ニ在陣甌島殿トイヘル由高麗御陣ニモ渡海〇子孫ハ小川喜兵衛ト見得タリ

一「小川市右エ門本朝鮮人御帰朝之節被召還加治木ニ罷居善ク蚤ヲ養フト云」

一「小川尾張守武明 紀姓平山ノ枝族天正中牛根地頭

一「小川四郎兵衛 歳久ニ殉死法号丈身好夫禪定門

一「小川与三左エ門 松齡公御中間朝鮮御供閑カ原御退去之時御馬被テ行事能ス与三左エ門鞍ヲ取抱テ帰国ス因テ御感状切米十石ヲ賜フ子孫重富ニ在リ世々御廐付ニテ切米拝領御鞍ハ黄金ニテ十二支ヲ画ク今御廐ニアリ」

一「大河平越前守藤原降屋子孫大河平居住ハ土佐守降季子也先祖代々口州飯野大河平ニ致居住北原家ニ致隨身居候 其先ハ大織冠鎌足公十七代ノ

子肥後白菊地ニ下向菊地ト号ス六代ノ孫菊地肥後守降直隆直ノ二男五郎隆俊菊地ト改テ八代氏トナル其子大夫俊房其子駿河守光隆其子左エ門尉隆行其子左エ門尉隆綱其子左兵衛尉隆隆其子左エ門尉隆章其子駿河守隆助其子三位隆慶其子越後守隆道其子越後守隆貞其子佐守隆季ナリ何代目死後ヨリ大河平ト成ルヲ不知 永祿年中北原家御旗下ニ罷成候節 忠平公飯野江御在城之砌御家臣ニ罷成本姓八代名字ヲ改メ大河平名字ニ罷成依御意伊東相良両家ノ

御番トシテ大河平ニ居住也永祿五年「二月十三日七十三」病死「法号源宅宗淵居士忠平公御在城ハ永祿七年ナリ年間不合」

〇大河平左近將監隆充 隆屋子永祿二年「三月七日」病死「年五十三法号一中良平居士」

〇大河平仲太左エ門隆利 隆充「嫡子」永祿五年伊東方大軍ヲ以大河平ヲ攻シ時家臣岳木場筑後渡辺三兵衛竹下次郎兵衛齊藤石兵衛川野千右エ門内山伊左エ門八重尾岩助黒江三郎右エ門谷口主税吉平田良右エ門等十余人戦死外構ハ致破却候得共隆利家臣ヲ下知シ能相防候ニ付居城ヲ不被奪 忠平公此合戦ヲ賞セラシ加久藤ノ内鍋灰「塚」覆田三ヶ所ノ御墨付ヲ被下候其後依 御恩大河平ニ築一城号今城テ御人数三百人被召籠候 御感状賜天 隆利ハ永祿六年「正月廿八日」二十八歳ニテ病死

一「法号玉翁明珠居士」

〇大河平弥左衛門隆豊ハ隆充二男求摩笠木ニ戦死二十四歳法号雷窓用盛居士」

〇大河平九郎隆次隆充二男也隆利弟也隆利子ナキユヘ家督ス永祿七年五月晦日春三月飯野地頭職北原掃部助兼親ヨリ致言上 趣有之二百余ノ御番兵被召上高候トナリ 晝伊東義祐大軍ニテ陣ヲ枯松之尾ニ取リ今城ヲ攻圍防戦半ニ伊東方ヨリ使僧ヲ以降參ヲ進メ候得供不応其意城ヲ枕ニ打死ト申合相返候故敵急ニ取掛攻候ニ付防戦矢種子果隆次并一族孫左衛門隆堅孫次郎隆光以下家臣等百三十余人戦死加勢人数ニ橋口越後八重尾兵部左衛門同後藤兵衛野添新右衛門春口兵左衛門與松与一兵衛橋田主馬二両半左衛門同次郎五郎長野仲左衛門等

同前ニ打死此日伊東方戦死五百余人トイヘリ九郎隆次十五歳ナリ

〇大河平左近將監隆俊初皆越六郎左衛門九郎隆次打死以後大河平家ヲ嗣実ハ求摩之住人ニテ皆越六郎左衛門ト申人ニテ隆充之智也今城没落候伊東家ヨリ使者ヲ求摩へ差越六郎左衛門兄之所へ致宿終夜之密談ニ伊東

相良一味シテ飯野へ致発向相良家ハ大明可ニ陣取伊東ハ田原ニ陣ヲ構へ飯野ヲ取圍候テ飯野ハ手裏ニ可有由申合候ヲ六郎左衛門妻壁越ニ承付候テ密ニ家臣八重尾石見ヲ以飯野へ言上仕候ニ付伊東勢飯野加久藤へ取掛候節其手当被遊候ニ付相良之手便及相違伊東方及敗軍候儀備ニ六郎左衛門妻之働故其以後求摩ヨリ夫婦供ニ飯野江被召寄置一大河平相統被仰付候一寛永十三年一十月廿七日一右之一妻一九十二歳ニテ卒ス一法号米香妙意大姉一九郎隆次姉也六野左衛門事永禄十一年 忠平公へ奉仕同年二月一所大河平之本領被成下九郎隆次跡日被仰付左近將監下改名被仰付 忠平公兩度大河平江被為入御鉄炮拜領被仰付候元和八年一五月廿四日一病死法号一性山清木上座一

○大河平治部少輔隆商小右衛門 隆俊養子実ハ同氏源太左衛門隆重嫡子也 慶長四年十七歳ニテ庄内へ罷立山田之城攻ニ諸人ヨリ先キニ掛出候ニ付脇ヨリ袖ヲ引留候由落城後城門之鑰ヲ御預被置候由同五年伊東之家臣清武地頭稻津掃部助致逆之時八代ト官崎之間ニテ敵一人ヲ打取同年十二月 忠平公江奉願隆俊一跡致相統元和八年十一月 家久公御參勤飯野御通行之節於上江御日見治部少輔ト改名被仰付候寛永十二年一七月廿二日一五十三歳病死一法号財宗宗貨居士一

○大河平休兵衛隆賢初魯千代丸 隆商ノ一母上村治部左衛門女元和八年父ト共ニ 於飯野 家久公へ御目見一敷根中書御取次ニテ休兵衛隆賢ト名拜領一寛永十二年十二月一廿六日一鹿兒島へ被為召大河平境日父引続キ堅固御番可仕被仰聞御鉄炮并青銅千匹拜領同十五年正月為御祝儀拾羊一頭献上仕候一青銅二千匹拜領一此時叔父細右衛門事自加治木鹿兒島江被召移候旨被仰渡候万治三年一十一月四日一於江戸從 光久公摩利支天御本尊拜領被仰付候一同十四日 綱久公ヨリ御筆ノ書下ノ凶拜領一延宝七年二月一十一日一病死法号一円山享堂居士一

○大河平源太左衛門隆重 隆堅孫左衛門ト孫ス隆屋ノ二男ナリ水禄七年長子孫次郎隆光ト今城ニ戦死隆堅法号蘭貞全

芝居士隆光法 二男也今城没落之時六歳ニテ敵方ニ被生捕八歳ニ罷成号直翁宗隆居士一 忠平公商人ヲ被差越主人江代物ヲ遣シ御取返シ源太左衛門ト名ヲ被下候文禄元年高麗へ罷渡番船破リ南原城攻等軍勞泗川之戦ニ赤威之鎧青色之羽織致着用敵三人打取慶長三年唐島番船破之時敵船ニ飛乗戦死三十五歳ナリ一法号称念一淨心居士一

○大河平細モト右衛門隆尚 隆重二男也兄隆商嫡家ヲ相統ニ付隆重ノ家ヲ継元和八年十二月飯野大河平ニ親類罷居境目ノ故細右衛門人質トシテ加治木へ被召置候寛永十五年一正月一加治木ノ人数從 家久公又八郎殿へ被進候ニ付何方へモ被召移可被下由申上候処鹿兒島へ罷移由被仰渡加治木ヨリ鹿兒島へ罷移候万治元年一十一月三日一病死一法号柱巖淨林居士一子孫 大河平源太左衛門

○大河平甚右衛門隆貞隆屋四男治部左衛門 隆文入道清山ノ子 天正十三年八月堅志田城役手負七十四歳卒ス法号心叟常安居士一

一 奥關助入道休安ハ 忠恒公御小者也初テ御上洛之時御供ニテ直ニ高麗へ罷渡候高麗御供覚書アリ万治二年八十二歳之時 御記録御用ニ付書記 十文字ノ御手鑑ヲ御預被仰付即鞘ヲ迦シ腰ニ指御供仕候各被打出候節關助足ヲナラサス十三人突伏候時矢倉ヨリ關助ト呼声イタシ鑑ノ穂エカミタルソ草履踏ナカラフメト申声聞へ或依 推新公御意ト 其通イタシ又突伏候由其時二十四歳也

一 一奥彦助 歳久ニ殉死廿七人之内ナリ法号大方出器禪定門一 一 奥山左近初藤 五郎山城國之住人奥山左近將監子也 龜伯公御知人ニテ天正御当因ニ罷下居候ト 覚兼日記ニ相見得候 関ヶ原乱後御國人余多左近將監宅ニ忍居候処關東ヨリ落人相隠居候輩於有之者可被処同罪旨嚴敷制禁有之候得共左近深ク相隠シ居候ニ付其後 惟新公ヨリ御当國へ罷下候ハ、御高可被下出被仰聞候得共最早老年ニ罷成候ニ付御断申上子之藤五郎ヲ差上候藤五郎

事數ノ芸石之候ニ付被召抱御高百石御加増御切米十二石被下鹿兒島へ被召置 中納言様御代御高五十石元和年間又々五十石御加増右物成米十七石五斗被下其後又五斗相加三十石ニ被召成候 本ノ儘員數不合長十 六年國分高帳百一石與

山嶽

一尾辻佐左エ門ハ左エ門尉尚久卒去之節 日新公御哀悼之御詠歌被遊其

下ノ句ニ死手ノ山路ヲ独リ行ラント被遊候衆皆及落涙候処佐左エ門則

日新公御益ヲ頂戴任リ罷出候テ石ノ角ニテ腹ヲ破リ殉死業ハ尚久之

墓傍ニアリ 法号心烈 道春上座

一折田淡路大永六年十一月十八日 大中公御供ニテ田布施ヨリ鹿兒島

へ移ル六人ノ内ナリ

外人數ハ別冊 (ヲノ部大脇姓木尾ニアリ)

### 和之部

一和田門覺坊正信 坊或ハ院ト 子孫 和州孫左エ門 本国能登之人ニテ并尻神力坊

為御名代廻國之節被連下候山伏ニテ 惟新公御側へ被召任忍ノ上手ニ

テ候永祿七年御供ニテ飯野へ罷移候同十一年八月九日伊東家ヨリ多勢

ヲ催シ飯野御城ノ向田原ニ陣ヲ取飯野ノ虚実ヲ相同時分 義弘公於御

看経所御隠密之儀被仰付御腰物 長三尺 御後光世 御着物拝領此御腰物ノ儀ハ飯

野へ御移之節 義久公ヨリ御連強キ御腰物ニテ候間境目御心遣ヒニ被

思召候由御意ニテ被下候刀ニテ此度敵陣ニ被遣候ニ付随分心強ク可存

御家之御奉公人情可相勤ト御意ニテ被遊御落涙左候テ於奥朝之御膳過

御手水差上候時被遊御手討候処正信急ニ逃去奥表番所ヲ走通り伊東陣

ニ落掛候処カノ陣ヨリ物見トシテ罷出居候モノ兩人 肥田木丹後守 落合何カシ 二行

アヒ鑑ニテ突レ候一人ノ鑑ハ脇ノ下ニ通り一人ハ股ノ間ニ通り身ニ当

ラス其時正信様子有之御陣場ハ參ルモノニテ候御助可給ヨシ申ニ付兩

人子細ヲ相尋候処正信申候ハ兵庫殿近習ニ被召仕候 本「覽」 申モノニテ

女房ニ仕違ヒ候テ既ニ及手討候得供不慮ニ逃延候テ御助可給ト申テ刀

大小共ニ相渡無儀陣場江被連越候左候テ彌敷穿鑿有之候得其無偽旨ヲ中究候ニ付都於郡ニ差遣於神前鉄火トラセ可有之由ニテ鉄火之修行有之見物人群集イタシ神主牛王ヲ持来リ正信カ手ニ敷候砌右ノ手ヲ上ニ重ネ受候得トモ存旨有之左ヲ上ニ重ネ直シ候ヘハ奉行衆不審候ヘトモ男ハ左ヲ用候由申候テ則鉄火ヲ手ニ請無異儀取スマシ御棚ニ相納候

夫ヨリ突之落人ニ相究リ刀大小被相渡ニ付有付ノ内ニ被仰付候首尾不

残相仕廻候然処偽謀露顯明口成敗可被申付ト承付其夜漸々城ヲ忍ヒ出

如飯野罷掃リ件之様子申上候ヘハ奇特ニ致助命御奉公相勤再被遊 御

覽幸ニ被思召候由御意ニテ御饗美トシテ御切米三十石被成下候田字申

上候ハ難有奉存候ヘトモ御高百石余被下置候ニ付余リ御厚恩深ク奉存

候間御断申上差上候 本 天正六年三月廿一口 忠平公御下知ニテ赤塚真

重花堂大円坊等ト霧島座主秀証僧都ヲ誅ス 其後高麗御供願申上候処

惟新様ヨリ大峰江三十三度ノ御誓願被遊候間相勉可申旨被仰付入峰

仕罷下候砌於大坂自身商船ニ乘リ高麗へ罷渡リ御陣場へ參上御守札差

上候然処正宗ノ御腰物御國元へ被遣候間持參可仕旨被仰付候故帰國仕

候慶長六年蒲生御城内へ被召移同十一年平松へ罷移リ同十三年加治木

江被召移候寛永七年五月卒ス法諡權大僧都法印円覺臺ハ加治木城山

ニ有之眼病ヲ祈レハ平愈ス參詣人多シ

○和田秀存坊ハ正信嫡子二十四歳ニテ関ヶ原戰死

○和田甚兵衛 秀存 於加治木小番相勉其後大番相勤候ヘトモ依願 光久公

御代小番ニ罷成候此子孫 本 孫右衛門

○和田秀膳坊 正信 兄戰死ニ付跡目被仰付候

一驚頭不動院 了孫多賀別當 總領家ナリ 其先祖不知 竜伯公御意ニテ近江国へ罷登リ

多賀大明神ヲ奉護罷下候御意ニテ多賀之儀ハ御奇命神ニテ候間竜

寺御屋形ヨリ日向ニ御勸請被遊毎日御拝領可被遊候依之浜崎之城江御

勸請ニテ御宮御造立天正七年己卯二月六日御遷宮ニテ其時ノ御家老伊

集院幸侃ノ棟札有之不動院事モ浜崎ノ城へ被召移神領御寄附有之宮地

三段五畝被召付置山号ハ浜崎山寺号ハ玉台寺不動院ト被仰付也 本

行年 四月



中午日祭礼有之御同  
姓ノ人拜礼スト云

「ヲノ部」

「一大脇但馬利為孫四郎 其先鎮西八郎為朝ノ次男次郎為清其子孫四郎為

目シ四ツ巨紋ヲ母ヘシム是為朝戰亡ノ故ナルヘシ其後 得仏公ニ從テ薩州ニ下  
向ス日州都ノ郡大脇村ノ名士職ヲ被宛行大脇ヘ罷下家守トス其子孫四郎為南大  
脇氏トナル為道十一代ノ孫民部左衛門親為入道白庵伊東氏ニ屬ス民部 朝鮮徒  
左衛門口綱入道定庵亦源四郎始テ來テ 松齡公ニ奉仕ス其子利為ナリ

軍河川合戰赤白雜糸威庄内関ヶ原御供子孫 大脇覺兵衛

「一大脇内蔵 利為ノ支族ナリ豊後徒軍敵二人ヲ斬ル 久保公御上京御供

此時田那辺屋道与ヨリ銀十貫  
目借用ニテ費用ニ給スト云

「一大脇七郎為乘 松齡公朝鮮御供

古老物語ニ大脇主馬ト  
云人アリ但馬同人歟」

本藩人物志 卷之五

加之部

「一 川上火和守昌久虎火丸 子孫 五代太守 道鑑公他腹長男越前守頼

久孫三郎左衛門上野介太夫 其子上野介親久其子上野介家久其子上野介教

久判官於信州戰死三十一歳 其子上野介兼久弟也其子三郎五郎行久当代賜河上

八病ニテ桜島ニ活仕 藤野赤尾原大迫村 其子上野介公久其養子右衛門尉忠實実同姓信濃守 其子

上野介安久其養子昌久也弟也 勝久公御行跡悪敷候ニ付天文二年昌久

御一門 以下十六人連判ヲ以実久ニ相付奉諫候ヘトモ御承引無之是偏ニ

妄人末弘伯耆守一國老加治木地頭「サ、ヘ申所ナリトテ翌天文三年十

月廿五日昌久於云谷山皇徳寺ニ誅ニ伯耆守一 勝久公御驚被遊根占ヘ御ハ

ツシ被遊翌四年四月三日密ニ鹿兒島ヘ御帰館昌久ヲ川上城ヨリ召出於

大興寺切腹被仰付也今大興寺ノ前毘沙門 死骸ヲ鳥越ニ葬リ杉三本ヲ植テ

墓標トス三本杉 丁今有 法名華翁淨榮居士殉死五人蓮香休八宿木左近綱倉筑後